

靈界物語 第一四卷 如意寶珠 丑の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第十四卷』愛善世界社

1995(平成07)年11月05日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

目次

序歌 じよか

信天翁四 あはうどり

凡例 はんれい

總論歌 そうろんか

第一篇 ごりむちう
五里夢中

第一章 三途川せうづがは〔五五一〕

第二章 銅木像どうもくぞう〔五五二〕

第三章 鷹彦還元たかひこくわんげん〔五五三〕

第四章 馬詈ばり〔五五四〕

第五章 風馬牛ふうばぎう〔五五五〕

第二篇 幽山靈水いうざんれいすゐ

第六章 樂隱居らくいんきよ〔五五六〕

第七章 難風なんふう〔五五七〕

第八章 泥の川どろかは〔五五八〕

第九章 空中滑走くうちゅうくわつそう〔五五九〕

第三篇 高加索詣コーカスマゐり

第一〇章 牡丹餅ぼたもち〔五六〇〕

第一章 河童かつぱの屁へ〔五六一〕

第二章 復縁談ふくえんだん〔五六二〕

第三章 山上幽齋さんじやういっさい〔五六三〕

第四章 一途川いちづがは〔五六四〕

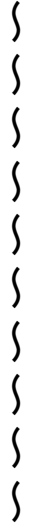
第五章 丸木橋まるきばし〔五六五〕

第六章 返り咲かへさき〔五六六〕

第四篇 五六七號みろくがう

第十七章 一寸一服ちよつといつぶく〔五六七〕

跋文はつぶん



序歌 じよか

五六七の殿に招集る みろくとの おぎまつ 清き心 きよこころ にかけてまくも

畏き天の御中主 かしこ あめ みなかぬし 皇大神 すめおほかみ を初めとし はじ

高皇産靈の大御神 たかみむすび おほみかみ 神皇産靈の大御神 かむみむすび おほみかみ

大地の遠津祖神の だいち とほつおやがみ 國常立の大御神 くにとこたち おほみかみ

豊國主の大御神 とよくにぬし おほみかみ 日の神國 ひ かみに を知食 しるしめ す

天照皇大御神 あまてらすすめおほみかみ 神素盞鳴の大御神 かむすさのを おほみかみ

須世理之姫の大御神 すせりのひめ おほみかみ 御空 みそら を傳 つた ふ月讀 つきよみ の

皇神 すめかみ 始め奉り はじ たてまつ 天津神 あまつかみ たち八百萬 やほよろづ

國津神 くにつかみ たち八百萬 やほよろづ 神 かみ の稜威 みいづ も大八洲 おほやしま

島の八十島 しま やそしま 八十の國 やそ くに 所々 ところどころ の大社 おほやしる

小さき社 ちい やしる に常永 とこしへ に 鎮 しづ まり玉 たま ふ千萬 ちよろづ の

廣ひろけく深ふかく神界しんかいの 仕組しぐみを悟さとらせ玉たまへかし

天勝あまかつく國勝こにかつく奇魂くしみたま 千憑ちより彦神ひこがみ曾富そほど戸神ががみ

亦またの名な久延くへ毘古びこ神御魂かむみたま 此この大本おほもとに參まひ集つどふ

信徒まめひとはじめ世よの中なかの あらゆる人ひとに惟かむながら神

御靈みたま幸さちはへましまして 各自かくじの御魂みたまに優すぐれたる

御魂みたまかからせ玉たまひつつ 今日けふが日ひまでも知しらずして

神かみの依よさしの神勅しんちよくを いと疎略おろそかに扱あつかひし

罪咎つみとが穢過がゑやまちを 直日なほひに見直みなほし聞直ききなほし

宥ゆるさせ玉たまひて神々かみがみの 神慮しんりよを深ふかく覺さとるべく

神幽現しんいうげんの御聖言ごせいげん 守まもらせ玉たまへ神國かみくにの

御祖みおやの神かみの御前おんまへに 畏かしこみ敬あやまひ願ねぎ奉まつる

ア、惟かむながら神々かむながら 御靈みたま幸さちはへましまして

出口でぐち教祖けうその御教みをしへを うまらにつばらに説とき明あかす

如意寶珠にょいほうしゆの物語ものがたり 暇ひまある毎ごとに嬉うれしみて

読み窺ひつ天地の
神の尊き勳功を

知らさせ玉へと瑞月が
國の御爲世のために

心を籠めて祈りつつ
國常立の大神の

御言かしこみ諾册の
二柱神漂流へる

地球をば修理固成むと
天の沼矛をさし下ろし

鹽コヲ口コヲ口に掻き鳴して
淤能碁呂島を生み玉ひ

御國の胞衣と定めつつ
天の御柱國柱

見立たまひて八尋殿
作りたまひて二柱

妹兄の道を常永に
婚姻たまひて大八島

國々島々數多生み
青人草の始祖等や

萬の物を生みたまひ
普く諸の神人を

地上に安住させむため
太陽大地太陰の

諸々の神たち生み玉ひ
各自々々の神業を

依さし玉ひて萬ごと
始め開かせ絶間無く

勤しみ玉へる有難さ

天照皇大御神

國の御祖の大神の

大御心を心とし

青人草を悉く

恵み幸はひ愛くしみ

いや益々に蕃息榮えしめ

功竟へ玉ふを初めとし

大御神業をば受持ちて

天津國をば知食し

五穀の種を御覽し

これの尊き種物は

現しき青人草たちの

食ひて活くべきものなりと

詔らせ玉ひて四方の國

隈なく植付けたまひたる

ごとく御靈の幸はひて

如意の寶珠の物語

世人の靈魂の糧となし

四方の國々島々へ

開かせ玉へ惟神

尊とき神の御守りに

神の言靈幸はひて

荒ぶる神を悉く

拂ひに拂ひ語問ひし

岩根木根立醜草の

その片葉をも語止めて

是の教に一筋に

靡かせ玉へ天地の

神の御前に願ぎ奉る。

信天翁四

曲亭馬琴の向を張り 止め度も無しにダラダラと

長い寝言の物語 その内容は大本の

幹部の誰彼目標に 命の假名を附會して

又もや現世に有名な 人物數多藉り來たり

の神に仕立て上げ 大本教の過去未來

現在までも描き出し 王仁の妄想を挿入し

解らぬ様に扮色し 江原小彌太の作りたる

新舊約や大乘經 甘く種をば漁りつつ

幹部の外は誰も知らぬ
カラクリなりと強誣なし
阿呆陀羅長い物語
なぞとケチをば付けて居る
イカサマ新聞紙が現はれた
彼の記述に面白い
一丁許り遠くから
見え分くる様な大字にて
書いた原稿二十二巻
二萬六千七百枚と
自稱して居る云々と
能くも馬鹿氣た言をいふ
ソナ原稿が世界中
探しても有らう筈が無い
馬鹿を盡すも程がある
いかに新聞紙の責任を
知らぬ記者だと飯田とて
コリヤ又ゑらい脱線だ
時候の勢で逆上せたか
無責任にも程がある
餘りの事で呆れ果て
言葉も出ない次第なり
そののみならず瑞月が
一身上に相關し
捏造記事を満載し
中傷惡罵のありたけを
盡して快哉叫ぶとは
非人道にも程がある

ア、惟神々々かむながらかむながら 御靈幸はひましまして
彼等が心に潛みたるかれら こころ ひそ 醜の邪神を逸早くしこ まがみ いちはや
被清めて眞心にはらひきよ まごころ 救はせ玉へ天地のすく たま あめつち
尊とき神の御前にたふ かみ おんまへ 謹み敬ひ願ぎ奉る。つつし めやま ね まつ

大正十一年十月

王仁識

凡例はんれい

一、本巻の物語は第一巻より通算して第【五】百【六】十【七】章といふ吉數を以て終つてゐます。

一、綾部の某新聞が靈界物語に對してテコヘンな中傷記事を掲載したので、又々信天翁が飛び出しました。

一、巻尾の跋文は三途の川および三途の鬼婆、一途の川等の意味について詳述され、なほ大本神諭と佛教の用語とについて説明された必讀の文字であります。

大正十一年十月

口述著者識

總論歌

思へば深き神の道
神の力の現はれて
中の八日の正午頃
かき集めたる高砂の
したたる恵に霑ひつ
二十四年の光陰を

大き正しき十の年
奇しき御教を奇九の月
教の【中野】玉拾ひ
松葉の雫しとしとと
神の【出口】の【王仁三郎】
雲に蔽はれて桶伏の

(出口)

山やまより高たかき大おほ稜みいづ威いづ 照てらすときはの松まつの世よと

いよいよ現あらはれ鍛きたへたる 十とつか握つかの劍つるぎ抜ぬき放はなち

曲まが津つのたぐみ斬きりまくる 五み六ろ七くの神かみの御お蔭かげもて

言こと葉はの玉たまの緒をいのち毛げの 筆ふでの運はこびもいと速はやく

諸ももの妨さまたげみづの糸いとの 戍いぬの春はる橋はしかけまくも

かしこき神かみ代の物ものがたり語ご 五み六ろ七くの神かみに因ちなみたる

五ご百ひやくと六ろく十七じふしちの節ふし 言こと解とき了をはり書かき終をはる

堅かき磐はとき磐はの道みちを いよいよ開ひらく如ごと月の

下しもの七なな日の七ななつ時とき 神かみの集つどへる【谷たに村むら】や (谷たに村むら)

花はな咲さく神かみ代よを【松まつ村むら】氏し 此ここまで歩あゆみ【北きた村むら】の (松まつ村むら、北きた村むら)

目め出でたく今け日ふの日本にほん晴はれ 【外とやま山ま】のかすみいつしかに (外とやま山ま)

はれて嬉うれしき今け日ふの空そら 心こころも【加か藤とう】道みちの子この (加か藤とう)

誠まことつくしの立たち花はなの 非とき時じくかはれ三あな五な教けう

殊ことに十じふ四しのこの卷まきは 神しん界かい現げん界かい幽いう界かいの

三千世界の靈柱

三五教の宣傳使

日の出別の神司

從ひ奉る音彦が

猿山峠の森林に

彌次彦與太彦兩人と

ウラルの神の大目付

數多の捕手に圍まれて

血路を開き小鹿山

峠にかかる折からに

又もや敵に前後より

取り圍まれて止むを得ず

千尋の溪間に飛び降り

氣絶せしまま幽界の

路を辿りて三途川

脱衣婆々アに出會し

千言萬語を費やして

面白可笑しくかけ合ひつ

どうなとなれよ儘の川

裸體の儘に打ち渡り

ピタリと山に突あたり

大法螺吹けば足曳の

山も呆れて雲かすみ

逃げ行く跡に地中より

又ツと湧き出た銅木像

泡吹く鼻こく小便しぼる

三人を一度に煙にまき

空に懸れる太陽に

あたまを打つて逃げて行く
アフォンとしたる時もあれ
呼び醒まされて気が附けば
身を横たへて居たること
レコード破りの暴風に
亦もや三途の川の邊に
いくら負けても勝彦の
一途の川の二人婆々
欲と高慢出刃庖刀
果てしも知らぬ長の旅
詳しく寫した物語
面白おかしく述べたてし
とり留もなく吹きまくり
あなをかしこ
あなをかしこ

音彦ヤジ彦ヨタ彦は
日の出別の一行に
小鹿峠の谷底に
十八峠の坂道で
吹かれて天へ舞ひ上り
迷ひ進みし彌次彦や
鼻息あらしき物語り
ホシイホシイと泣言の
男子と女子の争論の
六公お竹のロマンス
比翼連理の蒸し返し
夢とうつつとまぼろしの
煙に捲いたるこれの巻

第一篇 五里夢中

第一章 三途川（五五一）

おほうなばら 大海原に漂へる

たから 島の島と聞えたる

りうぐうかい 龍宮海の 一つ島

たから 寶の數もオセアニヤ

ひこ ウラルの彦の神勅を

ほう 奉じて來る六人が

しんじんけんこ 信神堅固の守護神

もと 元は龍宮に仕へたる

かみ 神の力を田依彦

たま 魂を研いて飯依彦の

かみ 神の司と現はれて

ぜんげんびし 善言美詞の言靈に

ことむけやは 言向和す勢は

をしへ ウラルの教の宣傳使

みとせ 三年の苦勞も水の泡

なに 何の土産もアルパニー

港みなとを後あとに千萬ちよろづの

浮島原うきしまばらを乗越のりこえて

航路かうろも長ながき鶴つるの國くに

鶴つるの港みなとを立出たちいでて

フサの海うみまで歸かへり來く

時ときしもあれや東北とうほくの

風かぜに煽あふられフサの海うみ

三五あななひけう教せんの宣傳でんし使

日ひの出での別わけに巡めぐり合あひ

タルの港みなとに上陸じやつりくし

足あしさへダルの河かはの邊へを

徐々しづしづ進すすむシツの森もり

神かみの光ひかりに照てらされて

茲ここに心こころを翻ひるがへし

忽たちまち變かはる三五あななひの

教司をしへつかさに伴ともなはれ

フル野のヶ原はらを打渡うちわたり

醜しこの岩窟いはやを探險たんけんし

コシの峠たうげもいつしかに

わたりて茲ここに猿山さるやまの

峠たうげの麓ふもとに一同いちどうは

まどろむ折をりしも音彦おとひこが

眠ねむりを醒さまして眺ながむれば

月つきは木この間まに輝かがやきて

茲ここに五人ごにんの宣傳せん使でんし

影かげも姿すがたも長ながの旅たび

彌次彦やじひこ與よ太彦たひこ伴ともなひて

寄よせ來くる敵てきに追おはれつ

荒野を渡り河を越え

曲の關所を乗り越えて

泥田に落ちし裸身の

足も輕げに小鹿山

四十八坂に來かかりし

時こそあれや前後

數多の敵の襲來に

衆寡敵せず音彦は

彌次彦與太彦諸共に

千尋の谷間に飛込みて

谷間流るる速川の

水の藻屑となりひびく

谷間を渡る荒風は

實に凄じき許りなり。

彌^や世^よの中^{なか}は能^よくしたものですな。一方^{いつぱう}には斷^{だん}巖^{がん}屹^き立^{りつ}したる山^{さん}腹^{ぶく}を控^{ひか}へ、一方^{いつぱう}に
は千^{せん}仞^{じん}の谷^{たに}間^ま、かてて加^{くは}へて前^{ぜん}後^ごより數^{あまた}多^たの敵^{てき}に取^{とり}圍^{かこ}まれ、衆^{しう}寡^{くわ}敵^{てき}せず、命^{いのち}を的^{まと}
に溪^{たに}川^{がは}目^めがけて、ザンブと許^{ばか}り飛^{とび}込^こみた時^{とき}の心^{こころ}持^{もち}と云^いつたら、何^{なん}ともかとも知^しれ
ぬ苦^{くる}しさであつたが、エーままよ、神^{かみ}様^{さま}に捧^{ささ}げた生^{いのち}命^{めい}、一^{いつ}寸^{すん}先^{さき}は神^{かみ}の御^み手^てにある
のだと覺^{かく}悟^ごをきわめ、飛^{とび}込^こみ見^みれば、都^つ合^{がふ}の好^よい青^{あを}々^{あを}とした淵^{ふち}、素^{もと}より裸^{はだか}の吾^{われ}々^{われ}
兩人^{りやうにん}は、水^{すゐ}泳^{えい}には逃^{あつら}へ向^むだ。宣^{せん}傳^{でん}使^しはドツサリと、ベラベラした装^{しやう}束^{そく}を身^みに纏^{まと}つ

て居ゐられたものだから、水すゐ中ちゆうへ陥はまつた時ときには、大たい變へんなお苦くるみでしたな。幸さいひ吾われ々われ
兩人りやうにんが眞ま裸はだかになつて居をつたものだから、溺で死きしもせずに助たすかつたと云いふもの、斯こう
なると親おや譲ゆづりの裘かほごろもで無む一いち物ぶつの方が、千せん騎き一いつ騎きの時ときには何なにほど樂らくだか知しれぬ。それ
だから神かみ様さまが持もち物ものを輕かるくせいと仰おつ有しやるのだ。裸はだかで物ものを遺おと失とさぬと云いふ事ことがある。
裸はだかくらの結けつ構こうなものはない。ナア與よ太た公こう……」

「ウンさうだなア、泥どろ田たへ落おちて赤ま裸はだかになつた時ときには、裸はだかで道だう中ちゆうがなるものか、
ア一な情なさけない事ことだ、せめて禪まわ丈だけなつと欲ほしいものだど、執し着ふち心やくしんが離はなれなかつたが、
斯こう言いふ時ときには生うまま赤あか兒ごの赤ま裸はだかが一いち番ばん都つ合が好いい。これも神かみ様さまのお蔭かげだ。三人さんにんが
三人さんにん共とも重おもい着き物ものを着つて居をつたなれば、誰たれも彼かれも助たすからずに、幽あ界のよとやらへ旅たび立たち
をする所ところであつたにナア」

音おと公こうは、

「ソレモさうだ、神かみの道みちに荷に物もつは不い要らぬ。併しかし乍ながら何なんとかして、木この葉はでも編あん
で着き物ものを拵こしらへなくちや、この先さき旅たびする譯わけにも行ゆかぬ。風ふう俗ぞく壞くわ亂らんでポリス先せん生せいに科くわ
料れうでも取とられちや見みつともない。ぢやと云いつて泥どろ棒ぼうする譯わけにもゆかず、困こまつたも

のだ。草でも編みて、一つ着物でも作つたらどうだらう、のう彌次公やじこう」

「ウン折角裸にして貰つたのだから、これも惟神だ。逆轉は御免だ。ナー二構うものか、面の皮の慣はせとか云つて、何ほど寒くつても、面の皮には薄着一枚着せた事はない、慣れて了へば眞裸でも、寒くも暑くも何ともない、身は身で通る裸ん坊だ、裸の道中も面白いよ、音彦君」

「それだと云つて、どうも不恰好だ。吾輩の衣類を分配して、一人は羽織、一人は袴、一人は着物と云ふ風にやつたらどうだらうかナア彌次公」

「ヤアそいちア、尚々恰好が悪い、それこそ化物の行列みたやうだ。エー構はぬ、行きませうかい。與太公ドウダイ」

「日が暮れたと見えて、非常に暗くなつたぢやないか。暗い所を歩くのは、裸でも何でも構はぬ、見つとも良いも、見つとも悪いも有つたものぢやない。一つ大手を擴げてコンパスの續く限り前進せうかい」

と三人は暗の路を當途もなく足に任せて進み行く。音公は、
「ヤア、俄に明るくなつて來たぞ。一體此處は何處だらう、大變な大河が南北に流

れて居るぢやないか、河向ふには得も言はれぬ金殿玉樓が、雲に浮いた様に見えて來出した。ナンドか氣がいそいそとして、一刻も早く行きたい様な心持になつて來たワイ」

彌次、與太兩人は、

「ホンにホンに、立派な建築物が見えますな、是を見ると勝利の都に近付いた様な心持がして來ました、……ヤア有難い有難い、進退維谷まつて、九死一生の谷間に飛込みの藝當をやつたと思へば、豈圖らむや、コンナ結構な都に近付いた。是だから怖い所へ行かねば熟柿は食へぬと云ふのだ。有難い有難い、それにしても、鷹公、梅公、岩公、駒公一同は、どうして御座るであらう、猿山峠の急坂を、瘦馬の尻を叩いて行軍の眞最中だらうか。是だから先へ行つた者が手柄をすると、後れた者が手柄をするとも分らぬものだ、何事も神のまにまに任すほど安心な事はないなア」

と語りつつ、三人は漸く河幅廣き水底深き青々とした流れ岸に着いた。彌次は驚いて、

「ヤアこの河は立派な河だナア。大抵の河は、通常は河原ばかりで、横の方を帯の様に、青い水がホンの形式的に、お條目の様に流れて居るものだが、この河はまた例外だよ、河一面の流れで、しかも青味立つた清水が流れて居る。大抵の河は、河一面に水の流れる時は大雨の時で、泥々の眞赤な水だが、コラまた稀代に立派な河だワイ」

與太彦は、

「河は立派だが、何時まで寝めちぎつて居た所で、橋も無ければ、舟も無いぢやないか、どうして渡つたがよからうかな。これや一つ、何とか工夫をせねばならないぞ」

「ナニ、吾々は幸ひ眞赤裸だ。水泳の妙を得とるのだから、對岸へ流れ渡りに渡れば良いのだ。斯う言ふ時には、裸一貫の無一物は、大變に都合が好いワイ、唯困るのは音彦の宣傳使様だけだ……もしもし宣傳使様、一層の事あなたのおめしものを全部この河へ投げ込んで、三人共裸になつたらどうですか、牛の子でも附合を致しますで……」

「それもさうだが、お前はまだ普通の人だ。吾々は三五教の宣傳使といふ重荷を
持つて居る。この被面布も大切に致さねばならず、法服を棄てる譯には行かない。
ア、こうなると、責任の地位に立つ者は辛い者だ、窮屈不便利至極だわい」

「あなたは、宣傳使の法服だとか、被面布だとかに執着心があるから可けないの
だ。保護色に包まれて居るから、自由自在の活動が出来ないのだ。裸になれば又
裸で立行くものです。カメリオンの様に、青い草に交れば青くなり、赤い葉に止
れば赤くなり、白い木にとまれば白くなると云ふ、變幻出没自由の活動を執るの
が、宣傳使の寧ろ執るべき手段ではありますまいか。大歳の神は、宣傳使の服を
脱いで俄百姓となり、農夫の服を着て農業を手傳ひ、立派に宣傳使の本分を盡さ
れたと云ふ事です。河を渡るのには裸でなくちや駄目だと彌次彦は思ふがナア
音「さう云へばさうだが、せめてコーカス山にお參詣する迄音彦は、この服は離
したくない」

「あなたはさうすると、何時迄も此處に、河端柳ぢやないが、水の流れをクヨク
ヨと見て暮すと云ふ方針ですかい」

「ヤア進退維谷まつた。音彦もどうしたら可からうかなア」
と雙手を組み思案に暮れて居る。傍に藁を以て屋根を葺いた小さい家が目に着いた。

彌「ヤア此處に、一戸、村落があるワイ、あまり小さいので、見落して居つた。先づ先づあの館へでも侵入して、ユツクリと河端會議でも開催しませうか」
と先に立つて彌次彦は、藁小屋の中に進み入る。

「ヤアこの藁小屋の中には、ナンタか生物が居るぞ。コンコンと咳拂をやつて居るワイ、もしもし宣傳使さま、これは後家婆アの隠れ家と見える、マア一服さして貰ひませうかい……」

小屋の中より皺枯れた婆の聲で、

「誰だ誰だ、この河邊に立つて何を囁いて居るか。此處はどこぢやと思ふて居る、三途の河の縁だぞ」

と聞くより彌次彦は婆々を睨み乍ら、
「ナニツ、三途の河の縁だと？ 全然冥途の旅の様だ。ソんなラ大方着物を脱が

す婆ぢやないか。ヤアナダか氣分が悪いワイ。モシモシ宣傳使さま、何をグズグズして居るのだい、早く来て鎮魂をして下さいな、怪しからぬ事を云ふ老婆が居りますで……」

「彌次彦お前は、何を怖さうに言ふのだ。乞食婆アだよ、放つときなさい」

「乞食婆とは何だ、三途河の鬼婆だぞ。サアサア娑婆の執着をスツクリ流す爲に、眞裸にしてやらうかい」

と藁で編みたる押戸を開けて、白髪頭をヌツと出し、澁紙面を曝して現はれて來た。

彌次彦は、

「ヤアナント背の高い、小面憎い面をした老婆だな……オイ糞婆、貴様は良い加減に改心をせぬかい。よい年しよつて、何時までも欲の皮をひつぱると、死んだら地獄に落ちるぞ」

「わしはお前達の着物を脱がす役だよ。サア綺麗サツパリと脱いで行かつしやれ」
「何を吐しよるのだ。貴様は他人の着物を脱がして、澤山に箆笥の中へ仕舞込み」

置いても、末の短い貴様が、死んだならば冥土とやらへ行かねばなるまい。その時に三途河の鬼婆が、みな脱がして了ふと云ふ事だぞ。あまり欲をかわくない」

「その三途川の鬼婆が此方さまだ。愚圖々々言はずに脱がぬかい」

「ヤア此奴ア盲婆だな、裸の俺に着物を脱げつて吐しよる、良いケレマタ婆も有れば有るものだな。ワツハ、ハ、ハ、」

「お前は先祖譲りの洋服を着とるぢやないか、兔の皮を剥いたやうに、頭からクレクレと剥いてやるのだ。彌次彦覺悟は良いか」

「これは裘だぞツ」

「河の縁で脱がすのだから、裘は尚結構だよ」

「エー洒落ない、婆の癖して………オイ與太公、宣傳使さま、チツト来て下さらぬか、思ひの外シブトい婆だから」

「ヤア、彌次さま、どうやら此處は三途の河らしいぞ。小鹿峠から谷川へ飛込んだ時に、氣絶した途端に、どうやら幽界の旅行と急轉したらしい、どうも空気が變だ。ナア與太彦、お前はどう思ふか」

「宣傳使のお考へは違ひますまい。私も何だか、四邊の状況が娑婆とは違ふ様な気が致しますワ……………」

「コラコラ、お前たち三人の奴は、俺を誰だと思ふて居る、俺の面を見よ」
彌次彦は顎をシヤクリ乍ら、

「ツラツラ考ふるに、何とも早、形容の出来ない怪體な面付だナア。ひよつとしたら、宣傳使のお言葉の通り、三途川の鬼婆かも知れぬワイ」

「合點が行つたか、親重代の寶物たる黒い土瓶の中へ小便を垂れる様な、汚れた身魂の人足だから、此處で赤裸にして靈の洗濯を爲てやるのだよ」

「ヤア合點の行かぬ婆アだ。土瓶の事まで吐しよる、貴様はお竹の母親か」
「お竹の母親か、父親か、よう考へて見る。彌次彦のガラクタ奴」

「黒い黒い手で握飯を握りよつて、手鼻汁をかみ、涕を落した握飯を拵へた汚い老婆に比べると、モ一つ汚穢い奴だ。俺の靈が汚いから洗濯せいと言ひよるが、

「マア貴様の汚い顔から洗濯せい……………靈魂を洗濯せい、美しうなれと、口ばつかり他人に言ひよつて、自分の汚い事は知らぬ顔の半兵衛でけつかる。困つた者だ

見をするのは、釋迦に經を説く様なものだよ」

「お前達は口ばかり立派な信者だ。舌と耳とは極樂へ遣つて、その外はみな地獄行だ。舌と耳とを俺が預つて、是から高天原へ小包郵便で送つてやらう。マア裘を脱ぐより、第一着手として舌を出せ、舌と耳とを切つてやらうかい、彌次の奴」

「エー何處までも婆は婆らしい事を吐しよるワイ。舌切雀の話の様に、舌を切つてやらうの、桃太郎の話の様に、洗濯をするのと、らしい事を言ひよるワイ、アハ、ハ、ハ。オイ婆、この河には随分桃が流れて来るだらう。二つや三つは貯へて居るだらうから、一つ俺に招伴させぬかい、腹が空つて聊か迷惑の態だ」

「お前の食ふのは此處に預つてある、サアサア是なと食つて着物を渡すのだよ」と眞つ黒けの握飯を二つ出す。

「ヤア此奴ア、お竹の宅の柴屋で見た握飯だ。コンナ垢の着いた、鼻水だらけの握飯が假令餓えて死んでも食はれるものかい、渴しても盗泉の水を吞まぬ俺だぞ」

「どうしても食はねば、貴様を此鬼婆が代りに食つて了ふがよいか………勿體な

い、粒々辛苦になつた結構なお米で拵へた握飯を、黒いの汚いのは何の事だ。

たとへ鼻水が入つて居らうが、百分の一位なものだ、何ほど綺麗な人間でも、百分の八九十までは汚い分子が含蓄して居る。貴様の肉體つたら、九分九厘まで眞つ黒けの鼻水握飯の様なものだぞ。俺が辛抱して食てやると言ふのだから、これが冥途の食納め、喜んで食はぬかい」

彌次彦は首を傾けて

「オイ與太公、サツパリ譯が分らぬぢやないか、貴様の食ひ残しだ。おれや元から一つも食はないのだから、貴様が食つたらよからう」

「私 はあなた様の分まで頂戴致しまして、スツカリ食べるのは、あまり禮を失す
と思ひ、二つ丈残して置きました。決して汚いから残したのぢやありません、
此れは彌次彦の領分だと思つて遠慮したのです……もしもお婆アさま、私は
腹一杯頂戴したので、それ以上は食へなかつたのと、彌次彦に愛想に残してやつ
たのですから、決して決して、汚いの何のといふ、ソナ冥加の悪い心で残した
のでは御座いませぬ。これは彌次彦の食ふべきもので御座います」

「エーエー、與太彦までが怪しからぬ議案を出しよつた。河端會議だから握り潰しといふ譯にも行くまい。三途の河へ一瀉千里の勢で、否決流會だ」

と握飯を握つて河に棄てむとするを、婆はその手をグツと握りたり。彌次彦は、

「ヤア冷たい冷たい、氷のやうな手をしよつて……手が痺れて了ふワイ」

「ヤア不思議だワイ、お前の靈は、遠の昔に痺れて了ふて免疫性の無感覺だと思

つたに、冷たいのが分るか、それではチート何處かにまだ息があるワイ、コンナ

所へ來るのはチト早いだけれど、修業の爲に、我を折る様に、この河を渡れ、

裘を剥ぐ丈は免除してやらう。随分冷たい河だぞ、この河が冷たくなって渡れる

様ならモウ駄目だ。冷たければチツトはまだ人間の息が、靈に通ふて居るのだ

よ
「

「オイ婆アさま、お前も随分屁理窟を言ふがそれ丈理窟が分つて居れば、この彌

次彦は寒うて困つとるのを、チツトは同情するだらう。亡者の着物を毎日追剥し

よつて、澤山に蓄めとるだらうが、俺に似合ふ様な着物を一枚分配して呉れぬか、

どうで老若男女色々色々と風も違ふだらうから、俺に打つて附けた様な着物もあるだ

らうにのう」

「エ、附上りのした男だなア、お前に着せる様な着物は一枚もありやしないよ。みな河へ脱がしては流し、脱がしては流し、今ここに五枚ある丈だ。それもみな子供の着物だ。一枚は俺が着にやならぬし、五枚の着物を貴様に一枚やれば、モウあとは四枚だよ」

「ヤアこの婆、なかなか洒落てけつかる、風流婆アだなア」

「定つた事だ、何事も執着心を棄てて、風流で胸の垢を洗濯婆アだ。お前も早う身魂の洗濯をせないと云ふと、腹の中に毛蟲がわいて、彌次身中の蟲となつて、お前の肉體を亡ぼす様になるぞ」

「婆さま、オツト待つた、俺は亡者じゃないか、一旦亡びた者が復亡びるといふ事があるかい」

「顯幽一致、生死不二だよ。今の娑婆に居る奴は、肉體は生きて居るが、靈はみな死にたり、腐つたり、亡びて了つて居るのだ。併し乍ら、貴様は感心な事には、肉體は亡びたが、まだ靈に生命があるワイ」

「定つた事だい、【せいめい】無垢の生杵の大和魂だもの。萬劫末代朽つる事なく亡ぶ事なき靈主體從の彌次彦さまの本守護神は、永世不滅の神の分靈、萬劫末代生通しだ。肉體は亡びても、吾々の靈は至極健全だ。これから三途の河を横渡りをして、心の鬼も地獄の鬼も片ツ端から言向和し、地獄を化して天國とする覺悟だ。オイ婆ア、貴様もコンナ所に弱い者苛めをして、亡者に對し剥取強盜をするよりも、早く改心を致して俺のお伴をせないかエーン」
與太彦は、

「オイ彌次彦、しやうもない事を言ふない。地獄開設以來、三途川の鬼婆と云つて、この河に備へ付の常置品だよ。ソナ者でも閻魔の廳へ連れて行つたが最後、天則………ドツコイ地獄則違反者だ………と云つて、罪に罪を重ねる様なものだよ」

「さうだな、出雲姫の様な美人を連れて、閻魔の廳へ出立するのは氣分が良いが、斯う苔の生えた枯木の様になつた骨董品を伴れて行くのは、彌次彦もチツト迷惑だ。………オイ婆ア、お前何時までも此川邊に、コンナ事をやつとるのが面白いの

かい

「何が面白からう、これも仕方がないワ、木蓮尊者の母親ぢやないが、罪の塊で、因果が廻り来て、コンナ人の厭がる役を、よい年してやらされて居るのだよ。俺はモウ駄目だ、終身官だから、辭職する譯には行かぬワイ」

「それを聞けば、何だかチツト、哀憐の心が起つて來たワイ。一層の事、一思ひにこの川へ、「バサン」と投げ込みてやらうか。さうすれば、地獄の苦を逃れて、お前も幸福だらうに」

「婆サンとやつたつて駄目だよ。善の道を破産した俺だから、到底救はれる豫算が立たぬワイ」

「ア、三途がないなア、「かは」いさうな者だ。ナント詮術なきの川水、「ミツバナ」垂らして握飯に固めて、ムスメのお世話になつた御主人様に、有らう事か有るまい事か、食べさそうと致し、おまけに小便茶をも勧めた天罰は靦面に廻り來つて、三途川の鬼婆とまで成り果てしか、ア、思へば思へばいぢらしや、彌次彦同情の涙に暮にけりだ」

「アハ、ハ、ハ、面白面白、彌次喜多道中は、冥土へ来てモヤツパリ、五十三次気分がするワイ、音彦はまるで大井川の川縁に着いた様な心持がするワイ」
「大井川なら、この婆を大井に川いがつてやるのですな、アハ、ハ、ハ」
この時いかめしい装束をした一人の男、金剛杖をつき乍ら、トボトボと歩み來たりぬ。能く能く見れば、ウラル教の大目付、源五郎なりける。彌次彦は見るよ

「ヤア貴様はウラル教の源五郎だナ、俺が猿山峠の麓の森林で、華胥の國に遊樂する折しも、しやうもない夢をば、與太公に見せよつて、驚かしよつた腰拔野郎だらう。馬からひつくり返つて、四足に壓搾されて、背中に腹は替へられぬぢやない、馬の背中で腹を抉られて、蛙をぶつけた様に、目をクルクルと剥きよつて死ばつた代物だらう。サア好い所へ來よつた。こちらは三人貴様は一人だ。娑婆に居つた時は此方は三人貴様の味方は五十人、五十人でさへも敗北した様な腰拔だから、到底叶ふまい。貴様の着物を一切脱ぎ取るのだ、サアサア脱いだり脱いだり」

音彦は、

「オイオイ彌次、婆アサンの職權まで蹂躪すると云ふ事があるかい」

「モシモシ、お婆アサン、此所ちよつと代理權を執行致しますから、事後承諾を願ひます」

「ハイハイ、宜しき様に………お前に一任致すぞや」

彌次「音彦さま、サアどうだ、是からこの彌次彦が、お婆アサンの代理だ。脱衣婆

アといふ職權ができた。婆アサンの片相手は、お彌次サンに定つてるよハ、ハ、ハ。

オイ源五郎、婆アサンのおやぢだ。娑婆に居つた時は彌次彦だが、今は三途川の

鬼おやぢだ。キリキリチャット脱いで了へッ

源五郎は、

「ヤア、仕方がない、ソナナラ脱ぎませう。一枚でこらへて下さいや」

「エー執着心を持つな、眞裸になれ」

「それでもまだ此先、十萬億土も旅をせにやならぬのだから、お慈悲に一枚は殘して下さいナ」

「エツ一枚脱ぐも三枚脱ぐも、脱ぐのに違ふた事があるか、生れ赤子になるのだよ」

「ナント、お前さまはエライ権利を持つてますなア」

「定つた事だよ、泥棒権利の執行者だ。キリキリチャット、裸になつたり裸になつたり」

源「ア、もう斯うなつては源五郎もサツパリ源助だ、娑婆に居る時には、立つ鳥も落す勢であつたが、可愛い女房には別れ、生命より大事と蓄めた財産は弊履の如く打棄てて、身軽になつて此處へ來たと思へば、この薄い着物まで剥がれて了ふのか、ア、仕方がない。どうしたら宜からうかナア」

「エー女々しいワイ、郷に入つては郷に従へだ。娑婆の理窟は冥土には通用せぬぞ。泥棒にも三分の理窟があるのだ。脱衣爺の命令は全部服従……否盲従するのだ。亡者が亡者に従ふのは所謂亡従だよ。アハ、ハ、ハ」

「ア、仕方がありません、脱がして戴きます」

「貴様が脱いだ後は、俺も裸で困つて居るのだから、右から左へスツと着替へる

のだ。……オイ與太公、此奴ア、大分澤山に着て居よるから、貴様と分配して、着々歩を進めるのだよ」

「お前さまも、裸の辛い事は御存じでせう。自分の苦しみにつまされて、私を不憫とは思ひませぬか」

「エー八釜しいワイ、暗がりの世の中だ。一々目をあけて居つたならば、一日も生活が出来るものかい。何事も人の憐れは、見ざる、聞かざる、言はざるで……自分の一身一族を保護するのが當世だよ。まだまだ是では済まぬぞ、貴様の持物をみな脱いで了へ」

「これ丈禪まで脱いで了つただやありませぬか、この上何を脱ぐのですかい……」
「定つた事だよ、親譲りの……貴様はまだ洋服を着て居る。靴も、手袋も、頭巾も、何もかも、みな脱ぐのだ。貴様は娑婆に居る時から、彼奴は鐵面皮だと言はれて居つただやらう。その鐵面皮を此處で脱がしてやらう。舌も千枚舌だと言ふ事だから、一枚は助けてやるが、九百九十九枚まで此處で抜き取るのだ。コレコレ婆アサン、釘拔を貸しテンかいナ」

「ハイハイ、おやぢ彦の言ふ事なら、何でも聞きませう。釘拔がチツト錆びて居るけれど、此奴の舌も錆びてゐるから、合ふたり、叶ふたりだ、ワハ、ハ、ハ、」
「ヤア氣の利いた婆アだ、流石俺の女房丈あるワイ、………オイ源公、千枚舌を出せ………口を開け………」
「アア仕方がない、冥途の法律に従はねばならぬか。ソナラどうぞ、ヤンワリと抜いて下さい」

「よしよし」

と云ひつつ、釘拔を以て源公を大地に仰向けに寝させ、右の足を頭にグツと乗せ、
「イヨ一澤山な舌だワイ………此舌は放蕩を舌、一枚………オイオイ與太公、貴様は勘定役だ。音彦は受取つて下さい。………この舌は違約を舌………オツト二枚………こいつは間女房を舌………オツト三枚………こいつは讒言を舌、オツト四枚だよ、………こいつは失敗を舌、オツト五枚だ………こいつはアフンと舌、オツト六枚………こいつはインチキを舌………道傍でウンコを舌………遠慮を舌………ドツコイ遠慮會釋もなしに亂暴を舌………強欲を舌………ウツカリ舌………スベタに現を抜か舌………姦

通を舌……人を監禁舌……苦面を舌……喧譁を舌……善惡を混同舌……散財を舌
……要らぬ心配を舌……狡猾い事を舌……民衆運動を煽動舌……探偵を舌……損
を舌……畜生を殺舌……掴まへ損なひを舌……而も三五教の宣傳使を……手癖の
悪いことを舌……遁亡を舌……難儀を舌……物に窮迫舌……人を見殺しに舌……
憎まれ口を叩いた舌だ……盗みも舌……猫婆も舌……無報酬の飲食を舌……神に
反對を舌……貧乏を舌奴を壓迫舌……憤慨も舌……變改も舌……人の金で漫遊を
舌……無理も舌……斤量の目盗みも舌……悶着も舌……魂の宿替も舌……それは
良心の轉宅だ……隱險なことも舌……嘘つきも舌……縁談の妨害も舌……欲な企
みも舌……亂癡氣騒ぎも舌……悋氣も舌……不在の宅を狙つてを舌……獵師
をして澤山な畜生も捕獲舌……論にも杭にもかからぬ様な議論も舌……忘八苦も
舌……意地の悪い事も舌……エー閻魔さまの眼鏡に叶はぬ様な事も澤山舌……人
をおど舌……靈界物語の邪魔も舌……俺もモウウンザリ舌……是でまだ六十枚だが
モウ良い加減に止めに舌がよからうかアツハ、
隨分澤山な舌ですネー、音彦感心しま舌、ワアツハ、

「此奴は、何時も數多の人間を顎で使ひよつて、舌長に物を吐かす舌たか者だから、舌の根も随分強くつて、この三途川の鬼爺も、大變な苦勞を舌、アーア舌抜き商賣も、懲々舌わい、ワツハ、ハ、ハ、」

「これはこれはおやぢ彦、偉い苦勞をかけま舌、これで一寸源五郎の制敗も一部落着いた舌と云ふものだ」

「アーア辛い目に逢ふたものだ。三味線の絲ほど引締められて、撥を當てられ、お前のお好きに紫檀棹、源五郎も是で無罪放免にして貰ひませうか」

「まだまだ……此處はこれでよい、この河を渡つて向ふへ行つたら、今度はお前の腕を抜くのだよ」

與太彦は面白さうに、

「ア、そう【かいな】、痛い【かいな】、苦しい【かいな】」

「コラ與太公、ソナ陽氣な事を言ふとる場合ぢやないぞ、改心をせぬか、緊張せぬかい、お彌次彦が舌を抜いてやらうか」

「オイ彌次彦、よい加減にコナ殺生な商賣は辭職したらどうだい」

「八釜し云ふない、モウ少し勤めさして呉れ、……恩給年限が満つるまで……」
與「貴様はどこまでも、徹底的に欲な奴だナ、欲々の體主靈從の性來ぢやと見えるワイ。世の中で他人がよく云はぬのも當然だ」
「サアサア彌次彦サン永々お世話だつた。只今限り解職する、速くこの河を渡りしやれ」

「ヤア何だ、何時の間に河が無くなつて了つた。「かわいい」女房に生別れと云ふ場面だナ。オイ婆ア、折角な綺麗な河を何處へスツ込めて了つたのだい」

「お前の罪が薄らいだから、河はモウ流して了つたのだよ」

「河を流すとは妙だな、ヤツパリ現界とはすべての光景が河つて居るワイ……ヤア面白い、茫茫たる原野と俄に早替り、活動寫眞を見とる様だ……是れは是れはお婆アサン、永らく御厄介に與りました。頭の一つも「おなぐり」惜いが、私も先が急きますから、これで垢の別れを致しませう。これから爺は三人の亡者を連れて、あの世の旅をする程に、おばば、後の供養をしつかり頼むぞや。極樂と言ふ立派な所へ行つて半座を分けて待つて居る、一時もはやく、第二の娑婆を振り

棄てて、おやぢの側へやつて来て呉れ、萬劫未代、一蓮托生、必ず忘れて呉れるなよ

與太彦は吹き出して、

「アハ、何を吐しよるのだ、アンナ老婆と一蓮托生になつて堪るかい」

「それでも袖都合ふも他生の縁よ「ヤアおやぢサン、ばばア……」と假令半時で

も縁を結んだ以上は、夫婦には違ない、夫婦の情は門外漢の窺知すべき所でない、

色氣の無い唐變木の容喙すべき限りにあらずだ」

音彦、與太彦、源五郎も一度にふき出し、

「アハ、ウフ、エヘ、」

(大正一・三・二三 舊二・二五 松村眞澄録)

第二章 銅木像 (五五二)

音彦、彌次彦、與太彦、源五郎の一行四人は、三途川の脱衣婆に別れを告げて、際限もなき雑草の原野を西へ西へと進み行き、ピタツと行き當つた禿山、三方山に圍まれ進路を失ひ當惑の態、

音「サア、ピタツと行き詰つた、これで冥土の旅も行き詰りだ、何とか一つ考へねばなるまい」

彌「宣傳使さま、サア天津祝詞の言靈だ、斯う云ふ時に使用するのが言靈の活用ぢやありませんか」

「ア、さうだつたナア」

と手を拍ち、聲嚴かに天津祝詞を奏上する。忽ち行當つた禿山は雲の如く數十里の彼方に急速度を以て遁走した。

彌「ア、言靈の威力と云ふものは偉いものだナア。信仰の力は山をも動かすと云ふことを聞いて居る、流石は宣傳使だ、貴方の信仰の威力は確かなものだ。もうかういふ経験を得た以上は、焦熱地獄であらうが、八寒地獄であらうが、何の恐るる所あらむやだ。地獄のドン底まで浸入して、吾々一行は幽政の大改革を斷行

するのだなア」

音「オイ餘り油斷をするな、油斷すると知らず識らずに慢心が出て思はぬ失敗を演ぜないとも限らぬ。隅々までも氣を付けて進まねばならぬぞ」

斯く云ふ中忽然として見上ぐる許りの銅木像が地中より又ツと現はれて來た。

彌「イヨ―出よつたなア、矢張り幽界は幽界だ。一つの特徴があるワイ。オイコラ幽界の化物、吾々の通路を遮る不届きもの、スツコメスツコメ。現界の化物とは違つて幽界の化物はよつぽど形式が違つて居るワイ。コラ化物返答せぬかい、銅木像奴が」

「グワツハ、、、、、グウツフ、、、、、ギエツへ、、、、、ギヰツヒ、、、、、」

「ナンダ、ガ、、、、ギ、、と、濁音のみを使ひよつて、吾々を何と心得て居るのだい、三途川の脱衣婆でさへも、へこまして來た彌次彦さまだぞ」

「俺は銅と木とで造つた機械な化物だ。愚圖々々吐すと頭から呑みてやらうか」

彌「アハ、、、、貴様は大蛇の化物だな、呑ましてやりたいが、生憎何にもない

ワイ、田子の宿のお竹の家で飲まされた小便茶など呑まして遣らうか」

銅「イヤ俺は茶は呑みたくない。裸の奴が呑みたいのだ」

彌「ウンさうか、よしよし御注文通り此處にウラル教の源五郎といふ奴が、眞裸になつて來て居るワイ、これが呑みたいのだらう」

銅「ガーバー」

彌「ホンに、御機嫌の好いお顔だことわいのう。サア源チャン、御苦勞ながら一つ呑みて貰ひ給へ」

「裸はお前の事だよ、その着物は皆俺の着物だ。モシモシ銅木像さま、彌次彦、與太彦は小鹿峠の手前で、眞裸になりました。裸の道中を續けて來た経験のある奴です。俺は三途の川の渡場で此奴等二人に泥棒されたのですから、之等二人をとつくりと呑みて遣つて下さいませ」

銅「ギギツヒ、、、オーさうだらう、彌次彦、與太彦が味が好ささうだのう」
彌「コラ源公、貴様は眞正の眞裸だ、俺は脱衣婆の承認を得て着物を着て居るのだよ。モシモシ銅木像さま、それはお考へ違ひぢやありませんか」

「俺は機械だ、モウこれ切りで物は言はぬ。お前たち勝手に俺の腹へ這入つて機

械いを使つかふたが好よからう。腹はらへ這はい入れば色いろ々の機き械かいの装さう置ちが完くわ備んして居ゐるから、一いち々いち使用し用法ようが記ししてある。その綱つなをひくと此この銅どう木もく像ざうが大だい活くわつ動どうを演えんずるのだ、ガ

ハ、ハ、ハ、ハ、

彌や「ヤア此こ奴いつ面白おもしろいぞ、吾われ々われが十じふ萬まん億おく土どの旅たびをすと思おもつて、閻えん魔まの奴やつ退たい屈くつさましにコナ副ふく産さん物ぶつを拵こしらへて置おいたのだらう。ヤアもう文ぶん明めいの空くう氣きと云いふものは何ど處こまでも行ゆき渡わたつたものだワイ、一ひとつ俺おれが這はい入いつてこの機き械かいを使つかつて見みやうかな

ア

源げん「お前まへ等は俺おれの着き物ものを追おひ剥はぎをしたのだから、罪つみが加か重じゆうして居ゐる、到たう底ていこの機き械かいを使し用ようする權けん利りはなからう。俺おれは裸はだかだから着き物ものの代かりにこの銅どう木もく像ざうの中なかへ潛せん入にして、一ひとつ使つかつて見みるから、お前まへ等は力ちから一いつ杯ぱい相あ手てになつて見みたらどうだ。ウラル教けうの大おほ目め付つけ役やくと、三あな五な教ひけうの宣せん傳でん使しや信しん者じゃとの問もん答たふも面おも白しろいかも知しれないぞ」

與よ「オイ彌や次じ彦ひこ、源げん五ご郎らうの云いふ通とほりにさして見みたらどうだ。ナア音おと彦ひこさま、それが好いいぢやありませぬか」

音おと「好よからう、ソソンナラ源げんチヤン、ああななたた這はい入いつて下くださいナ」

源「コレは有難い、一つ操つり人形の様に自由自在に動かして見ませうかい。ヤア入口は何處だ、アハア大きな鼻の孔を開けて居よる、此處から一つガサガサと這入つてやらうか」

と言つて銅木像の身體を杣人が山にでも登るやうに杖をつきながら登り行く。

彌「イヨ―面白いな。まるで牛に蠅がたかつたやうに小さく見える。よつぽど大きな銅木像だワイ」

源五郎はとうとう鼻の孔から這入つて了つた。

與「ヤア、とうとう這入つて了ひよつた、これから面白いのだ、オイ早く藝當を始めぬかい」

銅「ウ、ウ、ウ、ウラル教の大目付役鷲搦の源五郎とは俺の事だ。サアサア三五教の豆宣傳使、モウかうなる以上は大丈夫だ、銅木像の合羽を被つた源五郎だ。ウーフ、ウーフ、ウーフ」

彌「ヤア怪體な銅木像だ、源五郎氣取りになりよつて怪しからぬ。ヤイ銅木像、洒落た事をするない」

銅「洒落たも洒落ぬもあつたものかい」

とグルグルグルと蛇の目傘の如き目玉を急速度を以て廻轉させる。

彌「ヤア乙な事をやりよるワ。多寡が機械だ、輪轉機でも使ひよつて目玉を廻轉

させて居るのだらう。コラ餘り目玉を剥くと目がモーターになつてへコ垂れるぞ」

銅「この目が恐いか、冥途の旅ぢや、お前たちの目を醒まして遣る爲めに先づ俺

から目を剥いて見せたのだ、序に鼻を剥いて遣らうか」

彌「剥いて見よ、俺は此處で緩りと春風に吹かれて花見見物をやつて遣らう。ヨ

ウ小山のやうな鼻をピコツカせよるぞ、無恰好な鼻だなア。ヤア剥いた剥いた、

何だベンチレーターのやうな鼻をしようつて、天井を嗅ぐやうな調子で鼻の孔を上

向けて居やがる。天井が熏香したと思ひ違へよつたなア、オイ化像、チツト勘考

して見い」

銅「俺の鼻息で吹き散らしてやろうか、このベンチレーターは猛烈に噴煙を吐く

から用意を致せ」

與「アハ、ハ、ハ、變れば變るものだ、機械が物云ふ時節だから、これも形式の變

つた蓄音器だなア。オイ蓄音器先生、レコードが破れぬ様に静かに廻して見よ、
餘り虐使すると使用期間を短縮するぞ」

化像は右の手をガタガタと動かし、機械的に指を以て一方の小鼻を押
へ、左の直径一丈位の大鼻孔より黒煙を頻りに噴出し、四邊は眞暗闇になつて了
つた。

彌「コラコラ化像、程度を知らぬかい、治安妨害だぞ。モ少しソツと吹かぬか」

銅「吹かいでかい吹かいでかい、吹いて吹いて吹き捲つてやるのだ」

彌「此奴は思ひ違ひだ、意想外だ。モシモシ宣傳使さま、言靈だ言靈だ」

音「彌次彦さま、緩りなさいませ、吹く丈け吹いたら原料が無くなるから大丈夫
だ、何ほど大きいと云つたつて、さう無盡藏に續くものぢやないからナア」

化像は又もや左の腕をガタガタと音をさせ、機械的に左の小鼻を押へ、
右の手を元の位置にチント直し、招き猫のやうな恰好にし、今度は右の孔から吹
くわ吹くわ滅茶やたらに、二百十日の暴雨のやうにブウブウ粘つた【ミヅバナ】
を四方八方に吹散らす。

彌「アア、コリヤたまらぬ、涕だらけだ、何處もかもニチャニチャになつてしまつた。まるで紙雛を噛みて吐き出したやうな御面相になつたワイ、オイ化像、もう好い加減に中止せぬかい、しぶとい奴ぢやなア」

銅「俺はしぶとい、貴様の様な淡泊な人間とは違ふ、粘着性を持つて居るのだ、まだまだまだまだ粘つく奴を噴出するぞ。宿が無くてお竹の家に泊めて貰つて、結構な握飯を頂戴して婆の鼻汁が混つたの、混らぬのと小言をほざきよつたその報い、身體中を鼻啖でこね廻して遣るのだぞ」

彌「コレコレ音彦様、イヤ宣傳使さま、コンナ時こそ、それ科戸の風の天の八重雲を吹放つ事の如く、大津邊に居る大船を屁こき放ち糞こき放ちて、大和田の原に鼻垂れる事の如く、拂ひ給へ清め給へをやつて下さいな、かう汚れてはどうにも、こうにも仕方がない」

音「マ、じつくりとするのだよ。藝者でさへも花が欲しいと云ふて眠ぶた目をこすりながら、ボンボラ三味線を弾きよる。何もせないで此丈け澤山の「はな」を頂戴すれば結構だ。お化さま又来て頂戴、【はな】の切れ目が縁の切れ目、お

「はな」を澤山持つて又来て下さい……ナンテ云つて背中をポンと叩いた。さうすると彌次彦が蒟蒻の様になつてグニヤグニヤとなるまでには大分資本が要る、コンナに澤山「はな」を頂戴して、不足を言ふ所か」

彌「モシモシ宣傳使さま、貴方はどうかして居ますなア、藝者の花代と混線して居やしませぬか」

音「天混線を空うする勿れ、時に鼻汁の泣面に當るを、アハ、ハ、ハ、ハ、」

彌「ドウモ、尾籠な事だワイ、鼻振、紙也、屁の雨だ、ヤアもう結構々々、花見だと思つて居つたに落花狼籍、開闢以來の粘りばりとした花見遊山だ。オイ源公、イ、加減に悪戯を止めたらどうだい」

銅「今度は小便の龍吐水だ、田子の宿に於て土瓶の中に小便を垂れたを覚えて居るだらう。折悪く土瓶の持ち合せがないから貴様の薬罐頭を、土瓶代用として注入してやらう、チツト熱い小便茶だぞ」

與「是れはこれはめつそうな、澤山お花を頂戴いたしましたして其上に、結構なお茶を頂戴しましては、却てお氣の毒さまで御座います、私も迷惑いたします、どう

ぞお茶文はまた外のお客に振れ舞つて下さい。生憎裸に一旦されたものだからお茶代も御座いませぬからお茶の出し損、それでは商賣の資本が續きますまい。閻魔の廳から執達吏がやつて来て、破産申請をやられては却てお家の迷惑、後はさつぱり家計紊亂共に苦辛の爲體、マアマアお茶文はお引き下さつたが好ろしからう」

銅「この藝者は茶を引く事は大々々々の嫌ひで御座んす。お茶位は工、遠慮なしにあがつて下さい。本當の番茶なら宜いが小便茶で、あまり原料も要りませぬ。

茶つとおあがりなさい。サ藥罐の蓋を開けて下さい」

與「イヤもう澤山、此方の藥罐も茶を沸して居りますから、この上頂いた所で塔の上に塔を積むやうなもの、儉約流行の世の中、無駄な費用を省いて、それを社會事業にでも投資した方が何ほど娑婆の人間が喜ぶ事が分りませぬぞ」

銅「ヤアそれでも、もうすでに準備が出来て居ます」

と大龍吐水の如く小便茶を虹のやうに吐き出した。

與「コリヤ、熱い熱い、何程厚い志と言つても、コー茶にされては有難くもない

ワ、然し一利あれば一害あり、鼻だらけの身體の洗濯には持つて来いぢや、腹も立つが茶腹も立つ、然し小便丈は閉口だ」

銅「それは見本だ、本物は之れから幾何でも大洪水が出たほど御馳走して上げませう」

彌「お香水なら結構だが、この見本ではねつから氣に入らぬ、破約だ。もう此方からこの代物は小便しますワ」

銅「アハ、ハ、ハ、ハ」

彌「オイオイ源五郎のサツク奴が、好い加減に惡戯を止めたらどうだい」

銅「貴様は脱衣婆の上前をハネよつて、源五郎の着物を無理に掠奪した怪しからぬ奴だ、今此處で裸になれ。その着物をすつかりと源五郎さまに返上するのだ」

彌「エ、穢苦しい、鼻汁だらけの小便茶の浸みたコンナ着物は、誰が着たいものかい。サア何時でも返してやるワ」

銅「洗濯をして元の通りに綺麗に乾かして返すのだぞ」

彌「與、洗濯せえと言つたつて河もなし婆ぢやあるまいし、ソナ無理な注文は

するものぢやないワ、返してやつたら結構だ

とムクムクと裸になり、

二人「サアこれでスイとした生れ赤子だ」

銅「ウワハ、ハ、ハ、ハ、見事裸になりよつたなア、これから俺の口から萬本針を吐

いて遣らう、貴様の身體に皆ささつて毛がはへた様にしてやるワ、キツヒ、ハ、ハ、

彌「エ、仕様もない針合のない事だ、愚圖々々抜かすとハリ倒すぞ。モシモシ宣

傳使さま何して御座る、吾々二人が之れほど苦しみて居るのに、貴方は傍觀して

居つて、それで人を助ける宣傳使と言へますか」

音「ヨー結構な花見だ。櫻花爛漫として雲の如く、そこへ日光七色の映じた虹の

麗しさ、後から針の様な霧雨ビシヨビシヨと降つて來るこの風情と言つたら、何

とも譬へ様なない氣候、與太彦、彌次彦の二人は花見踊をして見せるし、操り人

形は色々の曲藝を演じて觀覽に供すると云ふ體裁だから面白くて堪らぬワイ。靈

界物語の第一巻にあつた通り、苦中樂あり、樂中苦ありだ。天國と云つても苦し

みあり、地獄と云つても樂みがあると云ふは能く言つたものだ、心の持ちやう一

つで地獄となり、極樂となる。嗚呼有難いものだ」

彌「ア、薩張り駄目だ。力に思ふ宣傳使はこの通り知覺神經が麻痺しちまつて、

コンナ苦しい場面が極樂淨土に見えるとは何とした事だらう」

銅「サア是からだ、右の足で俺が一つ四股を踏みたら小鹿峠がガタガタガタ、

左の足をウンと踏みたら貴様等は天上目がけてプリンプリン、泥田の中へ眞逆様

にズドン キューの一言冥土の旅路、アハ、ハ、ハ」

彌「何だ、小鹿峠の事まで竝べよつて、オイ源五郎、好い加減に出て來ぬかい、

今度ア俺の番だ」

銅木像はムクムクと立ち上り四股をドンドンと踏みながら、さしも高い禿山を

一足に跨げ、のそりのそりと歩み出し、

「ヤアヤア太陽が餘り低いものだから、頭に行き當りよつて仕方がないワ、あす

こにも月がぶら下つて居る、腰でも【しゃがめ】て通つてやらうかい」

と雷のやうに咆え吠鳴りつつ西の方へと進み行く。

彌「ヤアヤア化像の奴、源五郎も一緒に腹の中に入れて何處へか往つてしまひよ

つた、ア、仕方がない、眞裸だ、誰か来ぬかいな、着物の用意をせなくちや閻魔の廳へ行く迄に、ポリスに出會つたらまた監禁だ」

與「オイオイ向ふを見よ、日の出別の宣傳使が先に立ち鷹彦、岩彦、梅彦、龜彦の面々が遣つて来るぢやないか、祝詞の聲が聞え出したぞ」

彌「ヤア来た来た、彼の宣傳使も何處へ往つたかと思へば、矢張り大蛇に飲まれて冥土の旅をやつてゐるのだなア、然しまア道連が出来て賑やかで好いワイ」

日の出別の一行は馬の蹄の音カツカツと此方に向つて進み来る。

彌「モシモシ、私の頭は小便だらけだ、水でも吹いて清めて下さいませぬか」

日「ヤア鷹彦サン、岩彦サン、貴方がた一同は谷川の水でも、汲みてかけてやつて下さい」

鷹、岩「畏まりました」

と谷に下りて口に水を含み三人の顔に向つて伊吹をした。ウ、ーンと唸ると共にハツと氣が付けば、小鹿峠の麓の河邊に三人は氣絶して居たるなり。

日「ヤ、結構々々、吾々の来るのが少し遅かつたら、とうとう冥土の旅をする所

だつたなア、マア命いのちがあつて何なにより結構けつこう、サア是これからフサの都みやこへ着ついて、それからコーカス山ざんに進すすむ事ことにしよう〇

(大正一一・三・二三 舊二・二五 谷村眞友録)

第三章 鷹彦たかひこ還元くわんげん (五五三)

鷹彦たかひこ、梅彦うめひこ、龜彦かめひこは心こころの堅かたき岩彦いはひこの改心かいしんを喜よろこびて、駒彦こまひこ諸共もろとも、駒こまに鞭打むちうち堂々だうだうと小鹿峠こしかたうげを登のぼり行ゆく。爪先つまさき上あがりの山道さんだうを神かみの教をしへに夜よるの道みち、早頂上はやちやうじやうに登のぼり着ついた。

鷹たか「御蔭おかげで、小鹿峠こしかたうげを見極みきはめました。ご一同いちどうここで馬うまを休息きうそくさせて参まゐりませうか〇

と一同いちどうは鷹彦たかひこの提議ていぎに満場まんぢやう一致いつち賛意さんいを表あらはし馬うまよりヒラリと飛とび下おりた。

岩いは「何いづれも方がた、餘あまりの急坂きふはんでお疲つかれでしたらう。然しかし、音彦おとひこの宣傳使せんてんしは居ゐません

なア〇

梅うめ「ア、さうですな、どうしたのでせう。途中とちうに馬うまでもへたつたのではあります

まいか、眞逆あれほど大きな聲で呼んだのだから聞えぬ筈もなからうし、目の醒めない道理も無い。之は的切り落馬されたのではありますまいか。彌次、與太の二人も居ませぬなア」

岩「ナニ大丈夫ですよ。一人なれば心配もして見なくてはならぬが、三人連だから滅多に紛失する心配もありませんわ、アハ、ハ、ハ」

龜「何だか私は氣懸りでなりませぬワ、途中でウラル教の目付役に打つかつて苦戦して居られるのではありますまいか。音彦の宣傳使は温順で膽力があるから、

如何なる難關も容易に切り抜けられませうが、新參者の彌次彦、與太彦が要らぬ空元氣を出して一悶着やつて居るのではあるまいかと氣が氣でなりませぬ」

駒「龜サン貴方もさう思ふか、私も同感だ、何だか氣懸りでなりませぬワ。なんでもこの邊はウラル教の根據地だと云ふ事です。ウラル山アーメニヤの驍將共は

大分フサの國に集まつてゐると云ふ事です。油斷は出來ませぬよ。鷹彦サン、御苦勞だが貴方の特能を現はして、一寸鷹に還元して、偵察をして下さるまいか。

大丈夫と云つても充分の安心は出來ませぬからナア」

鷹「承知致しました。暫く待つて下さい」

と忽ち靈鷹と變じ中天高く姿を隠した。

後に四人は此處に神言を奏上し、過來し方の物語りに時の移るのも知らなかつ

た。東の空は茜晒して、日の大神の影、タカオ山脈の頂より登りたまふ。

岩「ア、もう夜が明けた。鷹彦さまはどうだらう。木乃伊取りが木乃伊になつた

のではあるまいかなア」

梅「眞逆ソナナ事はあるまい。音サンの事だから今に何とか音づれがありませう」

駒「本當に音サンの連がないのは音づれないのと同じ事、道中が淋しい様な氣が

する」

斯る處へ、四人の男覆面のまま峠を西方より登り來たり、

甲「ヤア居るぞ居るぞ、而も三五教の宣傳使が四人だ。オイ八公、貴様は早く源

五郎の大將に報告して澤山の捕手を差し向ける様にして呉れ。吾々はそれ迄此處

に彼奴等の遁げない様に監視をして居るから」

と小聲に囁いて居る。

岩「オイ其處へ來るのはウラル教の捕手ぢやないか、皆サンお早うから御苦勞様だ。なア、緩り一服なとしなさい。海山の話しを致しませうよ」

梅「斯う峠の頂きから四方を見晴らしもつて、世間話をするのも餘り悪くはありませぬよ。さう恟々として落着かない態度をせず、吾々と一所に【どつか】と腰を下して御一服なさいませ」

甲「ヤアその方等は紛ふ方なき三五教の宣傳使だ。なア。吾々は汝等の察する如く、ウラル教の捕手の役人だ。最う斯うなる以上は百年目だ、たとへ神變不可思議の術を使つて天を翔り地を潛る共、此方にはまた此方の不可思議力がある、サア神妙に手を廻せ」

岩「アハ、ハ、ハ、仰有ります。哩。鉛で拵へた仁王サンのやうに四角四面な顔をして、さう頑張るものぢやない。同じ天の神様の氏子だ、持ちつ持たれつ、互に助け助けられ、この世に生きて榮えて、誠の神の御用を致す尊い人間同志だ、マア緩りと一服なさがよからう」

乙「この期に及んで要らざる繰言、聞く耳持たぬぞ。貴様は三五教といふ邪教を

天下てんかに宣傳せんでんする曲津神まがつかみだ、それ丈だけの悟さとりがあるなら何故なぜそのやうな教をしへを信しんずるのだ。巧言令色かうげんれいしよくいた致いたらざるなく、乞食こじきの蝨しらみぢやないが口くちで殺ころさうと思おもつたつて、ソナ事ことに迂闊うかつ々々乗のる六サろくンぢやないぞ。エ、グツグツ吐ぬかさずと従順すなをに手てを廻まはせ、ウラル山さんの砦とりでに拘引こういんしてやらうか」

駒こま「アハハ、マアマア、マアこの日ひの長ながいのに朝あさつぱらから、さう發動はつどうをなさると草臥くたぶれますよ。マア鎮おさまつて一服いっぶくしなさい。吾々われわれが丁寧ていねいに鎮魂ちんこんでもして上げあませう」

六ろく「ナ、何を吐ぬかしよるのだ、その鎮魂ちんこんが氣きに食くはぬのだ。グツグツ吐ぬかすと貴様きさまの命いのちは瞬またたく間に沈没ちんぼつだぞ」

龜かめ「何なんとウラル教けうといふ教をしへは荒あらい言葉ことばを使つかふ教理けうりだな、恰まるで雲助くもすけサンと間違まちがへられますよ。言靈ことたまの幸さちはふ世よの中なか、尠ちつとは丁寧ていねいな言葉ことばをお使つかひなさつたら如何どうですか」

六ろく「喧やかましい哩わい。貴様きさまの樣やうに表うはへは蚤のみも殺ころさぬ樣やうな態度たいどを装よそほふて、鬼おにか大蛇おろちか狼おほかみか獅子しか山犬やまいぬかといふ樣やうな表裏へうり反對はんたいの教をしへとは雲泥うんでいの相違さうゐがあるのだ。温和おとなしい顔かほをして

悪念を包蔵する奴程、この世の中に危険な者はない。外面如菩薩、内心如夜叉、悪鬼羅刹の化の皮今にヒン剥いてやるから覺悟を致せ。吾々ウラル教の御方は上から見れば荒削りの仁王サンの様だが、心の綺麗な事は龍宮の乙姫サンか天教山の木の花姫が素足で逃げ出す様な綺麗な御霊の持主計りだぞ。餘り見違ひをして貰ふまいかい」

岩「それはそれは結構な教ですな、しかしながら靈肉一致といつて心の色が外に表はれるものだ。心が和ぎ美しければ其人の言行はやつぱり柔かく美しくなくてはならぬ。黄金の玉を襪褌で包むと云ふ道理は無い筈だ」

六「エ、好うツベコベ團子理窟を捏ねる奴だナ。今の世の中の奴は、口許り發達しやがつて、男までが女のやうな言葉を使ひ、髪に油をつけ洒落る時節だ。俺らの様な、天真爛漫素地その儘の人間が鉦や太鼓で探し廻つた處でさう澤山はありはせぬぞ、悪魔は善の假面を被つて好う誑らかすものだ。貴様等もその傳だらう、言ふべくして行ふべからざるものは教の道だ。グツグツ云はずに、もう斯うなつちや仕方が無い、因縁づくぢやと諦めてこの方の仰せに服従致せ」

源五郎の大將が數多の部下を引連れ押し寄せて來るといふ手筈になつて居るのだ。コンナ處で、三五教になろうものなら、それこそ大變だぞ。何、構ふものか、弱音を吹くな、たとへウラル教が悪の教であらうと、毒食はば皿まで嘗ぶれといふ事がある、行く處まで行くのだよ」

六「ア、此處はサル山峠の頂上だ、此處へ降る雨は紙一枚の違ひで、一方は東へ流れ落ちる、一方は西へ流れ落ちる、善惡正邪の分水嶺だ。吾々も一つ此處で向背を決せねばなるまい」

この時、天空より舞ひ下つた一羽の靈鷹は見る見る身體膨張し、一丈許りの羽を擴げてバタバタ羽ばたきした。

岩「ア、鷹様か、音彦の様子は如何に」

鷹彦は羽を納め元の姿となり汗を拭き乍ら、

「御連中、大變ですよ。音彦の宣傳使はウラル教の大目付、鷲掴の源五郎の爲に包圍攻撃をされ、命からがら小鹿峠の方面に遁れ去つたといふ事です。而うして源五郎は自分の馬の下敷となつて腹を破り悶死したさうです。八といふ男が一隊

を引き連れて音彦様の後を追跡したと云ふ事です」

六「そりや大變だ、八といふ名は澤山にあるが源五郎といふ大將の名は一人だ、

そうすれば吾々の大將は討死したのか、エ、残念ぢやない哩、残念なのは源五郎

御自身だ。常平生からウラル彦の大將を笠に着よつて、虎の威を藉る古狐に罰は

觀面、死様にも種々あるに、自分の乗つた馬の背中に押へられ死ぬとはよくよく

因果な者だナア。ヤア最う安心だ、何時もいつも吾々を壓迫しよつた報いだ。モ

シモシウラル教の元の宣傳使、三五教の新米のヌクヌクの宣傳使の御歴々さま、

私も三五教に歸順いたしますワ」

岩「要らぬ事を澤山云ふものぢやない。舊だの新だのホヤホヤだのと、それだか

らウラル教は口が悪いと云ふのだ。歸順するならするで、ベンベンダラリと前口

上を竝べなくても好いぢやないか。モシモシ鷹彦さま、この男は今お聞きの通り

歸順すると言ひました。貴方のお留守中にコンナ勝利品を得ました、ホンの一服

休みに一人の歸順者を得たのですから随分豪勢なものでせう」

鷹「相變らず、喇叭吹きがお上手ですナア」

六「オイオイ皆の奴、小頭の六サンが歸順したのだから、貴様たちも俺に殉死だぞ。異議はあるまいな」

一同「あーりーが一度く存じませぬワイ」

六「なんだ、曖昧ぢやないか、しつかり云はぬかい」

辰「お前の云ふ通り、善惡正邪の分水嶺だ、一雨降るまで待つて呉れ。決着が着

かぬ哩」

六「執着心の深い奴だナア、置け置け。人間は淡泊とするものだ。三五教の宣傳

使の音彦や二人の伴のやうに、吾々に兩方から包圍攻撃されて深い谷間に身を躍

らして飛び込み冥土の旅をした事を思へば屁でもない事だ。牛を馬に乗り換へる

丈の事だ。とかく人間は諦めが肝腎だよ。斷の一字は男子たるものの必要缺くべ

からざる寶だからのう」

岩「モシ六サンとやら、音彦が谷へ飛び込んで死んだと云ふのは、そりや本當か

い」

六「私も三五教に歸順した以上は、何、嘘を申しませうか、誠も誠、現に私が實

地を目撃したのですもの」

駒「そりや大變だ、こりや斯うして居られぬ哩」

六「モシモシ三五教は刹那心ですよ。過ぎ越し苦勞はお止しなさい。もう今頃は

三途の川の婆アに着物を強請られて渡す着物は無し當惑して居る最中ですだらう。

何ほど泣いても悔んでも、一旦死んだ人は呼べど叫べど何の答へも【ない】ぢや

くり、泣いて明石の濱千鳥」

岩「オイオイ六、【ろく】でも無いことを云ふな、冗談處ではないワ」

六「六道の辻で六サンが……と云ふ所ですワイ」

岩「エ、ソナ冗談處かい、神言を奏上してせめては音彦一同の冥福を祈り、幽

界宣傳の加勢をして上げねばなるまい。……頓生菩提音彦、彌次彦、與太彦の御

魂、神の御國に幸あれよ。アーメン、ソーメン、ドツコイ南無妙法蓮、陀佛、遠

神笑みため、惟神祓給へ助け給へ、妙々」

鷹「アハ、ハ、ハ、岩彦サン、ソナ混雜した祝詞がありますか」

岩「イヤもう親密なる友人の訃を聞いて心も心ならず、何れの神様を祈つたら音

彦の御魂サンを守つて下さらうかと一寸麻胡つききました。然し乍ら之が人間の眞心ですワ」

龜「岩彦サンは好う麻胡つく方だなア、シツの窟で私たちの骨なと肉なと拾ふてやろうと仰有つた時のお麻胡つき方そつくりだワ」

岩「アハ、ハ、ハ、一寸餘興に洒落て見ました」

駒「これは怪しからぬ、友人の訃を聞いてそれ程可笑しいですか」

岩「アハ、ハ、ハ、可笑しい可笑しい、苟くも三五教の宣傳使たるもの、尊き神の御守りある以上敵に包圍攻撃されたと云つて、自ら谷へ飛び込んで自殺を遂げると云ふ事がどうしてありません。屹度助かつて居ると、吾々の何だか琴線に觸れる様な心持ちがして來ましたアハ、ハ、ハ」

遽に聞ゆる人馬の物音、五人の宣傳使は一齊に立ち上り音する方を眺むれば、數百人のウラル教の捕手の役人、各自に柄物を携へて此方に向つて登り來る。

岩「ヨ、お出たお出た」

「サア面白い、一行の宣傳使様、此處で六公が三五教に歸順しました心底を現は

して見せませう」

と捻鉢巻をしながら、六公は峠の真ん中に大手を擴げ大音聲、

「その方は惡逆無道の鷲掴の源五郎か、自分の馬に押し潰されて死んだ奴めが。

未だ娑婆が戀しいと見えて數多の亡者を引き連れて、三五教の宣傳使を召し捕む

とは片腹痛い。サアこれから六サンが三五教に寢返り打った初陣の活動、吾が言

靈の神力に往生いたせ。アーオーウーエーイー」

この聲終ると共に、大將源五郎の騎馬の姿も、數多の軍卒の影も忽ち煙の如く

消え失せて、後には、尾の上を渡る松風の音が聞ゆるのみ。

六「アハ、ハ、ハ、何と源五郎の奴、執念深い奴だ。亡者になつても未だやつて

來よる。しかし乍ら、三五教のお蔭で亡者隊は、モジヤモジヤと煙となつて消え

失せたり。ヤア宣傳使御一同様、何卒これを證據に貴方のお弟子にして下さいま

せ。お荷物でも持たして頂きませう」

岩「自分の荷物は自分が持つべき物だ。吾々は人の力を借りるといふ事は絶対に

出來ない。六サンは六サンの荷物を持つて隨いて來なさい」

六「御存じの通り、私の荷物は此の槍一つで御座ります。もう斯うなる以上は槍の必要もござりませぬ。コンナ物は谷底へ「やり」放しにして、是れから大いに、神様の宣傳をやりませう。「やり」繰上手の六サンは一つ足らぬ許りで何時も七つやの御厄介、是からは、三五教の御厄介になりませう」

岩「アハ、ハ、ハ、ハ、滑稽諧謔口を突いて出ると云ふ風流人だナ、面白い面白い。

お前の荷物と云ふのは外でもない、まだ一匹残つてゐる、四足の副守護神だよ」

六「エエソナ物が居りますか」

岩「居るとも居るとも、その副サンが滑稽諧謔の主だ。然し乍らお正月言葉許り

使つて居る宣傳使中には、時に取つては副サンも必要だ。或る時機までは大切に

背負つて行きなさい」

六「六の身體から一つ取つたら五つになります。五つの御靈の宣傳使にして下さ

いな」

岩「宜しい宜しい、もう暫らく副サンを保留して置くんだよ」

遽に一陣の強風吹き来ると見る間に、馬の蹄の音、何處ともなく響いて、木の

間に現はれた眉目清秀の宣傳使あり。

鷹「貴方は、日の出別の宣傳使様、能う来て下さいました。一同の者がどれ丈け、憧れて居つた事ぢやか知れませぬワ」

日「ホー皆サンご苦勞でした。しかし音彦、外二人は、コシカ峠においてウラル教の捕手の爲めに包圍攻撃されて、進退維谷まり、千仞の谷間に身を投じて氣絶をしてゐます。時遅れては一大事、サアサア皆サン早くお支度をなされ、一鞭當ててコシカ峠の溪間に、宣傳使を救ひに参りませう」

一同「ヨーそれは大變」
と云ふより早くヒラリと馬に跨り、九十九折のサル山峠の坂道さして「ヤア六サ
ン來れ」と一目散に日の出別の神に従ひ走り行く。

（大正一一・三・二三 舊二・二五 藤津久子録）

第四章 馬詈（五五四）

日の出別神は、サル山峠の頂上に憩へる五人の宣傳使と六公の一行を率つれ、コシカ峠の谷底に蹄の音も勇ましく、轡を連らねて現はれたり。

茲に音彦、彌次彦、與太彦の三人は、谷底の眞砂の上に枕を並べて氣絶して居る。一同の宣傳使は交る交る河水を掬ひ口にふくんで三人の面部に濺ぎかけた。

音彦はウンと一聲起き上がり、

音彦「オイ此處は何處だつたかなア、三途の川を渡つて天の八衢に進んだ積りだに、この川は何時出来たのか、また三途の川が此處へ轉宅をしたのではあるまいか」

岩彦「これこれ音彦サン、あなた氣絶して居たのですよ。ここはコシカ峠の谷底です、チト確りして下さい」

音彦「ウンさうだつたかなア、すつての事で幽界旅行地獄探險をやるどころでした。ようまア助けに来て下さいました。未だ未だ現界にご用があると見えますなア」

岩彦「あるともあるとも、今斯様なところに國替して耐るものか、確りして下さい。之から遙々フサの都に到着してコーカス山に進まねばならぬ。途中で斃られては

吾々は幸先が悪いですからなア」

音彦は目を擦りながら、

音「ハア日の出別の神様その他御一同、妙な處でお目に掛りました。イヤお助けに預りました」

岩「音彦サンは、やつとの事で蘇生をして下さったが、二人の方はまだ魂がへしが出来て居ない。皆さま一齊に魂呼びを致しませう」

一同は聲を揃へて一二三四五六七八九十百千萬を四五回繰返せば、彌次彦、與太彦はムクムクと動き出したり。

音「ヨ一彌次彦サン、氣を付けたり。與太彦サン目を開けたり」

彌「銅木像奴が、また手を換へ品を換へ瞞さうと云ったつて、その手に乗るものかい。これ源五郎の「サツク」奴、三途川の鬼婆の代理を勤めたこの彌次サンだぞ。好い加減に改心せぬかい」

岩「これこれ彌次サン、確りせぬか」

「これこれ與太サン、確りせぬか」
與「何吐しよるのだ。源五郎のお化奴が」

音「オイオイ、彌次彦、與太彦の兩人、此處は冥土ぢやないぞ、コシカ峠の谷底だよ」

彌「ヘン、馬鹿にするない、コシカ峠は疾の昔に空中滑走をやつて首尾よく歸幽したのだ。それから三途の川を渡つて天の八衢の銅木像を今遁走させた處だ。如何に亡者になつたとて、娑婆へ舞ひ戻る奴があるかい、俺は刹那心だ。一足も後戻りは、嫌ひだよ」

音「ア、困つたものだなア、やつぱり亡者氣分で居ると見える。コレコレ彌次サン、與太サン死んで居るのがぢやないよ、生て歸つたのだよ」

彌「馬鹿を云ふな、死んだ者が二度死ぬ前例があるかい。生き返るも跳ねかへるもあるものかい、お前の修羅の妄執をサラリと捨てて、十萬億土の旅をするのだ。顯幽境を異にしたこの幽界で幾何娑婆が戀しうても一旦往くところ迄往かねばならぬのだ。今は中有だ。やがて生有が来るであらう、それまでは幽界の規則を遵奉して神妙に旅行するのだ、ノウ與太公」

與「エ、彌次サン、些と變ぢやないか、何だか娑婆臭くなつて來たやうだよ。日

の^で出別^けの^か神様^{さま}もお見^みえになつて居^をる。澤山^{たくさん}の宣傳使^{せんてんし}も御列席^{ごれつせき}だ。好^よい加減^{かげん}に目^めを醒^さまさぬかい」

彌^や「馬鹿^{ばか}云^いふな、日^ひの出別^{でわけ}の一行^{いっかう}は俺等^{おれら}よりも先^{さき}に幽界^{いうがい}旅行^{りょりゃう}だ。銅木^{どうもく}像^{ぞう}の化^{ばけ}の奴^{やつ}が日^に天^{てん}様^{さま}に頭^{あたま}を打^うちよつて遁走^{とんそう}した後^{あと}へ現^{あら}はれて來^こられたぢやないか」

岩^{いは}「彼奴^{あいつ}は一つ水^{みづ}の吹^ふきやうが足^たらぬ、いつその事^{こと}、身^{からだ}體^だぐち此^{この}川^{かは}へドブツケ茄^な子^すとやつたらどうだらう」

與^よ太彦^{たひこ}は泣^なき聲^{こゑ}を出^だして、

與^よ「モシモシ宣傳使^{せんてんし}様^{さま}、折角^{せつかく}助^{たす}かつたものを、ソナ事^{こと}をして貰^{もら}つたら土左衛門^{どざゑもん}になります。それだけは何卒^{どうぞ}許^{ゆる}してやつて下^{くだ}さいませ。アア彌次彦^{やじひこ}はなぜコンナに分^{わか}らぬのだらうか、可愛^{かあい}さ餘^{あま}つて憎^{にく}らしうなつて來^きたワイ」

と與^よ太彦^{たひこ}は力^{ちから}限^{かぎ}り鼻^{はな}を捻^ね上げる。

彌^や「アイタ、冥土^{めいど}へ來^きても未^まだ改心^{かいしん}をせず俺^{おれ}の鼻^{はな}を捻^ねぢよつて、貴様^{きさま}きつと地獄^{ぢごく}の鼻責^{はなせめ}に遇^あはされるぞよ」

一同^{いちどう}「アハ、ハ、ハ、」

彌「何だ、人が鼻を摘まれて苦しんで居るのに、敬神の道を傳ふる宣傳使たるものが、可笑しさに笑ふと云ふ事があるものか。冥土の道連に貴様の命も奪つてやるのだけれど既に死んだ奴だから奪る命もなく、エ、残念な事だ。鬼にでも遇つたら全部告發してやるからさう思へ」

與「エ、仕方の無い奴だナア。此奴甦りそこねよつて、身魂の轉宅をやらかし發狂しよつたな」

と拳骨を固めて横面をポカンと撲る。その勢に彌次彦はヒヨロヒヨロとひよろつき、石に躓き「ばたり」と倒けた。

彌「アイタ、やつぱり痛い事が分る哩、さうすると未だ娑婆に居つたのかいなア。ヤア日の出別さま、鷹サン、岩サン、梅サン、駒サンに音サン、與太彦に、もう一匹のお方」

音「アア、お前はそれだから困るのだ。性念がつくと直他のお方を捉へて一匹だなんて口の悪い男だナア」

彌「ヤア矢張本當だ。コシカ峠の谷底だつたワイ」

一同「氣が付いた、氣が付いた。サア祝に祝詞の奏上だ」

一同は眞裸となつて川に飛び込み、御禊を修し天津祝詞を奏上する。

日「オー思はぬ時間を費やした。コーカス山の神務が忙しい。吾々はお先に失敬する、皆様悠り後から来て下さい」

と云ひながら馬の手綱を掻い繰り空中目蒐けて鈴の音、轡の音勇ましく、シヤンコシヤンコと空中指して昇り行く。

岩「ヨ一遠は日の出別の神さま、天馬空を行くと云ふ離れ業は、吾々の如き力の無い宣傳使では到底望まれない。皆サンこれからフサの都に急ぎませう。彌次彦、

與太彦、モ一人のお方、悠り後から来て下さい」

六人の宣傳使は轡を竝べて駆け出さむとする。彌次彦は馬の轡を【ぐつ】と握

り、

彌「マア待つた待つた、二人の裸人はどうして下さるのだ」

岩「みな一枚づつ脱いで借して上げませうか」

一同「宜敷からう」

と上着を一枚づつ脱ぎ、
一同「三人様、後から悠り来て下さい。貴方は二本足、吾々は四本足に乗って居るのだから、到底追っけない。フサの都で待つて居ます」
と駿馬に鞭ち雲を霞とかけ去りにける。
彌「アア世の中は妙なものだワイ、三途川の鬼婆が、裸體の吾々を捉へて衣服が無ければ親譲りの皮衣を出しやらぬかと吐しよつたに、遠は三五教の宣傳使、立派な着物脱ぎ捨てて惜し氣もなく二人に與へて往つてしまつた。オイ與太、羽織ばかり貰つたところで、仕方が無いぢやないか、帯もなし、袴もなし、生憎針も糸も持つて居ないから、仕立直すわけにも行かず、ア、これだから獨身生活は困ると云ふのだ。青瓢箪のやうな嬪はあつても、高取村まで歸らねばお目に懸る譯にも行かず、電話でもあつたら掛けて呼び寄せるのだけれど、仕方がないなア」
與「良い事がある、羽織を倒まにして袖に兩足を突込めば立派な袴が出来る。さうして上に羽織を着るのだ、もう一枚の羽織を前後にして着さへすれば好い、何と妙案だらう」

彌や 〇 妙案めうあん々々、しかし帯おびは如何どうするのだいい〇

與よ 〇 帯おびは其邊そこらの蔓かつらを【むし】つて臨時代りんじだい用だ。これを着きて久ひさし振ぶり女房にようぼうの家いへへ歸かへり、門口かどぐちに立たつて、女房喜にようぼうよろこべ、背中せなかがお腹はらになつたぞよ、と【かま】すのだ。そこで女房にようぼうの奴やつ、一ひとつ逃のがれて又一またひとつ〇

彌や 〇 オイオイソナ滑稽こつげいを云いつて居ある場合ばあひぢやないぞ、ソナ事ことは五十萬ごじふまん年後ねんご未み來らいの十九世じふくせい紀きとか云いふ時ときの、ガラク夕人にんげん間の近松ちかまつとか出雲いづもとか何なんとか云いふ坊主ぼうず上あがりが作る文句もんくだ。今いまは天孫てんそん降臨かうりん前ぜんの原始時代げんじじだいだ。未み來らいの夢ゆめを見みる奴やつがあるかい〇

與よ、六ろく 〇 ウフ、〇

彌や 〇 お前まへは何處どこから降ふつて來きたのだ、何なんといふ男をとこだい〇

六ろく 〇 ハイ、私わたくしは六ろくといふ男をとこでございます〇

彌や 〇 何どうせ【ろく】でも無ない奴やつだと思おもつて居をつた。【ろく】ろくに挨拶あいさつもしよら

ぬと何なんだい、その六むつヶしい顔かほは〇

六ろく 〇 どうぞ以後いごお見み知り置おかれまして、お六むつまじう末長すゑながく御交際ごかうさいを願ねがひます〇

與よ 〇 アハ、此奴こいつは面白おもしろい、三人世さんにんよの元もとだ、いよいよ之これからコシカ峠たつげの四十八坂しじふやさかを

跋渉し、ウラル教の奴輩を片端から言向け和し、フサの都に凱旋をするのだ。何時迄もコンナ谷底に呆け顔してウヨウヨして居るのも氣が利かない。さあさあ馬丁、馬の用意だ」

六「馬ア何處に居りますか」

彌「何、膝栗毛だ。心の駒に鞭打つて敵の牙城に突撃を試むるのだ。一二三四、全隊進めツ」

與「オイオイ彌次公、四とは何だ、三人より居ないぢやないか」

彌「馬鹿云ふな、守護神がついとるぞ、サア詔直して今度は一人二人で勘定だ。

俺が一つ標本を出してやらう、俺が、一人二人三人四人 五匹六匹 七人 八匹

九匹 十人 十一匹十二匹、と斯う云ふのだよ」

與「怪體な勘定だな、何故ソナ人と匹とを混合するのだい」

彌「極つたことよ、人間が三人に守護神が三人、四つ足が六匹だ、貴様等の守護

神は一匹二匹で澤山だよ」

與「馬鹿にしよる、エ、仕方がない、一匹でも連が多い方が道中は賑やかだ、才

イ六人六匹突喊々々ろくにんろつびきとつかん

と馬鹿口を叩きながら絶壁を、木の株を力に坂道まで漸く辿り着いた。

彌や「ア、此處だ此處だ、ウラル教の奴、數百人をもつて吾々を圍みよつた所だ。」

彌次サン與太サンの古戰場だ。亡魂が此邊に迷ふて居るかも知れぬ。記念碑でも

建ててやらうかいた

與よ「アハ、、、好く洒落る奴だナア」

六ろく「之から先には四十八坂と云ふ大變な峻い坂がありますぜ、まア悠りと此處で

休息して行きませう、大分に長途の旅で疲れましたからナア」

彌や「馬鹿にするない、長途の旅が一寸の旅が知らないが、今此處の谷川から漸く

此處まで登つて來たばかりぢやないか」

六ろく「私は宣傳使のお伴をしてサル山峠の頂上から七八里の道をテクツて來ました、

足が草臥れて居ます、一寸一服さして下さいな」

彌や「何だ、八里や十里歩いたつてそれ程苦しいか、俺たちは今十萬億土の旅をし

て來たところだ。それでも俺のコンパスはコンナものだい。アハ、、、」

かく雑談に耽る折しも、数千頭の野馬群をなして此方に向つて駆け来る。

六「ヤア有難いものだ。天の與へた野馬に乗つて往く事にせう、鞍もなし裸馬に

乗るのは野馬なものだが、仕方がないワ、もしも野馬と一緒にこの溪谷に迂り落

ちて又もや彌次サンや、與太サンのやうに冥土の旅をするやうになつたら後世の

人間が此處は六道の辻の六公の終焉地だ。野馬の落ちた處や、野馬溪だと記念碑

でも建てて名所にするかも知れぬぞ。オイ、野馬公の奴、六サンの仰せだ、馬匹

點檢だ、全隊止まれ。ヤアこの野良馬奴、吾輩の言靈を馬耳東風と聞き流しよる

ナ、餘り馬鹿にしない」

馬「モシモシ三人の足弱サン、私に御用ですか、賃金は幾何出します」

六「ヨ一此奴、勘定の高い奴だナ、ウラル教だな。世が曇つて來ると馬までが化

けよつて人語を使ふやうになつて來る哩、もう世の終りだ」

馬「馬でも物を言ひますとも、狐でも狸でも物を云つてるぢやないか」

彌「何處に狐や狸が物を云つてるかい」

馬「お前サンの腹の中から副守護神とか云つて喋つて居るよ。狐が物言ふのに馬

が物云はれぬと云ふ規則があるか、お前も聞いて居るだらう「馬が物云ふた鈴鹿の坂で、お三女郎なら乗せうと云た」この馬サンも女なら乗せたいのだけれど、ソナナ缺杭の化け物見たやうな唐變木を乗せるのは些と背が痛い。しかしお三の變りに狐三匹乗せてやらうか、お前のやうな奴は、世間から「狐を馬に乗せたやうな奴」だと云はれて居るから名實相伴ふ、言行一致三五教の教理の實現だ。ど
うだ、この馬サンのヒンヒン、ヒントは外れはせまい」
六「馬いこと吐しよる、馬鹿々々しいが、今日は彌次彦、與太彦サンの御命日才ツトどつこい再生日だから、お慈悲で乗つてやらうかい、貴様もこれで後の世には人間に生れて來られるワ、宣傳使を乗せた御利益と云ふものは偉いものだぞ」
馬「人間を乗せるのなら有難いけれど、狐や狸の容器を乗せるかと思へば情なくなつて來た。ヒンヒンヒン、貧ほど辛いものがあらうか、四百四病の病より、辛いのは狐狸に使はれる事だ。ア、慈善的に四十八坂を渡つて野馬溪の實現でもやつて、末代名を残さうかな」
彌「こりや怪しからぬ、迂闊乗れたものぢやないぞ」

馬「人には添ふて見い、馬には乗つて見いだ、サア早く乗らぬかい、貴様は毎時眞つ暗な處へ嬢アの目を「ちよろまか」して、金を盗んで、行燈部屋に放り込まれ、終には馬をつれて歸る代物だよ。馬に送つて貰ふのは、一寸願つたり叶つたりだ、ヒンヒンヒン」

三人「エ、八釜しい哩、それほど頼めば乗つてやらう」

と、數十の馬を目蒐けて飛びついた。

彌「ヤア此奴は宛が違つた、鞆丸のある奴だ。同じ乗るのなら牝の方に乗り換へてやらうか、身の過失は「のり」直せだ」

馬「ドツコイ、さうは行かぬぞ、乗りかけた船ぢやない馬だ。もうかうなつては此方の者だ、鷲掴の源五郎のやうに、急坂になつたら前足を上げて「デングリ」返つて背で腹を潰してやるのだ。ヤア面白い おもしろい」

與「俺のは牝だ、此奴は些と温順しいらしいぞ」

六「俺のも牝ぢや」

彌「ヤイ八釜敷いわい、馬がヒンヒン吐してピン棒籤を抽いて困つて居るのに、

貴様迄きさままでが同じおなにヒンヒンと吐ぬかすな、ヒンの悪いわる」

數多あまたの馬聲うまこゑを揃そろへて、

「ヒンヒンヒン、ヒンヒンヒン」

(大正一一・三・二三 舊二・二五 加藤明子録)

第五章 風馬牛ふうばぎう〔五五五〕

三人さんにんは驛馬かんばに跨またがり放屁はうひの砲擊はうげきを受けながら小鹿峠こしかたうげの急坂きふはんを一目散いちもくさんに登のぼり行ゆく。

彌や「長鞭馬腹ちやうべんばふくに及およばずだ、エー邪魔臭じやまくさい、鞭むちは無用むようだ」

と馬上ばじやうより惜をし氣げもなく鞭むちを投なげ捨すてた。

馬うま「無智むちな奴やつの、人三化七にんさんばけしちに鞭むちの必要ひつえうがあるものかい、牛飲馬食ぎういんばしよくの大將奴たいしやうめ、もう此處こゝらで一つ直立ちよくりつしてやらうかい」

彌や「馬公うまこうの奴やつ、減へらず口ぐちをたたくな。古今無雙ここんむさうの乗馬じやうばの達人たつじん、彌次彦やじひこサンを知ら

ないか、愚圖々々吐すと胴腹を締めて息を止めてやらうか」

馬「ヒ、ヒ、ヒンヒン、可笑しい哩、蚊の一匹も留つたやうな感覺も起らぬワ、

狐の容器奴が」

彌「オイ、畜生、口が過ぎるぞ。主人に向つて無禮であらうぞ」

馬「ヒ、ヒ、ヒン、美ん事仰有る哩、轡も嵌めずに馬に乗る奴があるかい、餘

程いい頓馬だな」

彌「頓馬とは貴様の事だよ」

馬「彌次彦の馬鹿者奴、お竹の宿で小便を飲まされよつて、此奴は馬の小便ぢや

無からうかと馬首を傾けて思案した時の可笑しさ、屁馬ばかりやる奴だな。そ

れだから馬拔野郎と言ふのだ」

彌「エー、能く轉る頓馬野郎だ、轡は無し一寸困つたな」

馬「轡が無けりや乗らない、貴様は木馬で結構だ。何でも今の奴は金の轡さへ嵌

めさへすれば溫柔しくなるのだよ、如何だ、金を持つとるか」

彌「俺も貴様のやうな頓馬だから此頃は手許不如意でヒンヒン（貧々）だ。オイ

與太彦、貴様の馬は如何だ

與「乗心地が良いワ。女偏に馬の字に跨つた様な気分だよ」

彌「エー仕方が無いワ、コンナジヤジヤ馬に乗り合したのが災難だ。オイ六サン、

お前は如何だい」

六「俺もチヨボチヨボだ、乗心地が良いよ、何とも言へぬ良い氣持だ。丁度金龍、

銀龍に乗つとる様な股倉加減だよ」

彌「エー、異馬々々しい、貧乏籤を抽いたものだワイ」

馬「オイ彌次サン、お前は彌次馬だから仕方が無いよ。マア馬の俺の背中から空

中滑走をやつて着陸して頭をポカンと割つて、ま一遍十萬億土へ行つて來い、さ

うすれば立派な馬に乗れまいものでも無いワ」

彌「エー、能う口答をする馬鹿野郎だナア」

馬、鬘を振り立て目を瞋らし口を開けてガブツと腕を噛みかけやうとする。

彌「コラ、何をしやがるのだい、ジヤジヤ馬奴が、貴様等に噛まれて堪るかい」

馬「直立しやうか、貴様は四足の容器だから一遍ぐらゐ人間らしう直立した馬に

乗つて見るも良からう」

彌「コラ、馬は馬らしうせぬかい、四足が立つて歩くといふことは天則違反だぞ」

馬「ヒンヒンヒン、それは貴様の事だ。四足身魂が偉相に、立つて歩くのが何が

不思議だい、ヒンヒンヒン」

彌「エー仕様の無い奴だ、もう暇を遣はす、これから親ゆづりの膝栗毛に乗つて

歩かうかい、胴柄ばかり大きくて、屁ばかり達者な頓馬野郎奴、止まれ止まれ、

下りてやろう」

馬「下さぬぞ下さぬぞ、下す所が違ふワ。も少し待つて居れ、この先に大變な斷

巖絶壁があつて、谷底には猿捉茨が一面生えてゐる、そこまで行つて下してやら

ぬと根つから興味が薄い哩」

彌「此奴は聊か迷惑千萬馬の、閉口頓首ぢや」

馬「今に閉口頓死だよ」

彌「何を吐しやがるのだ、落すなら落して見よ。貴様の鬢に喰ひついて居るから

貴様も一所に猿捉茨の中に埋没だ。死んだ馬につけたら能う動かぬほど、其處に

なつたらドツサリと賃銀をはりこんで與る哩

馬「サア之からだ、一ン二ン三ンツ」

彌「コラ、暴れるな、靜にせないかい、俺は貴様が暴れると喰ひついて血を吸ふてやるぞ、それでも可いかエーン」

馬「何だか、チツポイ人間だと思つたら貴様は蚤の如うな奴だ。馬偏に蚤といふ奴は騒ぐに定つてる。ヨシ之から一騒ぎだ、覺悟せい」

彌「もう仕方が無い、馬上悠かに此世の名残りに飲食でもやらうかい。馬よ騒げよ、一寸先や闇だ、蚤が食ひついて飲食だ、これが牛飲馬食だ、チツト噛つて遣らうかい」

馬「ヒンヒンヒン、貧相な奴だな、品格の悪い」

彌「何だ、宣傳使の人格を品等すると言ふ事が畜生の分際としてあるものかい」

馬「ヤア、もう斯うなつたら破れかぶれた、ジャジャ馬だ」

と言ふより早く鬢を震つて直立し、前後左右に二三間ばかり空中に跳び上り狂ひ廻るにぞ、

彌「コラコラ静しづかにせないか、目めが廻まはるわい、目めどころか、山やまも道みちもみんな廻まはり出したワイ、ジヤイロコンパスの様やうに、そこらが廻くわいてん轉てんし出した哩わい、いい加減かげんに静しづまらないか」

馬「何なに、貴様きさまが落おちる所ところまで暴あばれるのだ。今いまに冥土めいどに送おくつてやるのだ」

彌「鳴動めいどうも爆発ばくはつもあつたものかい、これだけクルクル廻まはる地球ちきうじやう上うへは俺おれも嫌いやになつた哩わい、何でも世よの立替たてかへが急速度きふそくどを以もつて開展かいてんして行ゆくと見みえるわい。ア、ア、能よく廻まはる世よの中なかだ」

馬「輪廻りんねに迷まよふ淺間あさましさ、回天動地くわいてんどうちの神業しんげふに参加さんかすると貴様きさまは毎時いっも吐ほざいてゐるが如何どうだい、回天動地くわいてんどうちの大事業だいじげふは馬サンの活動くわつどうに勝まさるものはあるまい、一分間いっぶんかんに八千回はっせんくわい、回轉くわいてんするジヤイロコンパスよりも早はやい俺おれの放はなれ業わざには感心かんしんしたか」

彌「恐おそれ入いつた、もう耐こらへて呉くれえ」

馬「醜態しうたい見みやがれ、一いっ體たい俺おれを誰たれだと思おもつてるのだ」

彌「畜生ちくじやうの馬公うまこうぢやないか」

馬「馬鹿ばかだな、俺おれは木花姫このはなひめの分靈わけみたまだ、罵倒ばたふくわんのん觀音くわんおんだ。すなはち馬頭觀音ばとうくわんのんさま様さまだよ」

彌や「これはこれは、失禮しつれいいたしました、何卒どうぞ許ゆるして下さいませ」

馬うまブウブウブスと音を立たてて屁へのやうに消きえて仕舞しまつた。

彌や「ア、ア、大變たいへんだった、恐こわい目に遭あはされた。オー與よ太公たこう、六公ろくこう、貴様きさま、馬うまは

如何どうしたのだ」

與よ、六ろく「馬うまを如何どうしたつて、誰たれが馬うまに乗のつたのだい」

彌や「貴様きさま、今いまいい氣きでヒン馬ばに跨またつて此處ここまで來きたのぢやないか」

二人ふたり「馬鹿ばか言いふない、俺おれたちは親讓おやゆづりの交通機關かうつうきくわんで【てく】つて來きたのだ、貴様きさま

も矢張やっぱり何なんだか妙めうな面つらをしよつて目めを塞ふさいだまま歩あるいて居をつたぢやないか、歩あるき

もつて夢ゆめを見みよつたのだな、氣樂きらくな奴やつだ、ア、コンナ奴やつと道連みちづれになるのも頼たより

ない事ことだナア」

彌や「ハテ、面妖めんえうな、合點がてんの往ゆかぬこの場ばの光景くわうけい、何物なにものの仕業しわざなるぞ」

與よ「アハ、ハ、何なんだ、大おほきな目めを剥むきよつてコンナ處ところで芝居しばゐをやつたとして誰たれも

觀客くわんきやくは出でて來きはせないぞ。【ど】拍子びやうしの抜ぬけた銅羅聲どうらこゑを出だしよつて、團栗眼どんくりまなこを廻くわい

轉てんさせて大根役者だいこんやくしや奴めが、何なんの眞似まねだい、チツト春はるさきで逆上のぼせよつたな、ア

八、、、、、

彌「そうすると矢張り夢だつたかいな」

與「一遍手洗を使はむかい、恍け人足奴、貴様は圖體ばかり仁王の荒削り見たい

な奴だが、大男總身に智慧が廻りかねか、獨活の大木、胴柄倒し、困つた奴だナ

ア。この與太サンは身體は小さくても山椒小粒でもヒリリツと辛いと言ふ哥兄サ

ンだぞ」

彌「チャチャ吐すない、鶏は跣足だ」

與「馬は大きくてもふりまらだ、チツト禪でも締めて、しつかりせむかい、ア

八、、、、、

彌「この小鹿峠はやつぱり噂の通り化物峠だ、しつかりせむとお三狐に【ちよろ】

まかされるぞ」

與「ア八、、、、吐したりな吐したりな、自分が【ちよろ】まかされよつて憚り

さまだ、この與太サンはチツト身魂の製造法が違ふのだ。貴様のやうな粗製濫造

とは聊か選を異にしてゐるのだぞ、喃う六公」

六 恰で彌次サンは六道の辻に亡者が迷ふた様な人ですな

與 オイオイ、亡者の序に向ふを見よ、澤山の亡者が来るぢやないか

彌 貴様こそ恍けて居よる、彼奴は牛ぢやないか

與 牛だから【もうじや】

彌 何を吐しやがる、コンナ處で口合ひを出しやがつて

六 【くちあい】ものには蠅が集るか、アハ、ハ、ハ、ハ

彌 眞實に澤山な【もう】公ぢや、オイ如何だ與太公、馬を牛に乗り換へたら

與 乗り換へるも乗り換へぬもあつたものかい、馬に乗つた覚えがないぢやない

か

牛の群ドシドシと三人の前に突進し來たる。

與 牛公の奴、貴様の喧嘩ぢやないが天地間は、もちつ、もたれつぢや。如何だ、

附合に俺を一つ乗せて行かないか、附合ぢやと言つても俺を突いては困るよ

牛 【もう】止めておこかい、【もう】昧頑固な【もう】碌を乗せたつて【もう】

からぬからな

與「此奴、洒落た事を言ひよる、一寸談せる哩、乗つてやらうか」

牛「乗るなら乗れ、その代りに牛々言ふ目に遇はされるぞ」

與「何を吐しよるのだ、ソナ不心得の事をしよつたが最後、貴様の【どたま】

をトン骨とやつて肉は喰ひ皮は太鼓に張つてやるのだ」

牛「マア兔も角、乗つたが良からう」

與「ヨ、有難い、牛に引かれて善光寺詣りと言ふ事は聞いて居るが、牛に乗つて

コーカス詣りか。合ふたり、適ふたり、開いた口に牡丹餅、三口に【しんこ】、

四つ口に羊羹、に踵、【ピツタリコ】だ。水も漏らさぬ仲となつてコーカス

詣でだ」

牛「オイ與太公、俺の朋輩は百人、貴様の連れは三匹だ、この中から選挙して何

れなつと乗るが宜からう」

彌「サアサア選挙権の所有者は三人だ、被選挙権者も三匹だ、如何だ、普通選挙

でやらうかな」

牛「如何でも宜いわ、早くやらないか」

與よ 「一人一票だ、俺おれは赤あかの牝めんだ」

牛うし 「貴様きさま、矢張り牝めんが好きだな、餘程よつほどあかだと見みえる哩わい」

六ろく 「俺おれは白しろの牝めんだ」

牛うし 「白しろい牛うしに烏からすのやうな男をとこが乗のると似合にあはないぞ、一層いっそう黒くろにして乗のつてやれ」

六ろく 「俺おれは牛うしに乗のるのは「しろ」人うとだから白しろにするのだ。黒くろに乗のつて、苦勞くろうするの

は困こまるからのう」

彌や 「俺おれは選舉權せんきょけんの棄却ききやくだ」

牛うし 「神聖しんせいな一票いっぺうの選舉權せんきょけんを放棄ほうきすると言いふ事ことがあるものか、立憲政治りっけんせいぢを何なんと心得こころえ

てゐる」

彌や 「俺おれは馬うまに乗のつた夢ゆめを見て、懲こり懲こりした、もうもう乗のり物ものは廢止はいしだ。これか

らボツボツと「てくる」事ことにしやう、乗のつた所ところで牛うしの奴やつ、足あしが遅おそいから却かへつてテク

が良いい譯わけだ」

與よ 「ソナラ俺おれは乗のせて貰もらはう。オイ六公ろくこう、貴様きさまも乗のつたり」

六ろく 「乗のらいでか、口八くちやちで乗のせてやらうと言いふのだもの、コンナ安價やすい乗のり物ものがあ

るかい、サア白サン、赤サン、歩いたり歩いたり」

赤、白「ヤア當選の光榮を得まして有難うございます」

與「極つた事だ、一騎當千の英雄豪傑が乗つて居るのだもの、當選するのは當然

だ、サア進んだり進んだり」

赤「オイ、與太サン、この先へ行くと峻い坂がある、その坂まで行つたら直立す

るから覺悟してお呉れや」

與「よしよし直立せい、俺は貴様の角に喰ひ付いて居るから大丈夫だよ」

白「これこれ六サン、俺もチヨボチヨボだ、この先へ行くと羊腸の小徑がある、

そこを通る時は如何しても直立せねばならぬから、しつかりなさいよ、千人の者

が九百九十九人まで落ちて死ぬ處だから……」

六「ヤアソナ處があるのかい、ソナラもう此處で破約だ、小便だ、下して呉

れ」

白「下して堪るか、喃、赤公」

赤「極つた事だ、下すのはまだ早い、斷巖絶壁で振り落してやらうかい」

三人さんにん「アア偉えらい夢ゆめを見たみ喃のう、夢ゆめの中なかに夢ゆめを見みたり、何なにが何なんだか有名いっめいむじつ無む實じつ、曖あい昧まい朦まうろう朧ろう、アア小こ鹿しか峠たうげだ、「こしつか」りと腹はら帯おびでも締しめて行いかうかい」
(大正一一・三・二三 舊二・二五 北村隆光録)

第二篇 幽山靈水いっざんれいすゐ

第六章 樂隱居らくいんきよ（五五六）

彌次やじ、與太よた、六公ろくこうの三人さんにんは、怪訝けげんな顔かほして小こ鹿しか峠たうげを登のぼつて行ゆく。十七じふしち八はつ丁ちやうも來きたと思おもふ頃ころ、路傍ろぼうに可かなり大おほきな巖窟がんくつのあるののに目めがついた。
六ろく「彌次やじサン、與太よたサン、非常ひじやうな狭せまい途みちになつたものだナア、一方いっぱうは斷巖だんがん絶壁ぜつぺき、

眼下の谷川は激流飛沫を飛ばし實に物凄き光景、一瞥するも肌に粟を生ずるやうだ。そのまた狭い途に大變な巖窟が衝き立つてゐるぢやないか。彼奴はナンデも可笑しい奴だ。ウラル教の奴がこの難所に、吾々を待ち受けして居るのぢやあるまいか」

彌「ヤーホントに馬の背中のやうな細い途に、巖窟が又ツト突き出てゐるワイ。此奴は些とをかしいぞ。一つ【ここら】から石でも抛つて瀨踏して見やうかい」
與「よかろう、一つ測量だ」

と云ひ乍ら、手頃の石を掴んで三人一度に速射砲的に、巖窟目蒐けてパチパチパチと打ちつける。巖窟の中より、

「ヤーイ危ないわい。何を【テンゴ】するのだい」

彌「これほど岩を以て固めた洞穴に石が當つたつて應へるものか。一寸眠りを醒してやつたのだよ。一體そこに居る奴は何者だ」

巖窟の中より「俺だ俺だ。貴様は誰だい」

彌「俺も俺だ。矢つ張り人間だ」

巖窟がんくつの中なかより「貴様きさまはウラル教けうか、三五教あななひけうか」

彌や「三五教あななひけうのお方かただよ」

巖窟がんくつの中なかより「オーさうか。間違まちがひはないか。俺おれも三五教あななひけうだ、ウラル教けうの奴やつに捉つかまへられて、コンナ處ところへ閉ぢ込められたのだ。助たすけて呉くれないか」

與よ「オイオイ彌次公やじこう、氣きを付つけないといかないぞ。惡神あくがみの奴やつ、ドンナ計略けいりやくをやつ

てゐるか分わかつたものぢやないワ。オイ巖窟がんくつの中なかの代物しろもの、貴様きさまは本當ほんたうに三五教あななひけうな

らば何なんといふ名なだ、言擧ことあげせぬかい」

巖窟がんくつの中なかより「貴様きさまから名なを聞きかして呉くれ。若もしもウラル教けうだと駄目だめだからのう」

與よ「ハ一矢やつ張ばり此奴こいつは三五教あななひけうらしいぞ。中々なかなか語氣ごきが確しつかりしてゐる哩わい。コンナ

穴あなへ閉ぢ込められて彼あれだけの元氣げんきのある奴やつは三五教あななひけう式しきだ。ウラル教けうの奴やつならき

つと泣聲なきこゑを出だしよつて、「モーシモーシ、上のほり下くだりのお客きやくサン、何卒どうぞ憐あはれと思召おほしめ

し、難儀なんぎな難儀なんぎな私わたくしの境遇きやうぐうを憐あはれみ下くださいませ。モーシモーシ、通とほり掛がりのお旦だん

那樣なさま、難儀なんぎな盲目めくらでございます」と機軸きかいてき的に乞食こじき「もどき」に吐ぬかすのだけれど、

何處どことなく言靈ことたまに強味つよみがあるやうだ。不自由ふじゆうな巖窟がんくつの中なかに閉ぢ込められて居をつて

さへ、あれ丈たけの元氣げんきだから、假令たとへウラル教けうにしても少すこしは氣骨きこつのある奴やつだ。一ひと

つ外そとから擲からかつ掬みて見みやうかい一

彌や「それも面白おもしろからう。オイオイ巖窟いはやの中なかのご隠居いんきよサン、嘸さぞや御退屈ごたいくつでございま

せうナ一

巖窟がんくつの中なかより「エー滅相めつさうな、小ちいさい穴あなが前まへの方ほうに開あいて居をりますから、時々ときどき外部そと

を覗のぞきますと、小こ鹿川しかがはの緑紅みどりねなみこき混ませて、春しゆん色しよゆたか豊ひまつに飛沫ひまつを飛とばす川かはの流ながれ、實じつに

天下てんかの絶景ぜつけいですよ。お前まへサンも年としが寄よつて隠居いんきよをするのならいんきよコンナ所ところを選えらんで、

常磐ときは堅磐かきはに鎮座ちんざするのだな一

彌や「此奴こいつは面白おもしろい奴やつだ。オイオイご隠居いんきよサン、お前まへの年とし齡いは幾いくつだ一

巖窟がんくつの男をとこ「俺わしかい、どうやら斯こうやら數かずへ年としの三十さんじふだよ一

彌や「それはあまり若わか隠居いんきよぢやないか。人にん間げんも三十さんじふといへば元氣げんき盛さかりだ。これから

五十萬年ごじふまんねんの未み來らいに於おいて、支那しなに丘きうとか孟まうとか云いふ奴やつが現あらはれて、三十さんじふにして立たつ

とか吐ほくぢやないか。今いまから隠居いんきよするのはチト勿體もつたいないぞ。一いつ體たいお前まへは何なんと云いふ

男おとこだい」

巖窟の中より、「俺は元はウラル教の信者であつたが石凝姥の宣傳使がコーカス山へ往く時に、孔雀姫の館に巡り會ふて、それから改心を致し三五教になつたのだが、神様に對して一つの功もよう立てないので、ナントカ御用に立たねばならぬと、また元のウラル教へ表面復歸して捕手の役に加はつて居つたのだ。さうした所が三五教の宣傳使が二人の供を伴れて關所に迷ひ込んで來た。俺たちの同僚は血のついた出刃を以て猪を料理して居つた所、三五教の奴が來たので、いつそのこと荒料理をしてやらうかと、側の奴が吐すので俺も堪らぬやうになり、三五教の宣傳使に一寸目配せしたら、押戸を開けて一目散に遁げて了つた。サア、さうすると同僚の奴、貴様は變な奴だ。やつぱり三五教の臭味が脱けぬと見えて、何だか妙な合圖をしよつた。懲戒のために無期限に此處に蟄居せよと吐しよつて、昨日から押し込められたのだ。俺は三五教の勝公といふ男だよ。早く天の岩戸を開けて俺を救ひ出して呉れないか」

彌「待て待て、今天の岩戸開きをやつてやらう。オイ與太彦、貴様は大麻を以て被ふ役だ。俺は天津祝詞を奏上する、六公は何も供物が無いから木の葉でも「む

し】つて御供物にするのだよ」

勝「エー洒落どころぢやないワ。早く開けて呉れないか」

彌「定つたことよ。【あけ】たら【くれ】るのは毎日定つてゐる。【あけ】ては

【くれ】あけてはくれ、その日その日が暮れるのだ。アハ、ハ、ハ、ハ」

勝「エー辛氣くさい。可い加減に【じら】して置け」

彌「【じら】すとも、貴様はコンナ所に窮窟な目をして、可憐らしい奴だから此

方も意地で【じら】してやるのだ。アハ、ハ、ハ、ハ」

與「オイオイ彌次彦、ソナナ與太を云ふな。早く開けてやらぬかい」

彌「開けて悔しい玉手箱、後でコンナことだと知つたなら開けぬが優であつたも

のを、會ひたい見たいと明暮に、ナンテ芝居もどきに、愁歎場を見せつけられて

は困るからなア」

六「エー碌でもないことを云ふ人だナア。綺麗さつぱりと開放して上げなさい」

彌「ア、さうださうだ、開けて上げませう。ヤー偉い錠を下してゐやがる哩。折

悪く合鍵の持合せがないから、オイ勝サンとやら、仕方がないワ。まあ悠くりと

時節じせつが来るまで御逗留ごとうりう遊あそばせせ」

勝かつ「そこら」に在ある手頃てごろの石いしを以もつて錠前ぢやうまへを碎くだいて出だして呉くれ」

彌や「コンナ立派りつぱな錠前ぢやうまへを「むざ」むざと潰つぶすのは勿體もつたいないぢやないか」

勝かつ「勿體もつたいないも糞くそもあつたものか。ウラル教けうの錠前ぢやうまへだ、木葉こつぱ微塵みぢんに碎くだいて出だして

呉くれ」

彌や「待まて待まて、折角せつかく出来できたものを破壊はくわいするといふことは、一寸考ちよつとかんがへ物ものだ。過激くわげき主しゆ

義ぎのやうになつては、天道てんだうさま様へ申譯まをしわけがない。何なんとか完全くわんぜんに原形げんけいを存ぞんして、開あける

工夫くふうがあるまいかな」

六ろく「もし此處ここにコンナものがある。これは屹度きつと何なにかの合圖あひづでせうで」

と言いひ乍ながら小指こゆびのやうな形かたちをした巖壁がんべきの細長ほそながき巖片がんぺんをグツと押おした途端とたんに、岩いはの

戸とは苦くもなくパツと開ひらいた。

彌や、與よ「アハ、ハ、ナア、ナダ、鼻糞はなくそで的まとを貼はつたやうなことしよつて、何處どこま

でもウラル教けうしきだワイ。オイ勝かつサン、早はやく出でないか」

勝かつ「この日ひの長ながいのに、さう狼狽あはてるものぢやない。まア、悠ゆつくりと皆みなサンも此處ここ

へ這入りなさい。持寄り話でもして春の日長を暮しませうかい」

彌「ヨー此奴はまた法外れの呑氣者だ。類を以て集まるとは、よく云つたものだ

ナア。馬は馬連れ、牛は牛連れだ。いよいよ此處に四魂揃つたりだ。オー勝サン、

どうぞ御昵懇に願ひますよ。私は彌次彦と云ふ剽軽な生れ付き、此奴は天下一品の

の與太だから與太彦と云ふ名がついてゐます。モ一匹の奴は「あまり」碌な奴

ぢやないから六と云ひますよ。アハ、ハ、ハ、」

勝「ア、よい所へ來て下さつた。御かげで密室監禁の憂目を免れました。お前サ

ンは何處かで見たとのことのあるやうな顔だな」

彌、與「有るとも有るとも、彼の出刃の災難に遭はうとした時、目で知らして呉

れたのはお前だつたよ。敵の中にも味方があると云つて非常に感謝して居つたの

だ。その時の恩人はお前だつたか、妙なものだな。お前に助けられて又此處で助

けられた俺達が、お前を助けるとは思議なことだ。これだから人間は善いこと

をして人を助けねばならない。神様の實地教育を受けたのだ。あゝ有難い有難い、

四人一同揃つて神言を奏上しませうか」

と巖窟前の細道を向方へ渡りやや廣き道に出で、四人はコーカス山の方に向つて、
恭しく祝詞を奏上した。

彌「此處はウラル教の奴等の勢力範圍ともいふべき區域だから、一つ元氣を出し
宣傳歌でも謳つて行きませうかい。音頭取りは私が致しませう」

一同「神が表に現はれて 善と惡とを立別ける

この世を造りし神直日 心も廣き大直日

唯何事も人の世は 直日に見直せ聞直せ

身の過ちは詔り直せ 三五教の神の道

音に名高き音彦の 神の司と諸共に

猿山峠を右に見て 荒野ヶ原を驅めぐり

見ても危き丸木橋 やつと渡つて川岸に

憩む折しも傍の 草の「しげみ」を掻き分けて

現はれ出でし黒頭巾 三五教の宣傳使

その他の奴輩一々に
何の容赦も荒繩の

縛つてくれむと雄健びの
その見幕に怖け立ち

力限りに遁げ出せば
豈圖らむや突き當る

途の眞中に醜が住む
關所の中に迷ひ込み

如何はせむと思ふ折
花も實も有る勝彦が

深き情に救はれて
虎口をのがれ息急きと

驅出す途端に道の邊の
泥田の中に迂り込み

二人諸共泥まぶれ
後より敵は襲ひ來る

何の容赦も荒肝を
取られて泥田を這ひ上り

一行三人一筋の
田圃の道を遁げ出せば
目をば「ぎよる」ぎよる睨み居る

怪しき奴が唯一人
目付の奴と全身の

此奴的切りウラル教
泥田の中へ突き落し

力をこめて傍の
後をも見ずにトントンと
小鹿峠に來て見れば

思ひもかけぬ三人の 鬼をも欺く荒男

前と後に數百の ウラルの彦の捕手共

雲霞の如く攻め來る 進退茲に谷まりて

忽ち谷間へ三人は 空中滑走の曲藝を

演じて河中に着陸し ウンと一聲氣絶して

十萬億土の幽界の 三途の川の渡場で

怪體な婆アに出會して 何ぢや彼ぢやと【かけ】合ひの

其の最中に珍らしや ウラルの彦の目付役

源五郎奴がやつて來て 要らざる繰言吐きつつ

ここにいよいよ眞裸 川と見えたる荒野原

トントントンと進み行く 行けば程なく禿山の

麓に【ぴたり】と行き當り 行手を塞がれ是非も無く

天津祝詞を聲清く 奏上するや忽ちに

地から湧き出た銅木像 からくり人形の曲藝を

一寸演じたご愛嬌ちよつと えん あいけう 煤を吐くやらミツバナをすす は
頻りに浴びせかけけるやらしき あ 茶色のやうな小便のちやいろ せうべん
虹の雨やら針の雨にじ あめ はり あめ こりや堪らぬと思ふ折おも をり
日の出の別の宣傳使ひ で わけ せんでんし 數多の弟子をば引連れてあまた でし ひきつ
やつて来たかと思ひきやき おも 冥土の旅は嘘の皮めいど たび うそ かは
流れも清き小鹿川なが きよ こしかがは 川の眞砂に横臥してかは まさご わうくわ
夢の中にも夢を見るゆめ なか ゆめ み 怪體な幕を切り上げてけたいまく きりあ
木株を力に元の道こかぶ ちから もと みち 登つて見れば數百ののぼ み すうひやく
馬が出て来る牛が来るうま で く うし く 馬と牛との夢を見るうま うし ゆめ み
やつと此處まで来て見ればここ きて み 思ひも寄らぬ巖窟におも よ がんくつ
三五教の宣傳使あななひけつ せんでんし 負ても名だけは勝サンがまけ な かつ
三十男の樂隱居さんじぶをらうきんきよ 神の恵みに巡り合ひかみ めぐ めぐ あ
互に見合はす顔と顔たがひ み あ かほ かほ 善と善との引合せぜん ぜん ひきあは
コンナ嬉しいことあるかつれ 善と惡とを立別けるぜん ぜん あく たてわ

神かみの教をしへのわれわれは
 前途ぜんと益ます々ます有望いうばうだ
 進すすめよ進すすめいざ進すすめ
 四魂しこん揃そろつて堂だう々だうと
 曲まがの砦とりでに立たち向むかひ
 ウラルの彦ひこの目め付つけ等を
 片かたつ端はしから打うちのめし
 勝鬨かちどき擧あげて高架コーカサス索山さんの
 神かみの御前みまへに復かへり言こと
 申まをすも左さまで遠とほからじ
 朝日あさひは照てるとも曇くもるとも
 月つきは盈みつとも虧かくるとも
 たとへ大地だいちは沈しづむとも
 三五あななひけう教けうには離はなれなよ
 ウラルの教をしへに迷まよふなよ
 進すすめよ進すすめいざ進すすめ
 曲津まがつの神かみの失うするまで
 惡魔あくまの軍勢ぐんせいの滅ほろぶまで
 曲津まがつの神かみの失うするまで

と倒こけ徳利どつくりの様やつに口くちから出で放はう題だいの宣傳せんでん歌かを謳うたひ乍ながら、
 小鹿峠こしかたうげを勢いきほひよく脚踏あしふみ鳴な
 らして進すすみ行ゆく。

(大正一一・三・二三 舊二・二五 外山豊二録)

第七章 難風（五五七）

小鹿峠の急坂を、彌次彦、與太彦、勝彦、六公の一行は、岩根に躓き、木の根に足を掻き、右に倒れ左に轉け【どつくり】の口から出任せ、野趣満々たる俄作りの宣傳歌を謳ひ乍ら、爪先上りの雨に曝され掘れたる路を、千鳥の足の覺束なくも、喘ぎに喘ぎ上り行く。塵も積れば山となる、一尺一尺跨げた足も、始終休まぬ四十八坂を、心ばかりの勝彦が、自慢お箱の十八番の坂の上に、やつと上つて、鼈に蓼を噛ました様な荒息を繼ぎ乍ら親も居らぬに【ハア】（母）ハアと息をはづませ辿り行く。

勝「皆サン、此見晴らしの佳い所で、暫くコンパスの停車をして、浩然の氣を養つたらどうですか」

彌「サア誰に遠慮會釋もありませぬワ、公然と休養致しませう、天洪然を空しうする勿れだ。しかし休養序に一つ石炭の積込をやりませうかい、斯う云ふ適當な港口は、この先には滅多に有りますまい、どうやら機關の油が涸れさうになつて

來きました」

勝かつ「何なに分ぶんアンナ堅かたい所ところへ格納かくなふされて居ゐたものだから、サツパリ倉庫さうこは空虛くうきよになつて了しまつた、何なにをパクついて可いいか、肝腎かんじんの原料げんれうはないのだから仕方しかたがありませぬワ、腹はらの蟲むしが咽喉部いんこうぶまで突喊とつかんして來きて、切きりに汽笛きてきを吹ふきます、せめて給水きふすみなりとやつて、芥ごみを濁にごしたいが、生憎あひにくたに谷たには深ふかし、起臥進退きぐわしんたい維谷これきはまると云いふ腹具はらぐあひ合あひですワイ、何なんとか良いい腹案ふくあんはありますまいかな」

彌や「オー此處ここにお粗末そまつな、火ひにも掛かけぬのに焦こげた様な色いろのした握飯むすびが、しめて二個こありますワイ、三途川せうづがはの鬼婆おにばばアサンから記念きねんの爲ために貰もらつて來きた、形而上けいじじやうの辨當べんたうだ、嘔かむ世話せわも要いらねば、五臟六腑ござうろつぷにお世話せわになる面倒めんたうも無ない。これなつと食くつて、唾液つばきでも呑のみ込んで、食くつた氣分きぶんになりませうかい」

與よ「オイオイ彌次彦やじひこ、あた汚きたい、貴様きさまはまだ娑婆しやばの妄執まうしふ………オツトドツコイ幽界いうかいの妄執まうしふが除とれぬと見みえて、婆ばばアだの、【ハナ】飯めしだのと、不潔ばばい事ことを嘔さへつる奴やつだ、可いい加減かげんに思おもひ切きつたらどうだい」

彌や「山やまに伐きる木きは澤山たくさんあれど、思おもひ切きる【き】は更さらにない………あの婆ばばアサンの、

厭らしい顔をして、齒糞だらけの「くすば」つた齒を、ニユーツと突出し「親讓りの着物をこつちやへ渡せ」と吐しよつた時の面付を、どうして思ひ切る事が出来るか、飯食ふたびに握り飯のことを思ひ出して、ムカムカして来るワイ」

與「どこまでも彌次式だな、夫れほど恐ろしい婆アに、なぜ貴様は一蓮托生だとか、半座を分けて待つて居るとか、ハンナリとせぬ、變則的なローマンスをやりよつたのだ、得體の知れぬ唐變木だなア」

彌「そこは、外交的手腕を揮つたのだよ。燕雀何ぞ大鵬の志を知らむやだ、至聖大賢の心事が、朦昧無智の人獸に分つてたまるものかい」

與「人獸とは何だ、俺が人獸なら貴様は人鬼だ」

彌「定つた事だよ、天下第一品の人氣男だもの、それだから、閻魔サンでさへも跣足で逃げる様な、あの鬼婆アが、俺にかけたら、蛸か、豆腐のやうに骨無しになつて仕舞ひよつて目まで細くして、「ミツバナ」の混つた涎を垂れよつた位だもの………貴様は俺の人氣男を實地目撃した正確な保證人だ、勝彦や、六公にも吹聴せぬかい、俺の戦功を報告するのは貴様の使命だ、縁の下の舞と埋没されては、

吾々が苦心慘憺の神妙鬼策も何時の日か天下に現はれむやだ

與「アハ、、、、貴様どこまでも彌次式だな」

彌「定つた事だ、シキだよ、天下第一品の色魔だよ。老若男女、貴賤貧富の區別な

く、猫も杓子も、鼬も鼈も、蝸牛も「なめくぢり」も、牛も馬も、この彌次サン

に向つては皆駄目だ。ア、人氣男と言ふものは随分氣の揉めるものだ。冥土へ行

けば行くで、優しいも無い脱衣婆アまでが、強烈なる電波を向けるのだから、人

氣男の色男といふ者は變つたものだよ、古今にその類例を絶つと云ふチーチャー

だ、チーチャー貴様もこの彌次彦にあやかつたらどうだ」

勝「アハ、、、、ナント面白い人足………オツトドツコイ人氣男に出會したもの

だナア」

彌「ヤア勝サン、お前は私の知己だ、英雄の心事を知る者は、君たつた一人だよ。

人氣應變、活殺自在、神變不思議の、赤門出のチャキチャキのチーチャアだから

ネ」

與「アハ、、、、開いた口が塞がらぬワイ」

彌や 開あいた口くちが塞ふさがるまい、牛糞うしぐそが天下てんかを取るとぞよ、コンナお粗末そまつな彌次やじの彌次やじ馬までも、馬糞うまぐその天下てんかを取ると時節じせつが来るくのだから、あまり輕蔑けいべつして貰もらふまいかい、

アンナものがコンナものになつたと云いふ仕組しくみであるぞよ」

與よ 「イヤー吹ふいたりな吹ふいたりな、三百十日さんびやくとをかの大風おほかぜのやうだのう」

彌や 「三百十日さんびやくとをかと云いふ事ことがあるかい、二百十日にひやくとをかだらう」

與よ 「馬鹿ばか言いへ、貴様きさまは三百代言さんびやくだいげんをやつておつた男をとこだ、十人十日じふにんとをかぐち口くちだと吐ぬかして、そ

の日暮ひぐらしの貧苦ひんくの生活せいくわつに苦くるしみ、三つ違みつちがひの兄にいサン………と云いふて暮くらして居ゐるうち

に」

彌や 「何を吐ぬかしよるのだ、そりや貴様きさまの事ことだよ、俺おれん所ところは人ひとも知しる如ごとく、高取村たかとりむらの

豪農がうのうだ、下女げぢよの一人ひとりも使つかひ、僕しもべの半人はんじんも使つかつた門閥家もんぱつかだぞ」

與よ 「アハ、ハ、ハ、半人はんじんの僕しもべとは、そらナンダイ」

彌や 「きまつたことよ、允請おんせいポリスを置おいた事ことだよ」

與よ 「ポリスでも判任官はんにんくわんか………判任官はんにんくわんの目下めしたぢやないか」

彌や 「その點てんはしつかりと判任はんにんせぬワイ、マアどうでも好よいワ、貴様きさまも一人前いちにんまへの人にん

間になるのだ。一人一黨主義で、快活に誰憚る所もなく、無限の天地に活躍するのが人間の本分だ」

與「エーソンナ雑談は中止解散を命じます」

彌「聴衆一時に立ち、喧々囂々收拾す可らずと云ふ幕だな、アハ、ハ、ハ、ハ」

勝「何と云つても、吾々は米喰ふ蟲だ、腹が減つては戦が出来ない、何とか兵糧を工面せなくてはなりませんまい」

六「御心配なされますな、今日の兵站部は私が擔任致します、お粗末な物であ

なた方等のお口には合ひますまいが、大事なければ、召あがつて下さいませ」

と背中風の風呂敷から固パンを出した。

勝「アー有難い、腹がカツカツして殆ど渴命にも及ばむとする所だつたよ」

彌「コラコラ六でもない事を言ふない、六公、人様に物を上げるのに、粗末だと

か、お口に合ひますまいとか、そら何んだ、チツト言靈を慎まないか。これは美

味しいから獻げませう、うまいから食つて見て下さいと言ふのが禮儀ぢやないか

……、ナンダ失敬な、食はれぬ様な物や、粗末なものを人に進上するといふ事が

あるかい。神様に物を獻げるのにも、蜜柑の五つ位のピラミッドを拵へて、蕪や大根人參位をあしらひ、千切や昆布、和布、果實、小鮎、ジャコ位をチヨンビリ奉つて、海河山野種々の美味物を、八足の机代に横山の如く置足らはして奉る状を、平けく安らけく聞き召せ、ポンポン……とやるぢやないか」

六「ハイハイ、あなたの御趣意は徹底しました。併し乍ら私の本心は、この麵包は美味しい結構なものだと思つて居るのだが、一寸遠慮をして、お粗末だとか、お口に合ふまいと言つたのですワ」

彌「口と心の違ふ横道者だナア、虚偽虚飾パノラマ式の生活を續けて、得々然として居るとは、何と云ふ心得ちがひだ。ソナ事を言ふ奴は、五十萬年未來の十九世紀から二十世紀の初期にかけて生れた、人三化七の吐く巧妙な辭令だ、チツト確乎せぬかい」

六「益々以て不可解千萬、合點の蟲がどうしても檢定濟みにして呉れませぬワイ」

彌「まだ貴様は分らないのか」

六「日本や支那の道德を混亂して言つたつて和漢亂は當然ぢやないか、神様は正

直と誠實の行ひをお喜びなさるのに、ナンダ、お粗末の物を、ホンの後家婆アの世帯ほど八百萬の神様に奉つて、相嘗めに聞し召せとか、海河山野の種々の美味物だとか、横山の如く置足らはしてとか、現幽一致に御透見遊ばす神様の前に、虚偽を垂れて、商賣繁昌、家運長久、子孫繁榮、無病息災、願望成就、天下泰平、國土成就、五穀豐穰なぞと、齋官共が吐すぢやないか、一體全體この點が腑に落ちないのだよ」

彌「分らぬ奴だなア、この天地は言靈の幸はふ國だ、悪い物でも善く詔直すのだ。少い物でも澤山なやうに宣り直すのだ、貴様の様に、善い物を悪いと言ひ、美味い物をまづいと云ふのは、言靈の法則を破壊すると云ふものだ。世は禁厭と言つて、勇んで暮せば勇む事が、とっかけ引っかけ現はれて来る、悔めば悔むほど悔み事が續發するものだ、それだから人間は、言靈を清くせなくてはならないのだよ」

六「モシモシ彌次彦サン、チツトの物を澤山だと言ひ、味無い物を美味しい物と云ふのは、いはゆる羊頭を掲げて狗肉を賣るといふものぢやないか。ソナ事をす

ると、現行刑法第何條に依つて詐欺取財の告發を爲られますよ。譯の分らぬ盲ばつかりの人間が集つてたかつて拵へた法律でさへも、是丈に條理整然として居るのだ、況して尊嚴無比なる神様の御前に、詐欺をやつて良い氣で濟まして居れると思ふのか、無感覺にも程が有るぢやないか」

彌「定つた事だい、人間は神様の水火から生れた神の子だ、少しでも間隔があつて堪らうかい、無「かんかく」が當然だよ」

六「ヤア妙な所へ脱線しよつたな、本當に脱線もない………」

彌「脱線は流行ものだい、工事請負人と 結托して をやるものだから、

廣軌鐵道であらうが、電鐵だらうが、直に脱線轉覆する世の中だ、善人は悪人と見做され、悪人は脱線して善人になると云ふ暗がりの世の中だ、吁脱線なる哉脱

線なる哉だ、アハ、」

勝「廣軌鐵道とか電鐵とか云ふものは、それや何處に敷設されてるものですか」

彌「ヤア此れから數十萬年後の、餓鬼道の世の中の、文明の利器と云ふ名の付く化物のことだよ。アハ、」

六「随分あなたの滑車は能く運轉しますな、萬丈の氣焰を吐いて、我々を煙に巻
き、雲煙糢糊として四邊を包む態の鼻息、イヤモウ恐縮軍縮の至りですよ」
與「随分巨大なクルツプ砲が装置されて有ると見えますワイ、ホー砲、砲、砲、
ホー」

彌「定つた事だよ、與太公や六公の様な、與太六とはチツト原料が違ふのだ、特
別大極上等の、豊富なる原料を以て、鍛錬に鍛錬を加へ、製造したる至貴至重な
る身魂の持主だ、古今に類例を絶つと云ふ逸物だから、何と言つたつて、彌次彦
の足型をも踏めさうな事はないのだ」

勝「モシモシ彌次彦サン、あなたは餘程自尊心の旺盛強烈なる御人格者ですネー、
自分を稱して彌次彦サンと敬語を使ひ、友人に對しては、與太公だの、六公だの
と、恰も君王が僕に對する様な傲慢不遜の御態度、三五教の信者にも似合はぬお
振舞、どこで勘定が違つたのでせう。これもやつぱり脱線の世の中の感化をお受
けになつたのぢやありませんまいかな」

彌「ソナラ是から與太彦サン、六公サンと詔り直しますが、しかしよく考へて

見なさい、神を敬する如く人を敬し、我身を敬すべしと云ふ信條が三五教の何處に有つたやうに思ひます。我々は無限絶對力の至貴至尊の大神様の水火を以て生れ出で、天地經綸の司宰者たる特權を賦與されて居る者ではありませぬか、人は神なり、神は人なり、神人合一して茲に無限の權力を發揮するのでせう。吾々の靈肉共に決して私有物ではありません、みな神様の預り物です、さうだから、彌次彦サンと云つたつて別に少しの矛盾も撞着もないぢやありませんか。神素盞鳴尊様は、大蛇を退治で、串稻田姫と芽出度く偕老同穴の契を結び給ふた時に、自分の胸を抑へて「あが御心すがすがし」と、自分が自分の心を敬はせ給ひ、天照大神様は「われは天照大神なり」と自ら敬語をお使ひになつた。昔の帝様は葛城山に狩獵をなされた時にも、その御腕に蛇が食ひ付いた、その時に「あが御腕蛇かきつき」と詔らせ給ふたぢやありませんか、これを見ても敬語と云ふものは、どこまでも使用せなくてはなりませんよ、決して等閑に附すべき問題ではなからうと拜察するのです。今の奴は、君主でもない友人に對して、君とか、賢兄とか言ひ、僕でもないのに僕だとか拙者だとか云つて、虚偽の生活を送り得意がつて

與よ「コレコレ彌や次彦じひこサン、お前は又また、日頃ひごろの言行げんかうにも似にず、今日けふに限かぎつて何故なぜソ
ンナ深遠しんゑんな教理けうりを説といたのだい」

彌や「ナニ、ナンダカ口くちが辻すべつて、中なかから何者なにものかが言いひよつたのだい、彌や次彦じひこの知し
つた事ことかい、アハ、ハ、ハ、」

勝かつ「ヤア六ろくサン、結構けつこうなお辨當べんたうを澤山たくさん頂戴ちやうだいいたしました、これで元氣げんきも快復くわいふくしま
した。サア徐々そろそろ御一ごいち同様どうさま、テクル事ことに致いたしませうかな」

彌や「コレコレ勝彦かつひこサン、表おもては表おもて、裏うらは裏うらだ、この道中だうちうにソきンナ几帳面きちやうめんな挨拶あいさつは免めん
除ぢよして下くださいな、互たがひに無駄むだ口の叩たたき合あひで、われ、俺おれで行ゆきませうかい、何なんだか肩かた

が凝こつて疲勞ひらうの度どを増ます様やうだから………のう勝公かつこう、與太六よたろく」

與よ「與太六よたろくとはあまり酷ひどいちやないか」

彌や「面倒臭めんだうくさいから、與太公よたこうと六公ろくこうとを併合へいがふしたのだ、會社くわいしやでもチツト左前ひだりまへになる
と併合へいがふするものだよ」

與よ「今俺いまおれはパンを鱈腹たらぶく食くつたのだ、空腹前所ひだるまへどころか、これ見みい、この通りとほの太ふとつ腹ばらだ」
彌や「ホンにホンに、全然まるで鰻ぶぐの横飛よことび見たやうな土手どてつ腹ばらだな、蟻あしがへるの行列ぎやうれつか、鰻ぶぐの陳ちんれ

知れない。サアサア早く早く、連結んだ連結んだ」

四人は二人づつ肩と肩とを組み合せ、風に向つて強壓的に、前方三十五度の傾斜體で坂路を跋渉する。

與「イヨー此奴ア猛烈だ、今日に限つて風の神の奴、どう豫算を狂はせよつたのか、勿體なくも、天地經綸の司宰者たる人間様が御通行遊ばすのに、恐れ氣もななく前途を抗塞するとは、不都合千萬だ。ヤア六公、しつかりせぬかい、吹き飛ばされるぞ」

六「これ位な風に吹飛ばされる氣遣はないが、彌次彦サンの氣焰には随分吹飛ばされさうだ。アハ、ハ、ハ」

彌「コラコラ、貴様何をグツグツ言つて居よるのだい、この烈風に確乎勇氣を出して進まないと、内閣の乗取は不可能だぞ、グツグツしてると、九分九厘行つた所で流産内閣になつて了ふかも知れないぞ」

與「エー八釜しう言ふない、如何に神出鬼没の勇將でも、ハヤこの風に向つて、どうして突喊が出来るものかい、千引の岩でさへも中空に巻きあげると云ふ様な

風の神の鼻息だ、チツト風の神も、聞直して呉れさうなものだな、この谷間へでも落ちて見よれ、又候幽界の旅行をやらねばならぬぞ」
彌「そら何を幽界、悲観するな、モット「愉快」になつて、風を突いて突進するのだ」

與「何と云つても貴様のやうな無茶な事は、俺には到底不可能だ。如何に人間が賢いと云つてもコンナ記録破りの暴風に出會しては、人間としては到底不可抗力だ、………オイ一寸そこから一服したらどうだい」

彌「三五教に退却の二字はないぞ、どこ迄も唯進むの一事あるのみだ。一度に開く梅の花、何時までも風の神だつて、さう資本が續くものぢやない。グツグツ吐かすと足手纏ひになるから、貴様と俺とは最早國交斷絶だ、旅券を交附してやるから、サツサと本國へ引返したが宜からうぞ」

與「アア仕方のない頓馬助だナア……オイ六公、マア見とれ、向意氣ばつかり強いが、タツタ今風に煽られて、再幽冥界の探險と出かけるのが落だぞ」

この時山嶽も崩れ、蒼天墜落するかと思はるる許りの音響と共に、最大強烈な

る暴風吹き来るよと見る間に、彌次彦の羽織袴の袂に風を含んで、勝彦と手を組んだまま、中空に吹あげられ、空中飛行の曲藝を演じつつ、風に追はれて谷間の彼方に、悠悠として姿を隠した。不思議や烈風は、嘘をついた様にケロリと歇んだ。

與「ヤア大變だ、意地の悪い風だないか、彌次彦を吹飛ばして置きよつて、それを合圖にピタリと休戦の喇叭をふきよつた様なものだ」

六「あまり彌次公は大法螺をふくものだから、風の神の奴、一つ懲しめてやらうと思つて、何でも早うから作戦計畫をやつて居つたのに違ないぞ、何だか夜前から雲行が悪いと思つて居つた。ヤア夫れにしても吾々はこの儘に放任して置く譯には行かず、滅多に天上した氣遣はなからうから、吾々兩人は此處で一つ搜索をせなければなるまいぞ」

與「ナア二、彼奴ア風に乗つて、コーカス山へお先へ失禮とも何とも言はずに、參詣しよつたのだらうよ。アハ、ハ、ハ、」

六「ソナ氣樂な事を言ふて居る場合じゃあるまい、是から兩人協心戮力して、

兩人りやうじんが在處あrikaを探さうじやないかさか」

與よ「探さがすもよいが、拙劣へたに間誤まごつくと、冥土めいどの道伴みちづれにならねばならないかも知れ
ないぞ、俺おれはモウ冥土めいどの旅たびは一度いちど經驗けいけんを積つんだのだから、餘あまり苦くるしいとも思おもはぬ
が、貴様きさまは初旅はつたびだから勝手かつても分わからず、随分ずぶん困こまるだらうよこ」

六ろく「エー「ろく」でもない事ことを言いふものじやないワ、言靈ことたまの幸さちはふ世よの中なかだのに
與よ「風玉かざだまの災わざはひする世よの中なかだ、アハ、ハ、ハ、」

二人ふたりは彌次彦やじひこ、勝彦かつひこの散ちりて行いつた方面ほうめんを指さして、顔かほの色いろを變かへ乍ながら、急いそいで
元來もとし道みちに引返ひきかへし、二人ふたりの所在あrikaを搜索そうさくすることとなつた。吁あゝ、二人ふたりの行衛ゆくゑはどう
なつたであらう。

(大正一一・三・二四 舊二・二六 松村眞澄録)

第八章 泥どろの川かは (五五八)

果しも知れぬ枯野原、神の恵も嵐吹く、濁り切りたる川の邊に、二人は漸く着きにける。

彌「ヤ、何だい、又もや幽界へ逆轉旅行だな、オウ此處は三途の川だ。勝公、ナンドもこの邊に俺の【なじみ】の頗る別嬪が、樂隱居をやつて居る筈だがナア」
勝「彌次彦サン、此處はどうやら娑婆氣の離れた處のやうですなア、小鹿峠を暴風に梳づり、突貫の最中何だか氣が變になつたと思つたが最後、局面忽ち一變して草茫茫たる枯野原になつて居る、別に飛行機に乗つた覺えもないのに、何時の間にもコンナ處に來ただらう、哲學者たら云ふ奴の好く云ふ夢中遊行でも遣つたのぢやあるまいか。誰か催眠術の上手な奴を連れて來て、早く覺醒でもさして呉れないと、まかり間違へば幽界旅行となるかも知れないなア」
彌「知れないも何もあつたものか、正に幽界旅行だ、此處は三途の川の渡場だよ」
勝「それにしては、婆アが居らぬじやないか」
彌「この頃は物價騰貴で收支償はぬと見えて、廢業しよつたのだらうよ、それよりもマア俺の昔【なじみ】の別嬪が圍つて在るのだ、それに面會さして遣らうか」

い
」

勝「貴様は何處までも彌次式だな、處もあらうに怪態の悪い、三途の川の傍に妾宅を構へると云ふ事があるものかい」

彌「それでも向ふが妾宅したのだから仕方がないさ。新月の眉濃やかに、緑したる眼の光り、鼻の恰好から口の恰好、ホンノリとした桃色の頬、それはそれは何ともかとも云へぬ逸品だよ」

勝「ヨウ、ソナ逸品があるのか、俺にも「いつぴん」見せて呉れぬかい」

彌「洒落ない、これから千騎一騎だよ、青、黒、赤、白、橄欖、種々雑多の百鬼千鬼萬鬼と格闘をせなければならぬのだ。アハ、ハ、ハ、ハ、」

勝「何者が現はれ來るとも、神變不可思議の言靈の武器を使用すれば大丈夫だ、夫よりも早くその逸品とやらを、御高覽に供へ奉らぬかい」

彌「よしよし驚くな、随分別嬪だぞ、一度お顔を拜んだが最後、萬劫末代五六七の代までも忘れることの出来ないやうな、すごい様な恐ろしい別嬪だ。一寸俺に随いて來い、それ其處に見越しの松といふ小「ちん」まりとした、妾宅があると

思つたのは夢だ、茅葺の雪隠小屋のやうな中に、今頃はビイビイチョンだ」

勝「怪體な言を云ふぢやないか、何がビイビイチョンだい」

彌次彦は藁小屋の戸の隙より一寸覗いて、

彌「ヤー御機嫌だなア、また遣つて来ました、オツトドッコイ女房の脱衣場のお

婆アサン、二世の夫天下第一品の色黒い男、彌次彦サンだ、早う戸を開けぬかい」

藁小屋の中より、

「エーエーまた来たのか、よう踏み迷ふて来る餓鬼だな、この川は一遍渡つたら渡る事の出来ぬ三途の川だのに、何しに娑婆から冥土に踏み迷ふて来るのだい、

娑婆の幽霊奴が」

彌「コラコラ夫婦と云ふものは、ソナ水臭いものぢやないぞ、三途の川と云ふ

からは三度までは、渡るのは當り前だ。飯でも一日に三度は食はねばその日が暮

れぬのだ、娑婆の幽霊とはそれや何をぬかしよるのだい」

婆「お前は娑婆の幽霊だよ、幽霊會社に首を突き出したたり、幽霊株を振り廻したり、これやちつと有利得の株だと云へば、欲の皮を突つ張つて、身魂を汚し、女

房子ばうこども供どもに苦勞くらうをさせ、世間せけんの奴やつに迷惑めいわくをかけ、どうして娑婆しゃばに立たつて行ゆけやうかなぞと、腰こしから足あしの無ない奴やつの樣やうに、藻掻もがきよつて宙ちゆうぶらりの影かげの薄うすい代物しろものだ。娑婆しゃの幽靈いうれいと云いふたのが何なにが不思議ふしぎだい。幽冥界いいうめいかいには貴様きさまのやうな亡者まうじゃは一人ひとりも居をらないぞ、學亡者がくまうじゃの親方おやかた奴めが〇

彌や「コリヤ婆ア、それや何なにぬかしよるのだ、女房にようぼうが老爺おやぢを「ぼろ」糞くそに言いふと云いふ事ことがあるものか、貞操ていさうと云いふ事ことを知しつて居ゐるか、不貞腐ふてくされ婆奴ばばめが〇

婆ばば「不貞腐ふてくされとは何なんだ、女をんなばかりが不貞腐ふてくされぢやない、男をとこの奴やつにも澤山たくさん不貞腐ふてくされがあるぢやないか。貴様きさまは何なんだ、娑婆しゃばに居をつて彼方あちらへ小便せうべんひつかけ、此方こちらへ糞くそをひつかけ、隣となりの嬢かかをチヨロマカシ、近所きんじよの娘むすめを誑たぶらかし、嬢かかアが古ふるくなつたと云いつては、博勞ばくらうが馬うまか牛うしを入れ替かへする樣やうに、人間にんげんを畜生ちくしやうか機械きかいの樣やうな扱あつかひをしよつて、不貞腐ふてくれの張本ちやうほん奴めが。この婆ばばは斯こう見みえても地獄ぢごく開設かいせつ以來いらい、この川端かはばたで規則きそくを守まもつて職務しよくむ忠實ちうじつに勤つとめて居ゐるのぢや、貴様きさまのやうに月給げつきふが高たかいの安やすいの、此處ここは辛度しんどいの樂らくだのと、猫ねこの目めのやうにクレクレと變かはりよつて落着おちつきのない我樂がらくた多人間にんげんとは、チート譯わけが違ちがふのだよ。又またしても又またしても、この婆ばばに厄介やくかいをかけよつて、モ

ウ好い加減に退却せい、貴様の來るのはモチツト早いワ。此處へ來るのは、娑婆の罪を亡ぼした奴の來る所だ。貴様は罪惡の借金を澤山積んで居るから、モツトモツト苦しい目をしてから出て來るのだ。罪惡の借金を娑婆へ残して、コンナ處へ逃げて來るとは、餘り狡いぢやないか、薄志弱行にも程があるワ、この三途の川はドンナ所だと思つて居るか、貴様の身魂を洗濯する所かい、天で言へば天の安河も同様な處ぢやぞ」

彌「エー八釜敷い、口の好い嬢だ、女賢しうて牛賣りそこなふと云ふ事がある、折角夫婦になつてやつたが、今日限り三くだり半をやるから覺悟せい、夫婦喧嘩は犬でも喰はぬと云ふが、この彌次彦サンはソナ執着心のある男ぢやないぞ」
婆「誰が彌次彦の女房になると云つたか、貴様が勝手に此前に踏み迷ふて來た時に、わしの名は彌次彦だから、お前の老爺彦だと言ひよつて、自分一人できめたのでないか、正式結婚でもなけりや、自由結婚でもない、貴様の方は何ほど縁談を申込んで、此方の方から眞平御免だ、肱鐵だ。この廣い幽冥世界に貴様の女房になる奴は、半人でも四半人でも在ると思ふか、餘り自惚するない、罪惡に満

ちた娑婆でさへも、愛想をつかさねた結果、コンナ結構な地獄に出て来よつて、女房ぢやの、へつたくれぢやのと、何を劫託云ふのぢや、此處に釘抜きがあるから、舌でも抜いてやらうかい」

彌「コラ古婆、それや何を吐しよるのだ、貴様は世間見ずだから、ソナ馬鹿な事を言ふのだ。廿四世紀の今日に、原始時代のやうな、古い頭を持つてゐるから判らぬのだ、今日の娑婆を何と考へて居る、天國淨土の完成時代だ。中空を翔ける飛行機飛行船はすでに廢物となり、天の羽衣と云ふ精巧無比の機械が發明され、汽車は宙を走つて一時間に五百哩といふ速度だ、蓮華の花は所狭きまで咲き亂れ、何ともかとも知れない黄金世界が現出して居るのだ。それに貴様は開闢の昔から涎掛を澤山首にかけて道端にチヨコナと、番卒の役を勤めて居る奴の様に、コンナ「ちつぽけ」な雪隠小屋に焦付きよつて、娑婆が何うだの斯うだのと云ふ資格があるか、廿四世紀の兄サンだぞ」

婆「さうかいやい、それほど娑婆が結構なら、なぜ娑婆に居つて苦業をせぬのかい、ナンボ開けたと言つても、日輪様が二つも三つも出てをる筈もなからう、何

時も何時も満月許りと云ふ譯にも行くまい、五十六億七千萬年の昔から變らぬものは誠許りだ。どうだ貴様は物質的の欲望とか、文明とか云ふ奴に眩惑されよつて、視力を失つたのだらう、資力がなくては娑婆に居つたとて、會社の一つも立ちませぬぞ、株券買ふと云つたつて、株の一枚も買へはしまい、貴様は二十四世紀だと云ふて威張つて居るが、十五萬年ほど昔の過去となつて居るのが分らないか、今は一萬八千世紀だぞ、古い奴だなア」

彌「オイ婆アサン、一寸待つて呉れ、俺は紀元前五十萬年の昔に、娑婆に現はれて大活動を續け、「つい」たつた今、小鹿峠を宣傳歌を謳つて通つた様に思ふが、何だ、それから十萬年も暮れたとは、一寸合點が行かぬワイ」

婆「光陰は矢の如しだと、十八世紀の豆人間が吐き居つたが、光陰の立つのはソナ遅いものぢやない、ヂヤイロコンパスが一分間に八千回轉を廻る様に、世の中は貴様の様な分らぬ奴には頓着なしに、ドシドシと進行して行くのだ。貴様も罪の決算期が来るまで、まア一度娑婆へ歸つて、苦勞をして来るが可からうぞ。一時でも早く歸つて民衆運動でもやつて、ポリスの御厄介にでもなつて來い、さ

うせないと貴様の罪は重いから、この三途の川を渡るが最後石佛を放り込んだ様にブルブルとも何とも言はずに寂滅爲樂だよ」

彌「オツト待った、一旦亡者になつたものが、また川へはまつて、寂滅爲樂と云

ふ事があつてたまるか、譯の分らぬ婆だなア」

婆「貴様は分らぬ譯だ、娑婆の奴は二重轉賣と吐かして、一遍賣りよつて二度賣

つたり仕様もない六〇六號の御厄介にならねばならぬ様な腐れ女に、涎を垂らし

ながら揚句の果てには二次會とか三次會とか吐かして騒ぐぢやないか。それさへ

あるに一夫一婦の天則を破り、第一夫人第二夫人だの、第一妾宅だの第二第三、

何々妾宅だのと洒落よつて、體主靈從のありつ丈けを盡して居る蟲けらの如うな

人間許りだらう。現界の事は直に幽界に寫るのだ、一遍死んだ位ぢや死太い身魂

が、仲々改心いたさぬから今一遍出直し、それでも改心せずば三遍四遍と何遍で

も焼き滅すのだ。貴様は娑婆で廿世紀頃に始まつた三五教の教を聞いてゐるだら

う、改心をいたさねば何遍でも、身魂を焼いて遣るぞよと云ふことがあるだらう、

今の娑婆の奴は一度死んだら、二度は死なないと、多寡をくくつて居やがるが、

一度あつた事は、二度も三度もあるものだぞ、何遍でも死なねばならないぞ」
彌「ヤア、文明の風がコンナ所まで吹いて来よつて、婆の奴この前に旅行した時
とは、よほど娑婆氣のある事を吐かしよる、かうして見ると時代の力は偉いもの
だ、幽界までも支配すると見えるワイ」
婆「それや何を幽界、貴様は小鹿峠を通る時に、一方の男の間拔面を見込んで、
肩を組み合せ、屁の如うな風に吹き散らされよつて、冥土の道連れに勝公を幽界
に誘拐して来よつた奴だ、愚圖々々ぬかさずと、もう一遍甦生りて一苦勞して来
い。まだまだ地獄に出て来る丈け資格が具備して居ないワ、孰れ一度や二度はこ
の川を渡る丈けの権利は、登記簿にチヤンと附けて、確に保留して置いてやるワ、
どうだ嬉しいか」
彌「エ、ツベコベと能う吐かす婆ぢやないか、碌な事は一寸も言ひよらぬワイ。
道理ぢや、老婆心で吐かすことだから、これもあまり誅究するのは可愛想だ。オ
イオイ勝公、貴様は何故沈黙を守つて居るのだ、チツト位砲門を開いて砲撃をや
つたらどうだい、敵は間近く押寄せたりだ、なにほど堅牢な船だと云つたつて艦

齡の過ぎた老朽艦のしかもたつた一隻だよ

勝「オイ彌次公、場所柄を辨へぬかい、何と云ふたつて此處へ來たらお婆サンの勢力範圍だ、從順に服従するより仕方がないじゃないか、魚心あれば水心だ、なあお婆アサン、なんぼ惡道なお役だと言つても矢張血もあり涙もあるだらう、この彌次公は御存じの通り生れつきの彌次的一片の男ですから、お氣にさえられず神直日、大直日に見直し聞直して、許してやつて下さいませ」

婆「何と云つてもこの男はこれだから………今度から、先の地獄にやりたいのだけれども、閻魔サマから、何の爲めに貴様は、川番をして居つたのぢや、コンナ「ヤンチャ」を通過さすと云ふ事があるものか、何で娑婆へ追返さないのかと、免職を喰ふか分らない。サ、一時も早く尻引つからげて足許の明るい内にいんだりいんだり」

彌「アハ、ハ、ハ、とうとう婆の奴、本音を吹きよつたな、ヤア面白い面白い、エーこの三途の川を「ばサン」ばサンと向ふに渡つて、青黒白赤と種々雑多の鬼共を、片つ端から鷲掴、香物桶の中にブチ込んで、上からグツと千引岩の「おもし」を

か吐ほきいて、そこら中ぢうを糞くそまぶれに汚よごすなり、サツカリンの這はい入いつた腐くさつた酒さけを、ガブガブ飲のみよつて肺はいざう臓ざうを痛いため、そこら中ぢうに血ちを吐はき散ちらすものだから、雨あめが降ふる度たびに皆みなこの三途せうづの川かはに流ながれ込こむのだ、それだからこの通とほり川かはが濁にごつてしもうのだ、この川かはの中なかには貴様きさまの糞くそも小便せうべんも交まじつて居ゐるワイ、一杯いっぱい喉のどが乾かわいたら飲のんだらどうだい□

彌や「何を吐ぬかしよるのだ、コンナ物ものが飲のめるかいやい、ソンナ事ことを聞きくとこの川かはを渡わたるのが嫌いやになつて來きた、婆ばばの云いふ通とほりイヤだけど、再ふたび娑婆しやばへ引返ひきかへさうかな□

婆ばば「お前まへ達は糞くそや小便せうべんや血ちや啖たんのこの川かはが汚きたないのか、お前まへの身からだ體たは何なにだ、糞くそよりも小便せうべんよりも、鼻はな啖たんよりも、もつと穢むさくる苦くるしいぞ、糞くその身からだ體たが糞水くそみづに浸つかつて糞水くそみづを

飲のむのが、それが、何なにが汚きたないのぢや、共飲ともみぢや遠慮えんりよはいらぬ、貴様きさまの物ものを、貴様きさまが飲のむのぢやないかい□

彌や「これは怪けしからぬ、共食ともくひ共飲ともみとは天地てんちの神かみ様さまに大違反だいゐはんの罪惡ざいあくだ、人ひとが人ひとを喰くひ、猫ねこが猫ねこを食くふと云いふ事ことがあつて耐たまらうかい□

婆ばば「吐ぬかすな吐ぬかすな、貴様きさまは親おやの脛すねを嚙かぢつて食くい足たらないで、山やまを飲のみ家いへを

飲み、まだ喰ひ足らずに藏を喰ひよつて、揚句の果には可愛い子まで鬼の様に賣つて喰ふて、それでもまだ足らいで友達を喰ひ、世間のおとなしい人間の汗や脂を搾つて舐ぶり、餓鬼のやうな奴ぢや、餘り大きい顔して頬げたを叩くものぢやないぞ」

彌「ヤアこの婆仲々ヒラけてゐよるワイ、一寸談せる奴だ」

勝「定つた事よ、毎日にち世界中のいはゆる文明亡者が、此處を通過するのだから、門前の雀經を讀むとか云ふてな、聞き覚え見覚えて居るのだ、貴様は小學校出、俺は赤門出のチャイチャー大先生だと吹きよつたが、このお婆アサンは赤門どころか、よつぽど黒門だ。早稲田大學出身の大博士だ、洋行婆アサンだぞ、うつかりして居ると赤門先生赤恥を搔いてアフンと致さねばならぬぞよ」

彌「コラ、カカ勝公、横槍を入れない、尋常學校の落第生奴が」

勝「今の學校を卒業したつて何になるのだ、碌でもない事ばかり教へられよつて、尋常の間が本當の教育だ、それ以上になると薩張り四足身魂の教育だ、餘り學者振るな、學者の霸の利いた時代は廿世紀の初頭だ、二十四世紀になつて居る

のに學がくのナンノと、學がくが聞きいてあきれるワ〇

彌や「それでも矢張やはり形式けいしきを踏ふまねば、ナンボにじふしせい二十四世紀じきだとしてあまり買手かひてがないぞ、赤門あかもん出でと云いへば「アカンモン」でも威張あばつて直すぐに買手かひてが付つくし、卒業そつげ早々さつさつ立りつ派ぱな會社くわいしやの豫約よやく濟ずみに成なれるのだ〇

勝ちから「まるで人間にんげんを貨物くわもつと間違まちがへてゐる世よの中なかだから仕方しかたがないワイ、時世ときよ時節じせつの力ちからには神かみもかなはぬと仰おつしや有あるのだから、俺おれも時勢じせいに逆行ぎやくかうする様やうな、馬鹿ばかでないからまア一寸ちよつと此處ここらで切上きりあげて置おかうかい。なア赤門あかもん先生せんせい」

彌や「何なんと云いつたつて赤門あかもん出では貨物くわもつだらうが、物品ぶつびんだらうが、價あたひが好よいから、仕様しやうがないワ、この婆ばアサンのやうに何程なんほど大學だいがくを卒業そつげしたつて、黒門くろもん（苦勞者くろうもん）出でて何なんぼ立派りつぱでも使つかひ手てがないのだ、それだから「カンカ」不遇ふぐうで何時いつも川端柳かはばたやなぎを見みてクヨクヨと、脱衣だつい婆ばの境遇きやうぐいに甘あまんぜねばならないのだよ。ア、私わしはどうして赤門あかもんに這入はいらなかつたらう、鈍どんな「アカンモン」でも赤門あかもん出でなれば「ドント」出しゅつ世せは出來でるが、私わしは又またどうして黒門くろもん（苦勞者くろうもん）になつただらうといくら悔くやんでも後あとの祭まつりだ、何時いつの世よにも蔓つると云いふものをたぐらねば出世しゅつせは出來ではしないぞ。あの

芋を見よ、蔓にぶら下つてなつて居るのぢや、それだから游泳術の上手な奴をみんな芋蔓と云ふのだよ」

勝「エ、譯の分らぬ事を云ふな、まるで薩摩の芋屁でも放つた様な臭い臭い理窟を伸べよつて鼻持ちがならぬワイ。ヤアお婆アサン、長らく御面倒いたしました、末長う宜しうお頼み申します、オツトドツコイ三途の川のお婆アサンにお頼みするやうでは、六な事ぢやない、末長うお頼み申しませぬワ、アハ、ハ、ハ、」

婆「ア、さうださうだ、私の厄介になるやうな奴は、どうで碌な奴ぢやないワ、それよりもお前の連の與太や六が心配をして目を爛らして探して居る。早く歸つてやりなさいよ」

彌「オーさうだつた、ウツカリ婆アサンとの外交談判に貴重な光陰を夢中になつて消費して居つたものだから、二人の奴、俺の記憶から消滅して仕舞つて居つた、消滅地獄に落ちたやうだ。今頃はさぞ心身を焦がして居るであらう程に、もうしもうし勝五郎サンエ、勝ちヤンえ、此處らあたりは山家故、オツトドツコイ川ベリ故、噤寒かつたで御座んしやうなア」

勝「オイしつかりせぬかい、此處は箱根山ぢやないぞ、俺を壁と間違へて貰つては迷惑千萬だ」

婆「ヤレこの障子開けまいぞ開けまいぞ、そも三浦が歸りしとは坂本の城に歸りしか、よも此處へのめめと迷ふて出て來る彌次彦ぢやあるまい、そりや人違ひ、若し又それが淀なれば、コーカス山、アーメニヤ分け目の大事の戦ひに参加もせずに戻つて來る不屈者この茅屋根の家は婆が城廓、その臆れた魂でこの藁戸一重破らるるならサ、破つて見よと」

彌「百筋千筋の理を分けて、引つかづいたる「あばらや」の内、チヤンチヤンぢや」

勝「ハハアそのお言葉を忘れねばこそ、故郷を出て今日まで一度の便りも致さねど、お命も危しと聞くより風に吹き飛ばされ、玉は碎け胸は痛み、眼眩んで三五の道を忘れし不調法、眞平御免下されかし、いで戰場へ驅向ひ、華々しき功名して、コーカス山におつつけ凱陣仕らむ」

彌「アハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

婆はば「オホ、／＼、もう御お【しばい】だよ」

(大正一一・三・二四 舊二・二六 谷村眞友録)

第九章 空中滑走〔五五九〕

さしも烈はげしき山嵐やまおろし 嵐あらしの後の静しづけさと

天地てんちは茲ここに治をさまれど 小こ鹿しか峠たうげの谷たに々だにを

與よ太た彦ひこ、六ろく公こうの兩りやう人にんは 小こ鹿しか峠たうげの谷たに々だにを

木この葉はを分わけて探さがせども 梢しづは暗くらく下した柴しばの

茂しげり茂しげりて道みちもなく 遂つひにその日ひも暮くれにけり

時ときしもあれや東とう天てんに 雲くも押おし分わけて昇のぼり來くる

月つきの光ひかりに照てらされて 四あ邊たり明あかるくなりければ

二人は聲を限りに

「オーイ、オーイ、彌次公ヤーイ、勝公ヤーイ」

と叫ぶ聲も遂に噎れ果てて、今は心も皺がれの、聲も無ければ音もなき、

二人の友が消息を 右往左往に踏み迷ひ

尋ね行くこそ哀れなれ。

與太公、六公の二人は老樹鬱蒼として晝なほ暗き谷間に辿り着いた。

與「オイ六公、是丈け尋ねても見當らないのだから、もう斷念するより仕方があ
るまいなア」

六「是ほど廣い山の中を、人間の一人や二人が一日二日探して見た處が駄目だ
ア。然し乍らみすみす友の災難を見捨てて歸る譯にも行かず、吾々は息の續く限
り、所在をつき留めて、せめては死骸なりと厚く葬つてやり度いものだ」
與「これ丈け尋ねて、生きて居つて呉れれば結構だが、不幸にして、彌次、勝の

兩人、敢なき最後の幕を降し、死骸となつて横はつて居るとすれば、本當にそれこそ世話の【しがひ】が無いワ」

六「與太サン、ソナ與太を云つてる處か、本眞劍になつて下さいな」

與「眞劍とも眞劍とも本眞劍だが、餘り疲れたので足がヨタヨタ、與太サンだよ」

六「あれ丈け呼んでも、ウンともスンとも答が無いのだから困つたものだ。餘り偉い風に吹き付けられて、彌次、勝の兩人は、鼓膜を破られて、吾々のこの友情の籠つた悲哀的聲調が耳に徹しないのだらうか」

與「何、あれ位の風に、耳の鼓膜が破れるものか、緯の絲が切れたのだよ。【綽切れたに間違ひない、困つた【事】だワイ。【こと】に草深い山中の【事】といひ、搜索するもの、【殊】の外、骨の折れる【事】だ。是ほど呼んでも叫んでも、【コト】ツとも云はぬのは、どうしたものだイ。この谷のあらむ限り悉く、【言】靈の發射をやつて見やうと思へど、どうした【事】か、聲は噎れ、貴重な【言】靈は忽ち停電と來たものだから、仕様【事】はない、道中で二人の友達を紛失致しましたと云つて、日の出別の神様にどう斷りが立つものか。ア、困つた【事】

だ、コンナ【事】と知つたなら随いて来るのぢや無かつたにと云つて、慰藉晴らし愚癡の繰【言】繰り返し、呼べど叫べど死んだ人は、開闢以來歸つたと云ふ

【事】はまだ一度も聞いた【事】がないワイ

六 与太公、ア、お前はよう【こと】ことと云ふ男だナア、生死不明の兩人を捉へて、お前は最早死んだ者と覺悟を決めて居るのか

与 耳も聞えず、物も言へない奴は死んだ者だ。ア、六日の菖蒲、十日の菊だ、悔んで返らぬ【事】乍ら、戀しい彌次サン勝サンは、何處にどうして御座るやら、お前は情ない情ない、都合四人の道連れが、半死半生の目に合ふて、どうして之が泣かずに居られうか。ア、私も一所に殺して下さんせ、死に度いわいなと許りにて、命惜まぬ武家育ち、シヤンシヤンシヤンか

六 工、与太公、ヨ夕を云ふにも程がある哩、もつと眞面目にならないか

与 眞面目になつても、ならいでも同じ事だよ、死んだ者は、どうしたつて歸つて来る例は無い、俺も餘り心淋しく悲しくなつて來たので、氣まぐれに、莫迦口を叩いて居るのだ。何處に友達の災難を見て喜ぶ者があらうかい。三五教の教に

は、取越苦勞と過越苦勞はいたすなよ、勇んで暮せ、刹那心が大切だ、刹那のその刹那こそ吾々の意志のまま、自由行動の勢力範圍だ。一分間前は最早過去の夢となつて、どうしても逆轉させる譯には行かず、一分間後の事は人間の自由になるものではない、何事も神様の自由意志の儘だ。斯う云つて居る間も、無情の風とやらの悪魔は吾々の身邊を絶えず附け狙ふて居るのだ。彌次、勝の二人の友達は實に無情至極の烈風に誘はれて之も生死の程は明かならず、吾々はこうして兩人に邂逅し返ひ、ヤア居つたか居つたか、結構々々、豆で御無事でお達者で、美はしき御尊顔を拜し吾々身にと取つて、恐悦至極に存じ奉ります。やア之は之は與太公か六公か、餘が所在を尋ね、よくも難路を踏み越え、探しに来て呉れた、大儀々々、餘は満足に思ふぞよ。褒美には、これを遣はすと云つて、鼻糞の萬金丹でも、エソリンの「アンカン」丹でも御下賜あるに定つて居ると豫算を立てて行つて見た處が、算用合ふて錢足らず、豫算外の支出超過で、さつぱり二人の友達は破産申請、身代限りの處分を受けて、可愛い妻子をふり捨て、十萬億土の冥途とやらいふ國へ移住でもして居つたら、その時こそ、折角張り詰めし心の綱も、

頼みの糸も切れ果てて、泣いても悔んでも返らぬ悲惨な幕に打付かるかも知れやしない。その時なほほど失望落膽したつて駄目だよ。ア、コンナことを思ふよりも、日頃の信仰の力によつて強壓的に刹那心を發揮し、われと吾心の駒に慰藉を與へて居るのだよ。陽氣浮氣で無駄口が云へるかい。啼く蝉よりも啼かぬ螢が身を焦す。嗚呼それにしても、あの元氣な彌次彦の顔がもう一度拜みたい。勝公も勝公ぢや、折角、窟の中から助けられ、僅か半日經ぬ内に、無情の風に誘はれて、木の葉の如く吹き散らされ、煙となつて消ゆるとは、何たる因果な生れ附だらう。想へば想へば矢張悲しいワイ。刹那心の奴、どうやら屁古垂れさうになつて來たワイ。アーンアーンアーンアーン、ウーンウンウンウン

六 日天様はニコニコと御機嫌よく、山の端をお昇りなさつて吾々の頭を照らして下さるが、心の中は雲に包まれ、涙の雨は夕立と降りしきり、何共云へぬ淋しい事だ。人間といふ者は、あかぬものだな。昨日まで、鬼でも挫ぐ様な元氣で、機嫌良う「はしやい」で居つた二人の友達は、今は生死も分らず九分九厘までは彼の世へ行つたものと諦めねばならぬ破目になつて來た、俺も昨日まで、ウラル

教けうの宣せん傳でん使しであつたが、漸やっやく三五教あななひけうに歸き順じゆんしたと思おもへば、彌や次じ彦こ、勝かつ公こうに別わかれて了しまふし、何なんだか知しらぬが昨きのふ日ふから交つきあ際あふた人ひととは何どうしても思おもはれない、十じふ年ねんも二に十じふ年ねんも昔むかしから交つきあ際あふた様やうな氣きがする。知しり合あひになつてから、三みつ日かも經たたぬ俺おれでさへも之これだ丈だけ悲かなしいのだもの、與よ太た公こうは、長ながい間あひだの馴なじ染み、お前まへの心こころも察さつするよ
與よ「ア、仕しか方たがない。此こ處こで屁へ古こ垂たれずに、もう一いつ遍べん、大だい搜さう索さくをやつて見みやうか、因いん縁ねんがあれば、神かみ様さまが兩りやう人にんに逢あはして下くださるだらう、たとへ死しが骸がいなり共とも、もう一ひと目め逢あふて、二ふたり人にんの先せん途とを見み届とどけて置おかねばならない。エ、怪け體たいの悪わるい鳥からすの鳴なき聲こゑだ、益ます々ます氣きに懸かるワイ」
六ろく「オーほんにほんに向むかふの谷たに間まの大たい木ぼくの枝えだに澤たく山さんの鳥からすが止とまつて鳴ないてゐるな
ア。ハテ、こいつは怪あやしいぞ、何なんだか人にん間げんの着き物ものらしい物ものが、梢こつゑに見みえるぢやないか、見みてみよ」

與よ太た公こうは兩りやう手ての親おや指ゆびと人ひと差さ指ゆびにて輪わを拵こしらへ乍ながら眼め鏡がねの如ごとくに、左さ右いうの目めにピタリと當あてがひ、鳥からすの群むらがり居をる樹じゆ木もくの枝えだに目めを注そそいだ。
與よ「ヤアあれは的てつ切きり、彌や次じ公こう、勝かつ公こうの着き物ものだぞ。天てん狗ぐの奴やつ、股またから引ひ裂ききよつて、

着物を木に掛けて置きよつたな、エ、忌々しい、しかしながら着物でも構はぬ、
友達の形見だと思へば宜い、一つ彼の木の根元へ行つて調べて見やう、あの下邊
りに、死骸となつて横はつて居まいものでもないワ、彼れが第一、生きて居るの
だつたら、鳥の聲が聞えるだらうから、俺達の言靈も聞える道理だ。一つ力限り
叫んで見やうか」

六「叫ばうと云つたつて聲の原料が根絶したのだから仕方がない。向ふが鳥より
もこちらが聲を「からす」だ、二人で此様な處で、「とり」留めもない、「とり」
どりの噂をして居るよりも、「とり」敢ず、手取早く、彼の木の元に「とり」付
いて調べて見やうかい。萬一あの木の元に、死骸が一人でも二人でもあつたなら
ば、俺は彼の女房の代り役者となつて、これこれ彌次サン勝サンへ、逢ひたかつ
た、見たかつた、と顔や手足に取付いて、前後不覺に嘆きつつ、取亂したるその
哀れさ、チャンチャンチャン」

與「俺の眞似許りするな。ソナナ處かい、さア驅足だ」
樹木茂れる中を、茨に引掛り、蜘蛛の巣にまとはれ乍ら、漸くにして谷川の縁

に着いた。

與「ヤア、折悪しく、川向ふの松の大木だ、この急潭をどうして渡らうかな、ア、昨日や今日の飛鳥川、變る浮世といひ乍ら、有爲轉變も、ここまで往つたら、徹底して居る哩、この川の淵瀨がどうして渡られやうぞ。オイ六公、何とか好い考へは出ないかいのう」

六「俺の考へは只刹那心あるのみだ。この谷川へ飛び込んで、土左衛門になつたら、その時はもう仕方が無い。彌次公、勝公の後を追ふて一所に仲宜く、死出三途同行四人だ」

と云ふより早く、六公は着物を着た儘、ザンブと許り谷川へ飛び込んだ。

與「アツ六公め、氣の早い奴だ、エ、俺も破れかぶれだ」

と又もや、ザンブと身を躍らして、青淵目蒐けて飛び込んだ。折よく流れ渡りに向岸に無事に這ひ上る事を得た。

六「ア、お蔭で川渡りは成功した。與太公もやつたのか、偉いなア」
與「偉いの偉くないのつて、鼻から口から、水を充満飲んだものだから、息が止

まりさうにあつたよ、然ながら、斯うぬれねずみでは、着物が足に巻き付いて歩
く事も出来はしない、一つ大壓搾をやつて、荒水を取つて着替へて行かうか。ヤ
ア六公の奴、早何處かへ行きよつたナ」

六公は一丁許り向ふの樹の茂みから、

六「オーイ、與太公、此處だ此處だ、オーイ、彌次公、勝公、俺は此處だヨウ」

與「何だ幽霊の名まで呼んでゐる。冥土へ行つた彌次、勝と交ぜて俺の名を呼
ばれて堪るものかい。顯幽混交だ、縁起の悪い。併しながら、俺は三途の川へ飛
び込んで、最早や娑婆の人ではないのかな。何は兔もあれ、六公は頻りに呼び居
るから、ともかく行つて見やう」

と獨り言ちつつ聲を目當てに上つて来る。

與「ヤア六公、どうだ、目的の主は御健全かな」

六「どうやら、姿だけは残つてゐるらしいぞ。何ぼ呼んでも、返事はせないから、
生死の程は確かにそれとは計り兼ねる。上つて見やうと思つた處で、コンナ大木
で、どうする事も、斯うする事も出来やしない、末期の水もよう汲んで貰はずに

死んだかと思へば今更の様に思はれて、俺はもう悲しいわいやい、アーンアーン
アーンアーン」

與「何メソメソ吠面かわくのだい、末期の水はなく共、松ヶ枝で死んだのだもの
松の露位は飲んで死んだらう、死んで了つてから何を云つたつて仕方がない。こ
れからは、二人で彌次、勝の弔ひ合戦をやるのだ、二人寄つて四人前の働きをす
れば、二人の亡者も、冥するであらう。もう斯うなれば、追善の爲めに、各自が
二人前の働きをするより、二人の靈を慰めてやる方法は無いワ」

松の上より幽かな聲で、

彌「オィ與太公か、六公か、與太六」

與「ヤア、お前は彌次彦か、勝公か、死んだらもう仕方がない、後は俺が引受け
て女房までも都合宜う世話してやるワ。迷ふな迷ふな。娑婆の執着心をサラリと
去つて極樂參りをしてくれ」

彌「（小聲で）オィ勝公、お蔭でこの松の大木に助けられて氣が付いたと思へば、
與太、六の奴、俺たちを亡者と間違へよつて、アナン事を云つて居よる。一つ此

處まで、輕業の藝當をやつたのだから、このまま下りるのも何だか、變哲がない、
一つ亡者の眞似でもして、一芝居やつて見やうかな
勝「お前、よつぽど腹の悪い奴だナ、可愛想に二人の友達が、泣聲を出して探し
に來て居るのに罪な事をするものぢやないワ」
彌「それでも勝公、既に既に、俺たちを亡者扱ひにして居るのだもの、このまま
濟しぢや、折角の芝居のハネ口が悪いぢやないか。ハネ太鼓が鳴るまで一寸演劇
氣分になつたらどうだ、オイ勝公、お前芝居が下手なら口上言ひにならぬか、拍
子木の代りに、兩手を叩いて、お客様に口上を申上げるのだ」
勝「さうだ、一寸口上を云つて見様かな。東西々々、今晚御覽に入れます狂言
藝題の儀は、小鹿峠大風の段より三途の川、死出の山、脱衣婆に彌次彦が談判を
試みる一條より後に残つた、與太、六といふ二人の腰抜け野郎が、泣面かはいて
その後を尋ね、三途の川の向岸で松の大木の根元において嘆き狂ふ愁歎場を、大
切と致しまして御高覽に供します。何分遽芝居の事にございますれば、神直日
大直日に見直し聞き直し、あれは彼れ位の者、之は之れ位の者とお許し下さいま

して、お爺サンもお媪サンもお子供衆も、近所隣誘ひ合せ賑々しく、御來場御觀覽下さらむ事を、偏に希ひ上げ奉ります、チャンチャン」

與「オイ六公、世の中が變れば變るものだな、芝居といふものは娑婆丈けのことかと思へば、幽界に來ても、やつぱり芝居があると見える哩、なにほど幽界は淋しいと云つても、芝居さへ見せて呉れば、ちつとは氣保養も出來るといふものだ、變性男子の閻魔サンが御代りになつてからと云ふものは、地獄の中も、餘程寛大になつたといふ事を、神憑の口を通じて聞いて居たが、如何にも變つたものだ、民權發達といふものは、地獄の底まで影響を及ぼし、今度の閻魔サンは、民主主義になられたと見えるな」

六「與太公、何を云ふてゐるのだい、ここは三途の川じゃないぞ、小鹿峠の谷間ぢやないかい、勝の奴、好い氣になつて、アンナ亡者芝居の眞似をさらしよるのだよ。莫迦莫迦しい哩」

與「否々そう早合點をするものぢやない、俺も一旦、谷底へ飛び込んだ時に澤山な水を飲んで、氣が遠くなり、大きな川を泳いだ様な氣がする、婆の姿は見えない

かつたが何でも深い大きな川だつたよ

六 惚けない、今この川を渡つたとこぢやないか、俺は決して亡者ではないぞ。

貴様も俺と一所に渡つたのだから、矢張り娑婆の人間だ。オイ、松葉天狗の彌次

公、勝公、早く下りて来ないかい、ソナ處で目を剥き、鼻を剥き、芝居をやつ

て居ると、眞逆様に顛倒して、それこそ今度は、眞正の亡者にならねばならぬぞ。

好い加減に下りて来ないかい。貴様が仕様もない事を吐すものだから、與太公の

奴、亡者氣分になりよつて困つて了ふワ

彌 (作り聲して) ウラメシャー、無情の風に誘はれて、小鹿峠の十八坂の上ま

で来た處が、無惨やナー、花は半開にして散り、月は半圓にして雲に包まる、有

爲轉變の世の中とは謂ひ乍ら、思ひもよらぬ冥土の旅、ま一度女房の顔が見たい

哩の。それに就いても恨めしいのは、なぜ與太公や六公を冥土の旅に連れて来

なかつただらう。三途川の鬼婆奴の吐す事には、貴様は友達甲斐のない奴ぢや、

なぜ與太公、六公を見捨てて来たか、水臭い奴ぢや、も一度歸つて誘ふて来いと

吐しよつた。ア、仕方がない………後に残つた與太公や六公の奴、彌次彦勝彦は

情ない奴ぢや、何故に俺達を殘して冥途の旅をしたのか、この恨みは死んでも
忘れは致さぬと、小鹿山の森林で娑婆の亡者となつて迷ふてゐるぞよ。早く貴様
は娑婆の入口まで引返し、松の木の枝から、招いて來いと云ひ居つた。アンナ頑
固な腰抜け野郎と、冥土の旅をしたなれば、嘸や嘸厄介のかかる事であらう程に、
エ、三途の川の鬼婆も聞えぬわいの、ホーイ　ホーイ
六、コラ彌次公、何を誣戯けた眞似をしよるのだい、死に損ひ奴が、早く下りぬ
かい
與、オーイ彌次公、三途の川の婆が何と云ふたのか知らないけれど、與太公は娑
婆で大病に罹つて足が立たぬから暫らく猶豫をしてやつて下さいと頼んで呉れえ
やい。俺はその代りに、貴様の冥福を祈つて、朝晩に鄭重な弔ひをしてやる程に、
何卒お婆アサンにその處は宜しう取做しを願ふぞや、ホーイ　ホーイ
六、ヤア此奴また怪しうなつて來たぞ、與太公は丸で六道の辻見た様なものだ、
エ、糞ツ、面白くもない、娑婆の幽霊の奴が。オイ彌次公、勝公よい加減に下り
ぬかい

勝公も滑走だ滑走だ」

勝「東西々々、只今は彌次彦が幽霊となつて中空を浮遊し松の根元に着陸いたし

ました。滑走の藝當、お目に止まりましたなれば、皆サンお手を拍つて御喝采を

願ひまゝす」

六「コラ勝公、彌次彦が腰を抜いて冥土旅行をしかけて居るのに何をグズグズや

つて居るのだ。好い加減に下りて來ぬかい」

勝「東西々々、これから第三段目も御覽に入れまゝす。飛行機に乗つて勝彦の無

事着陸、お目に止まりますれば今晚は之れにて、千秋樂と致しまする」

と云ふより早く、コンモリとした松の小枝より傍の竹の心を目蒐けて飛び付いた。

竹は満月の如く弓となつてフウワリと大地に勝公を下ろした。

勝「お蔭で命だけは、どうやら、此方の者になつたらしいと思ひます。藪竹サン、

左様なら」

と掴んだ竹を離せば、竹は唸りを立てて立ち直る。

彌「オイ與太公、貴様こそ本眞物か」

第一〇章 牡丹餅〔五六〇〕

彌次彦、勝彦、與太彦、六公の四人は谷間を這ひ上り、漸くにして小鹿山峠の坂道に着いた。

彌「ヤア此處が芝居の序幕を演じたところだ。随分風の神の奴、豪い目に遇はしよつたものだ」

六「貴方達は羽織を三枚着て、而も上に着るものを下に穿いたりするものだから、アンナ目に遇ふたのですよ」

彌「夫でも上下揃ふて世を治めるぞよと神様が仰有るのだ。而も六人の宣傳使から頂戴した結構なお召物を着て居るのに、神様が罰を當てると云ふ筈もあるまい」

六「それでも羽織を袴に穿くと云ふ事は、些と考へものですか」

彌「さうだと云つて、裸體で道中もなるまいし、仕方がない哩」

六「此峠は、時々レコード破りの風が吹きますから、随分氣をつけて往かずばなりません。この坂を下ると次は十九番目の大峠です、その峠までに二三里も展

開かいした曠野くわうやがあつて、其處そこには澤山たくさんの人家じんかも立たち竝ならんで居ゐます。そこまで往いつて一服いっぷくしませうか」

彌や「さうしませうよ、併しかしながらコンナ風ふうをして、澤山たくさんな人ひとの居ゐる處ところを通とほるのも變へんなものだ。何なんとか工夫くふうはあるまいか」

六ろく「ヤア私わたくしはお伴とも、貴方あなたは宣傳使せんてんし様さまだ、何どうでせう、私わたくしの着物きものと取とつ換かへつこをして村落そんらくを通とほる事ことにしましたら」

彌や「さう願ねがへれば結構けつこうだ。ア、六公ろくこう、早裸體はやらたいとなつたのかい、何なんと氣きの早はやい男をとこだなア」

六ろく「鶴つるの一聲言ひとこゑ行げん一度いちどに一致いっちと云いふやり方かたです、愚圖ぐづ々ぐづして居ゐて水みづを注さされるつまと約つまりませぬからなア、アハ、ハ、ハ、」

茲ここに彌次彦やじひこは六公ろくこうの衣服いふくと着換かへ、六公ろくこうは羽織はおり三枚さんまいを袴はかま竝ならびに前後まへうしろに着きながら、蔓つるの帶おびを堅かたく瓢箪へうたんのやうに腰こしに縛くくり、

六ろく「サアこれで千兩役者せんりやうやくしやの早替はやがはりだ、しかし役者やくしやだと云いふても、もう芝居しばゐはやめですよ、サア往ゆきませうかい」

と、ドンドンと下り坂を走つて行く。漸くにして麓の村落に着いた。

勝「大分に腹の蟲が空虚を訴へて來だした、何處ぞ此邊に飲食店でもあれば這入

つて腹を拵へたいものだなア」

彌、與「サアさうお誂へ向に出來て居れば、結構だが」

六「イヤ、御心配御無用、些し先に往きますと、松屋と云つて、一寸した飲食店

があります、其處には別嬪も居りませぬ」

與「夫は豪氣だ、ともかく其處迄もう一息だ。何だか俄に元氣が付いた」

と云ひつつ四人は速度を速めて驅出した。

彌「ヤア此處が松屋だ。いよいよ目的地點に無事御到着か、アハ、ハ、ハ、久し振

で辨才天の拜觀も出來ると云ふものだ」

彌「辨才天はどうでも好い、早く御飯に有りつきたい哩、もう斯うなれば色氣よ

り食氣だ」

松屋の門口に一人の下女立ち現はれ、

下女「モシモシ、お客サン、コーカス詣りですか、随分強い坂でお草臥れでせう、

何卒一つお茶でも飲んで一服してお出なされませ」

與「云ふにや及ぶ、吾々一行四人は松屋をさして休息の豫定でお越し遊ばしたのだ。一服してやらう、ナンゾ、小美味ものは無いか」

下女お竹「ハイハイ、何でも御座います。お望み次第お金次第です」

與「チエツ、直に之だから嫌になつて仕舞ふ、お錢お錢と何だ。矢張ウラル教の空気が漂ふてゐるな、仕方が無い哩、腹が減つては戦が出来ないから」

と云つて與太彦は先にたち飛び込む。

下女「マア、マア、お二人のお方、ホ、ホ、ホ、妙な風をなさいました」

與「妙な風でも何でもお前に惚れて呉れと云いやしないし、着物を貸して呉れとも云やしないから、いらぬ口を叩くな、早く小美味ものを出さぬかい」

奥の方から中年増の婆アサンが、ヒヨコヒヨコとやつて来て、

婆「ア、これはこれはお客様、よう一服して下さいました。何なと御注文次第、仰有つて下さいませ」

六「牡丹餅は無いかなア」

婆「へエへエ、御座います、お彼岸の牡丹餅を今拵へた處。又ク又クのホコホコの、手から漏るやうなのが、澤山に握つてあります」

彌「初に握つた奴は眞黒けと違ふかね」

婆「滅相な、清めた上にも清めた、清潔な牡丹餅です。牡丹餅の嫌ひなお方は此

處に握り飯がございます。貴方達は遠方の方と見えますが、随分お足の達者なお

方らしい、恰で牡丹餅のやうな健脚家だ。毎日コーカス詣りの道者が通られます

が、牡丹餅のお客は少い、握飯が随分多いやうですワ。オホ、

彌「婆アサン、牡丹餅のお客だとか、握飯のお客だとか、それや一體何の事だい。

俺の顔が牡丹餅のやうな不恰好だと云ふて嘲弄するのだな」

婆「オホ、、、夫は譬で御座います。握飯は丸い、牡丹餅は一寸角が立つて居

る。或時に握飯と牡丹餅とがマラソン競争をやりました。さうしたところが、丸

い方の握飯が勝たねばならぬ筈なのに、途中で平太張つて仕舞つて、牡丹餅はと

うとう決勝點まで安着されて名譽の優勝旗が手に入りました。そこで饅頭がやつ

て来て、牡丹餅よ、お前は一寸見てもぼたぼたして足が遅いと思つたに、勝利を

得たのは何うした譯かと尋ねよりたら、牡丹餅が云ふには、私は【あづき】つけとるから道中は安心だと、オホ、々、々、

彌「ナアーンダイ、この腹の空いとるのに落とし話をしよつて、氣樂な婆アサンだなア」

婆「コンナ話しでもして、お客サンを誑かし暇を入れて腹を空かし、その間に牡丹餅を炊いて進ぜると云ふ此方の考へ、もう一寸待つて下さい、今飯が嘔いて居ります、直に小豆の衣を着せて、どつさり食つて貰ひます」

與「ヤアヤア牡丹餅と聞けば、俄に咽喉の蟲がグウグウと催促をし出した。何でもよいから手早くやつて下さい」

彌「オイ與太公、此處には素敵な別嬪の娘があるぢやないか、貴様は何うだ。思召は無いか」

與「どうだ、女子を國有にして居る國さへもあるのだから、吾々四人が何とかして四國協調の結果彼奴を國有にしたらどうだ。毎晩交代にあの尤物をエンプレスして樂まうぢやないか」

勝「ソナ エンプレスと云ふやうな事をやると此處の人氣娘を、此村の誇りとして居るのだから、貴様は村民の怨府となるかも知れないぞ。とは云ふものから見ても横から見ても、三十三相具備したあななし姫だ。男と生れた甲斐には切めて一遍位はエンプレスをやつて見たいやうな氣もせぬでは無いが、何を云つても嚴めしい三五教の宣傳使だから、どうする事も出来やしない、寶の山に入つて裸體で歸るやうな心持がする哩」

婆「サアサア皆サン、牡丹餅が出来た、お上りなさいませ」

與「これはこれは有難う御座います、マア悠くりと頂戴致しませう」

婆「サア私がついで上げませう」

與「ヘイ、ヘイ、ヘイ、ア、それは結構ですが、同じ事ならあのそれ、お梅サ
ンによそつて貰へば一入、美味いやうな氣が致します哩」

婆「ホ、ホ、ホ、貴方もよほど苦勞人と見える哩、澁皮のやうなお手で、牡丹餅を盛つて上げて、お氣に召しますまい、私が盛るのがお氣に入らねば、もう牡丹餅は食べて貰ふ事は眞平御免蒙ります」

彌や「マア、マア、マア待つて下さい、これは冗談じやうたんですよ、さう眞まに受うけて貰もらつては困こまります」

婆ばば「冗談じやうたんから暇ひまが出る。瓢箪へうたんから駒こまが出る。青瓢箪あをべうたんの黒焦くろこげのやうな顔かほをして年寄としよりが氣きに入いらないの、スツポンのと、それやお前何まへなにを云いふのだ。さう老人としよりを見下みさげたものぢやない、人間にんげんは年としをとつて苔こけがついて來くる程値ほどなうちが出來できるのだよ」

勝かつ「左様さやうさやう、御尤ごもつともだ」

婆ばば「ソソンナら勝手かつてに取とつて食くひなさい」

と婆ばばアサンはむつとした顔かほをして奥おくに入る。四人よにんは熊手くまでのやうな手てを出だして、餓が

虎このやうに、グイグイと呑のみ込み、

四人よにん「ヨヨー美味うまい、コンナ美味おいしい牡丹餅ぼたんもちは、臍へその緒切をきつてから食くつた事ことがないワ

イ。コンナ奴やつなら、一遍いっぺんに腹はらが弾はぢけても構かまはぬ、百ひやくでも二百にひやくでも咽喉のどの蟲むしが御苦ごくら

勞うごくらう御苦ごくらうと云いふて迂すべり込こんで仕舞しまふやうだ」

と堆高つづたか積つんであつた澤山たくさんの牡丹餅ぼたんもちを一息ひといきに平たひらげてしまつた。

下女げぢよのお竹たけ「お客サンきやく、よういけましたなア、お米こめの相場さうばが狂くるひますぜ、お代りかは

はどうです」

與「餅屋の喧嘩で、【餅論】だ。早く出したり出したり」

お竹「ママアお客サン、貴方達は門の向ふに居る、角の生えたお方のやうな方ですなア、モウモウモウ呆れましたよ」

彌「何うでもよい、早く出して貰はうかい、腹の蟲は得心したやうだが、未だ舌と眼とが羨望の念に驅られて居るやうだ。同じ一つの體だ、腹ばかり可愛がつて、眼と舌とを埒外に放り出すと云ふのも、吾々宣傳使として情を辨へぬと云ふもの

だ。アハ、ハ、ハ」

お竹「サアサア、お代りが出来ました。悠くりお食りなさいませ」

四人は又もや一齊に二膳片箸の同盟軍を作つて、複縦陣の備へを取り、爆弾のやうな牡丹餅を又もやパクつき始めた。

與「オイお竹サン、馬鹿にするない、見本は美味しい奴を出しよつて、これは大變味が悪いぢやないか、一番先に出したやうな奴を出して呉れないかい、上皮の方には甘い奴を竝べよつて、下になる程不味い牡丹餅を竝べといたつて、俺の舌が

よく御存じだぞ」

お竹「それや何を云ふのぢや、美味しいも不味もあつたものか、皆同じ味に造つてあるのですよ、お前サン腹の空つた時に食つたから美味かつたのだ。腹が膨れてから何を食つたからつて美味しい事はありやしない。ソナ小言を云ふのなら、食ふだけの権利がない、食物の味に對しては氣の毒ながら神經麻痺だ。サアサア好い加減食つたらお錢をお拂ひなさい」

六（懷中より）「それ、お剩金は要らないぞ、後はお前の小遣ひだ」

お竹「大きに有難う御座いました」

と顔を見上ぐる途端に、

「ヤアお前は六サンだつたかい」

と轉げるやうにして裏口をさして姿を隠して仕舞つた。

與「オイ六、貴様は罪の深い奴だ。何か之には祕密が籠つて居るだらう、それだから松屋に寄らう寄らうと云ひよつたのだなア、酢でも蒟蒻でも行かぬ奴だ。お目出度い處を見せつけよつて、餘り馬鹿にするない」

「ヤア、何でもよい、退却々々」

と羽織の袴をバサバサと穿ちながら、一散に駆け出した。三人は止むを得ず、

「オイ六公待った」

六公は後振り向き乍ら、

「マツたも松屋もあつたものかい、マア、一所に出てこないかい」

と息せき切つて走り出す。三人は、

「あゝ合點の行かぬ突發事件だ。仕方がない、ソナラそろそろ行かうかい」

と又もや牡丹餅腹を揺りながら、六公の後を追跡する。

（大正一一・三・二四 舊二・二六 加藤明子録）

（昭和一〇・三・一五 於高雄港口官舎 王仁校正）

第一章 河童の屁（五六）

勝公かつこうの宣傳使せんでんしを始め彌次彦やじひこ、與太彦よたひこは六公ろくこうの後あとを追跡つゐせきして漸やうやく二十峠はたちたうげの麓ふもとに着ついた。

與よ「サア又また之これからが危険きけん區域くゐきだ、敵てきの防禦網ぼうぎよまうを突破とつぱして善戰善鬪ぜんせんぜんとう、秘術ひじゆつを盡つくし神軍ぐんの威力ありよくを示しめすべき時ときは迫せまつた」

勝かつ「ア、さうだ、各自めいめいに腹帶はらおびをしつかりと締しめて、四邊あたりに氣きをつけ登坂とはんする事ことと

しよう。それにしても六公ろくこうは何處どこへ磨滅まめつして仕舞しまつたのだらうか、三人さんにんでは如何どう

も話し相手あひてのバランスがとれない、仲々なかなかの慌あはて者ものだからなア」

彌や「何でも彼奴あいつ、お竹たけの顔かほを見るより猫ねこのつるんだ後の様やうに兩方りやうほうへパツと逃にげ散ち

つた。その時ときの可笑おかしさ、之これは何かなにか込み入いつたローマンスが伏在ふくざいして居ゐるのかも

知しれないぞ」

與よ「何なに、ローマンスなんて、アンナ男をとこにあつて堪たまるものかい」

彌や「さう見絞みくびつたものじや無い、縁えんは異いなもの乙おつなものだ。今いまに六公ろくこうがお竹たけを連つ

れて「ヤア六サンか、お前は如何どうして居をつたのだ、その袴はかまは何事なにことぞ、此このお召物めしものは

と取り付ついて涙片手なみだかたてに搔かき口説くどく、そこで六公ろくこうの奴やつ「ヤアお竹たけ、如何どう成なり行ゆくも

與「ヤア割とは氣の小さい奴だナ、コンナ事に腹の立つ様な事で宣傳使のお伴が出来るかい、娑婆幽霊奴い、ツベコベ嘔ると又、松の梢から踏み外して腰を抜かさなならないぞ。此處は小鹿峠だが後になれば彌次彦の「こしぬかし」峠と名がつくだらう。オイ腰抜け先生、御勝手にお越しなさい、もう貴様とは只今限り國交斷絶だ、旅券を交付して與るから蒸汽に乗つて早く歸國致せ」

彌「アハ、ハ、ハ、與太の奴、眞面目になりよつて其面ア何だ、まるで夜鷹の様な團栗眼を剥きよつて嘴を鋭らして、あまり見つとも良くないぞ。之から與太を改名して夜鷹と言つたが宜からう、夜鷹と言ふ奴は「ござ」をひつかけて暗い辻に立てつて居よる奴だ」

與「ア、そうか（惣嫁）とけつかる哩」

彌「お前と俺との仲は何うやら形勢不穩になつて來かけた、サア勝公の宣傳使の御目の前で平和克復の條約を結ばうかい」

と言ひ乍ら、尻を捲つて、

彌「サアサ屁いはこく吹くだ」

らう。有難く頂戴せい」

彌「へいへい有難う、確に頂戴仕りませう、マア斯うなれば二人の仲も「へ」な

戸の風に「へ」解き放ち艦解き放ちて大海の原に、大津「べ」に居る大船を押し

放つ事の如く「へ」い和の風はソヨソヨと春の海面を撫でて天下泰「へ」い最後

屁和「こく」土成就だ。愈「へ」い和克復の曙光を認めた、「へこく」(四國)

「へち十へつか所」(八十八ヶ所)何んぼ(南無)放いても大師遍照金剛だ、ア

ハ、ハ、ハ、」

與「もしもし勝彦サン、貴方はよつぽど眞面目な人ですな、コンナ可笑しい事が

貴方は何ともありませんか」

勝「お前達は屁でもない様な事が可笑しいのか、水中に放屁した様な下らぬ喧嘩

をオツ始めて平和克復もあつたものか、人を屁煙に捲いて、吾等は聊か閉口頓首

の至りだ」

彌「この與太公は屁放り腰の屁古垂男だから、もちつと向ふへ行つたら屹度屁古

垂れますぜ、アハ、ハ、ハ、」

與「お前は膝栗毛の彌次郎兵衛と云ふ屁こき爺だ。あまり調子に乗ると社會の【弊】害になるから良い加減に筒口を【閉】門した方が宜からうぞ、アハ、、、」

勝「まるで黽や馬や屁こきぶんぶと道連れの様だワイ、オツホ、、、」

彌「ヨーヨー何時の閒にか話につられて頂上へやつて來ました。矢つ張り此處にも【平】坦な道が開平されてあるですな。遠く彼方を見渡せば目も届かぬ許りの之も大【平】原、矢つ張り天下太【平】の世の中だワイ、アハ、、、」

勝、與「ウツホ、、、」

彌「何だか、チツと腹が變になつて來ました、一寸そこ迄失禮いたします、こちらに屁太張つて待つてゐて下さいませ、【へい】御免なさいませよ」

とチヨコチヨコ走り、樹の繁みに姿を隠した。

與「ハツハ、、、何處かに芋を植ゑに行きよつたな、太い奴を、アハ、、、。アア胸が悪くなつた、折角喰つた牡丹餅もどうやら嘔吐り相になつて來た哩」

一方の森林の中よりウンウンと言ふ呻り聲、彌次彦の隠れた方にも亦もやウンウンといふ呻り聲が聞えて居る。

與「【ご】生でも六升でも構はぬ、吾等一同（一斗）の者に一石（一刻）も早く

事情逐一申し上げぬかい」

六「ヤアお竹の事思へば一石どころか萬斛の涙が零れる哩、それはそれは齒の浮く様なローマンスがあるのだ、アアア」

與「アアとは何だい」

六「アアは矢つ張りアアだ」

彌次彦はガサリガサリと笹原を踏み分けて現はれ來り、

彌「御一同様、お待たせ申しました。ヨウ六公、其處に居るのか、能うマア鼠に

も引かれずに無事で此處まで來て呉れた、偉い偉い、ヤレヤレ二十峠の頂上で愈

四魂が揃ふた、サア之からは原（腹）の下り坂ぢや、鶉の谷渡りぢや、ピーピー

だ、全隊進め、オ一、二、三、四」

四人は急坂を飛ぶが如くに自然的に足に任せて速度を加へ雪崩の如く下つて行

き、漸く麓に着いた。

彌「サア、上る身魂と下る身魂で世界は一旦騒がしくなるぞよ、後は結構な神世

まつた黄金山わうごんざんに現あらはれ給たまふ埴安彦はにやすひこ、埴安姫はにやすひめ、コーカス山ざんに時ときめき給たまふ須佐之男命すさのをのみことの御名代日ごみやうだいひの出別命でわけのみことの御家來ごけらいの彌次彦やじひことは俺おれの事ことだ、吾名わがなを聞きいて膽きもを潰つぶすなウフ、フ、フ、

勘かん「ワツハツハ、この場ばに及およんで切端せつぱつまり、コケ嚇おどしの豪傑笑がうけつわらひ、今いまに吼ほえ面づらかわかして見みせう、ヤア者共ものども、彼奴等きやつら四人よにんに一度いちどにかかれ」

勝かつ「ワツハ、洒落しやれな洒落しやれな、今いまに三五教あななひけうの宣傳使せんでんしが、目めに物見ものみせて呉くれむ」

と言いふより早はやく兩手りやうてを組み食指ひときしゆびの先さきより五色ごしきの靈光れいくわうを發射はつしやし、勘三郎かんざぶらう初めはじめ一同いちどうの捕手とりてに對むかつて速射砲そくしやほうてき的に靈彈れいだんをさし向むけたれば、勘三郎かんざぶらう始はじめめ一同いちどうは俄にはかに頭痛かしらいたみ、

胸裂むねさくる許ばかりウンウンと苦悶くもんを始はじめめ柄物えものを大地だいちに投なげ捨すて七轉八倒しちてんぱつたう、息いきも絶たえむ許ばかりの光景くわうけいとなりぬ。

勝かつ「アハ、脆もろいものだワイ、一ひとつ宣傳歌せんでんかを歌うたつて一同いちどうの奴等やつらを歸順きじゆんさせ、コーカス山ざんに伴ともなひ行ゆきて吾手柄わがてがらを表あらはし呉くれむ。ヤアヤア、彌次彦やじひこ、與太彦よたひこ、六ろく

公こう、宣傳歌せんでんかを吾われと共に聲高こゑたか々と歌うたふのだぞ」
勝彦外かつひこほかいちどうこゑ一同聲いちどうこゑを揃そろへて

☐ 神が表に現はれて

善と悪とを立別ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

只何事も人の世は

直日に見直せ聞き直せ

身の過ちは詔り直せ

身の過ちは詔り直せ

と歌ひ終つた。

勘三郎始め

一同は

この言靈の

神徳に救はれて、

さしも

厳しき

靈縛

は解かれ

涙聲を

絞り乍ら

茲に

一同

歸順の

意を表し

神恩を

感謝する

に至りたり。

(大正一一・三・二四 舊二・二六 北村隆光録)

第一二章 復縁談(五六二)

勝彦の宣傳使を始め、彌次彦、與太彦、六公の一行は、烏勘三郎の一軍を言向和し、意氣揚々として峠の幾つかを越えて、又もや一つの部落に着いた。

此處は二三十軒斗り彼方此方に家の散在せる小部落で小山村と云ふ。

彌「ヤーまた此處にも一小天地が形造られてあるワイ。どこにか都合の好い家を

探して休息をさして貰はうかい」

と先に立つてキヨロキヨロと適當の家を探してゐる。小さき草葺の家の門口に一

人の婆アが立つてゐる。

彌「モシモシお婆アサン、どうぞ一服さして下さるまいか」

婆「わしは盲目だから、どなただかお顔が分らない。お前サンは一體何處へ行く

旅人だい、伴の衆は有るのかい」

彌「ハイハイ、伴の者は一行四人、山坂をいくつも跋つて來たのだから、脚が棒

のやうになつて知覺精神は何處やらへ轉宅したと見え、チツトも吾々の命令に足

の奴服従せないやうになつて來ました。どうぞ此縁側を一寸貸して下さらぬか。

儂はこれからコーカス山へ參拜するものですから」

婆「アーさうかな。それは能う御信心が出來ます。私もコーカス山の神様を信心

して居る信者の一人だ。ウラル教なら平に御斷りだが、コーカス參りをする方な

ら、きつと三五教だらう。マア悠くりと休んでみて下さい」

彌「三五教も三五教、チャキチャキだ」

勝「モシモシお婆アサン、私は三五教の勝彦と云ふ宣傳使でございます」

與「私は與太彦と云ふ信者でございます。どうぞ宜しう御願ひ致します」

婆「今お前サン等四人と云はつしやつたが、お聲は三人ぢやないか。モウ一人の

方は何處へ行かれたのだい」

六は作り聲して、

六「わたくしはロークと申す吝な野郎でござんす程に、どうぞよろしう御見知り置

かれまするやうに」

婆「見知り置けと云つても私は盲目だ。お聲を聞知り置くより仕方がないワ。ア

ハ、ハ、ハ、ハ」

彌「比較的廣い家にお婆アサン、たつた一人かい」

婆「ナニ老爺ドンは中風に罹つて、裏の離棟で今年で三年振り、床に就いたきり

困つて居ります」

彌「お婆アサン、お子サンは無いかい」

婆「子は二人あるが、兄は此間から女房を伴れて私の眼が癒るやうにと、コーカス詣りをしたのだ。モウ二三日したら歸つて來ませう。それに一人の妹があるのだが彼奴は運が悪うて、一旦嫁いた亭主が俄にウラル教の捕手の役人になり、洒を喰ふ賭博を打つ、女には「づぼ」る、どうにも斯うにも仕方が無い男だ。そこで私の娘のお竹と云ふのを嫁にやつてあつたけれども、お竹は三五教の信者なり、何時も家内がゴテゴテして到頭夜中に逃出して歸つて來よつたのだ。何程勤めてもアンナ極道亭主の所へは假令死んでも歸らぬと云ふて頑張るものだから、仕方無しに十九番坂の麓の山田村の松屋といふ家へ奉公にやつたのだ。年が寄つてから彼奴の爲に偉い苦勞をしとるのだ。お前サンも三五教の宣傳使サンなら、一つ神様に祈つて下さらぬか」

彌「ハイハイ承知致しました。御祈念さして貰ひませう。さうしてその娘は年でも切つたのか、ホンの當座奉公か、何方だい」

婆「縁談があれば何處か嫁けねばならぬから、年は切つては居らぬのだ。お前サ

ンもさうして世界を歩きなさるのなら適當な所があつたら世話してやつて下さい。
親の口から褒めるぢやないが、お竹と云ふ奴は、夫は信心の強い正直な氣の優しい女だ。私もお竹の婿がきまる迄は爺サンも共に死んでも死なれぬと云ふて居るのだ。どうぞ良い縁の有るやうに神様に、とつくりと祈念して下さい」

與「お竹サンの今迄の婿サンと云ふのは、何と云ふ人だな」

婆「それはそれは意地の悪さうな顔をした根性の曲つた六と云ふ男だ。碌でも無い奴だと見える。どうした因縁か、アンナ心の良いお竹が、【げぢげぢ】のやうに嫌はれて居る碌でなしの六助に縁付くとは、神サンもチト胴欲ぢやと、毎日日爺と婆とが悔んで居るのだ。アア今頃はお竹はどうして居るか知らぬが、可愛想に、アーンアーン、アンアン」

彌次彦は六の顔を一寸見て、顔をしゃくり、

彌「オイ、ロークサン、どうだい。チットお前も御祈念して上げぬかい」

六「ハイ、ゴーキネンシテ、アゲマシヨカイ」

彌「アハ、ハ、ハ、妙な聲だ」

婆ばば「お竹たけの奴やつは亭主おやぢ【マン】が悪わるうて、其その六公ろくこうの前まへにも一度嫁いちどとついだのぢやが、其奴そいつがまた酒喰さけくらひで、しかも大泥坊おほどうぼうで村むら【ばね】に會あふたものだから、泣なきの涙なみだで歸かへつて來きて悲かなしい月日つきひを送おくつて居をつた。其處そこへ仲人なかくどがで來きて、盲目めくらの私わたしにツベコベと、木きに餅もちがなるやうなことを云いつて六公ろくこうの家うちへ嫁よめにやつたのだが、その六公ろくこうが最前さいぜんも言いつた通り、棒ぼうにも箸はしにもかからぬ仕方しかたの無ない奴やつだから、娘むすめも可愛かあいさ想うなものだ。三五教あななひけうの教をしへには二度迄にどまでは縁付えんづきは止やむを得えぬから神かみは大目おほめに見みるが、三度さんどになれば天てんの御規則ごきそくにもど戻もどるとかと云いつて、それは八釜敷やかましい教をしへだから可愛想かあいさうに娘むすめも若後家わかごけを立てると云いふて決心けつしんはして居ゐるものの、親おやの心こころとして假令たとへてん天てんの御規ごきそ則くは破やぶれても、モ一いっぺん遍私わたしの生命いのちを捨すてても好よい夫をつとを持もたしてやり度たいと思おもふのが一いっしん心ぢや。お前まへサンも三五教あななひけうのお方かたぢやさうながどうだらうなア。一いっぺん遍神様かみさまに伺うかがつて下くださいますまいか」

彌や「ヤアこれは難題なんだいだ。吾々われわれには到底解決たうていかいけつが付つかない。モシモシ勝彦かつひこの宣傳使様せんでんしさま、何とか解決かいかつを與あたへて下くださいな」

勝かつ「三五教あななひけうの教をしへに親子おやこは一いっせ世せ、夫婦ふうふは二に世せと教をしへてある。此事このことに就ついて隨分信者ずぶんしんじやの

中にも迷ふ人があるが、之を明瞭と解釋すれば、夫婦といふものは、夫でも女房でも二度より替へられないのが不文律だ[□]

婆^{ばば}「さうすると先の夫なり、女房なりの片一方が死ぬ。止むを得ないから又後の夫なり、女房を迎へる。さうなると死んでからは夫が二人あつたり、女房が二人あつたりするやうなことが出来るぢやないか。それでは何うも神界へ行つて何方の女房と一所に暮したら本當だか判らぬと云ふて、皆のものがいろいと評議をして居るのだが、お前サンは如何思ひますか[□]」

勝^{かつ}「夫婦と云ふものは無論身魂の因縁で結ばれるものではあるが、身魂と云ふものは、「いくら」にも分れて此世へ生れて来て居るものだ。併し餘程神力の有る神の身魂なれば四魂と云つて四つにも分れて此世に生れて来るものだが、一通りの人間は先づ荒魂とか和魂とか二魂が現はれて来るのが普通だ。それだから二度迄は同じ身魂の因縁の夫婦が神の引合はせで、不知不識に縁を結ぶ事となる。それだから三人目の夫や、女房は身魂が合はぬから、どうしても御神業が勤まらな

いのみならず、神界の秩序を紊し身魂の混乱を來す事になるから嚴禁されて居る

のだ。また靈界に行つた夫婦は肉體欲がチツトも無い、心と心の夫婦だから幽體はあつても此世の人間のやうな行ひは、チツトもする必要も無く、欲望も起らぬから綺麗なものだ。中には執着心の強い身魂は此世に息ある動物を使ふて、ナントか、かとか云ふて「わざ」をする奴がある。けれどもコンナのは例外だ。恰度幽界へ行つてからの夫婦と云ふものは、仲の好い兄弟のやうなものだ。肉體の夫婦は肉體の系統を繋ぐための御用なり、神界の身魂の夫婦は神界に於ける經と緯との御用をするのが夫婦の身魂の神業だ」

婆「コレハコレハ御親切によく教へて下さいました。ア、さうすればあのお竹は最早縁付くことは出来ませぬか。ア、可愛想に可愛想に、オンオンオン」
勝「ヤアお婆アサン、御心配なされますな。その六とやらの精神を、全然焼き直して、三五教の信者にさせ、酒も、賭博も、道樂も全然止めさして元の通りの夫婦に請合つてして上げやうか。改心すればお前サンも娘の婿にするのは不服ではあるまいな」

婆「アンナ眞極道は芝を被らな到底治りつこはないと、お竹が云ふて居りました。

それでも神様の御諭しで立派な人間になりませうか。煎豆に花咲く時節も来ると

云ふことだから、何とも知れぬけれど迎も迎もあきますまい

勝「悪に強いものは善にも強いものだ。生れ赤子の眞人間に、其の六公サンがな

つたらお前どうする考へぢや

婆「ソナ結構なことがあれば、爺も婆も兄も喜んで大賛成を致します

勝「お婆アサン、その六公サンは此頃は三五教の信者となつて、それはそれは立

派な人間になつて居ますよ。どうです、私に仲人をさして元の鞘に收めさして下

さらぬか。さうすれば三世の夫に嫁いで天則を破る必要も無いのだから

婆「エーそれは本當ですか

勝「苟くも神の教を傳ふる宣傳使、なにしに嘘偽りを曰ひませうか

婆「どうぞさうして下さい、頼みます

勝「實はその六サンを改心させて、此處へ伴れて來たのだ

婆「ヤーナダか聞き覚えのある聲だと思ふだが、六、お前来て居るのか。ソ

ナら夫れで何故早く名乗つて呉れないのだ

六「お母サン、誠に心配をかけて済みませぬ。今は全然改心を致しまして三五教の宣傳使のお伴を致し、コーカス詣りの途中でございます。山田村の松屋で一服した時に、お竹に思はず一寸出會ひましたが、お竹は私の面を見るなり、裏口へ遁げ出しました」

婆「ア、さうであつたか、併し六、心配して呉れな。お竹もお前の改心したことが分つたら、どれ位喜ぶことが知れたものぢやない。善は急げだ、早く誰か使を立てお竹を呼んで来て、まア一度改めて祝言の杯をさし度いものだ」

六「有り難うございます。誠に合す顔もございませぬ。偉い悪魔にとつつかれて居りました。モウ此後はチツトモ御心配はかけませぬから安心して下さい」

婆「ア、六、よう言ふて呉れた。その一言を聞いたなら私はモウ何時國替へしても、この世に残ることは無い、安心して高天原へ行きます」

勝「早速の和談まとまつて重疊々々、併し乍ら此處の息子サンもコーカス詣りの留守中なり、お竹サンも奉公の身の上、吾々も六サンもコーカス詣りの道中、一度參拜を終つてから悠くりと婚禮をしたらどうでせうか」

婆ばば「ハイハイ有り難がたう。一日いちにちや二日ふつかに何どうといふことは有ありませぬ。六ろくサンの精せい神しんさへきまれば、それでモウ何も彼かも落おち着ちやくだ。どうぞ早はやく機き嫌げんよく參さん詣けいを了しまつて一日いちにちも早はやく歸かへつて下ください」
一同いちどう「めでたいめでたい、ウローウロー」

（大正一一・三・二四 舊二・二六 外山豊二録）

（昭和一〇・三・一六 於臺南高雄港口官舎 王仁校正）

第一三章 山上幽齋（五六三）

醜しこの魔ま風かぜや様さま々さまの、世よの誘い惑わくに勝かつ彦ひこの、神かみの使つかひの宣せん傳でん使しは、彌や次じ彦ひこ、與よ太た彦ひこ、六ろく公こうの三さん人にんを伴ともなひ、小こ山やまの郷さとを打うち過すぎて、二に十じゅうの坂さかを三みつ越こえし、峠たうげの頂いただきに漸やく登のぼり着ついた。

この峠たうげの頂いただきは今いま迄まで過すぎき各かく峠たうげの頂ちやうじやう上に引ひ換かへて大たい變へんに廣ひろい高かう原げんになつて居ゐる。

小鹿川の流（なが）れは眼（がん）下（か）の山麓（さんろく）を、白布（しろぬの）を晒（さら）した如（ごと）く、岩（いは）と岩（いは）とにせかれて飛沫（ひまつ）を飛ばして居（ゐ）る。山腹（さんぷく）は殆（ほと）んど岩（いは）を以（もつ）て蔽（おほ）はれ、灌木（くわんぼく）の其處（そこ）彼處（かしこ）に青々（あをあを）として、岩（いは）と岩（いは）の配（はい）合（が）を、優（い）美（び）に高（かう）尚（じやう）に色（いろ）彩（さい）つて居（ゐ）る。

彌（や）「小（こ）鹿（か）峠（たうげ）も漸（や）つて二十（にじふ）三（さん）坂（さか）を跋（ぼつ）渉（せふ）したが、この頂（ちやう）上（じやう）くらゐ廣（ひろ）い所（ところ）は無（な）かつた。東（とう）西南（さいなん）北（ほく）の遠（えん）近（きん）の山（やま）、茫（ぼう）漠（ぼく）たる原（げん）野（や）は一（いち）望（ぼう）の下（もと）に横（よこ）たはり、風（かぜ）は清（きよ）く、何（なん）となく春（はる）の氣（き）分（ぶん）が漂（ただ）ふて來（き）た。此（こ）處（こ）で吾（われ）々（われ）はゆつくりと休（きう）養（やう）して參（ま）る事（こと）に致（いた）しませうか」

勝（かつ）「ア、それは宜（よ）からう、この頂（ちやう）上（じやう）より四（よ）方（も）を眺（なが）めた時（とき）の氣（き）分（ぶん）は、實（じつ）に雄（ゆう）渾（こん）快（くわい）闊（くわつ）にして、宇（う）宙（ちゆう）を我（わ）手（て）に握（にぎ）つたやうな按（あん）配（はい）式（しき）だ。ゆるゆると神（しん）界（かい）の話（はなし）でもさして頂（いた）たかうか、斯（こ）う云（い）ふ清（きよ）い所（ところ）では、何（なに）程（ほど）神（しん）界（かい）の秘（ひ）密（みつ）を話（はな）した所（ところ）で、滅（めつ）多（た）に曲（まが）津（つか）神（かみ）の襲（しふ）來（らい）する虞（おそれ）もなからう」

と言（い）ひ乍（な）ら、青（あ）芝（し）の上（うへ）に腰（こし）を下（おろ）した。三（さん）人（にん）も同（おな）じく、芝（しば）生（ふ）の上（うへ）に横（よこ）たはつた。

與（よ）「ア、良（い）い氣（き）分（ぶん）だ。何（い）時（つ）見（み）ても、頂（ちやう）上（じやう）を極（きは）めた時（とき）の心（こころ）持（もち）はまた格（かく）別（べつ）だが、今（け）日（ふ）は殊（こと）更（さら）に氣（き）分（ぶん）が良（よ）い。斯（こ）う云（い）ふ時（とき）に一（ひと）つ幽（いう）齋（さい）の修（しう）業（げふ）を始（は）めたら、キツト善（よ）い神（かみ）様（さま）が感（かん）合（が）して下（くだ）さるでせう、………もし宣（せん）傳（でん）使（し）様（さま）、一（いち）同（どう）此（こ）處（こ）で三（あ）五（な）教（けう）の鎮（ちん）魂（こん）歸（き）神（しん）の

神法しんぽうを施ほどこして下くださいませぬか」

勝かつ「それは結構けつこうだが、生憎あひにく高地かうちの事こととて、水みづも無なし、手てを洗あらひ口くちをすすぎ、水みづを被かぶると云いふ事ことが出来できないから……第一だいいち此これには閉へい口こうだ」

彌や「神様かみさまの教をしへにも、「身みの垢あかは風呂ふろの湯槽ゆぶねに洗あらへ共ども、洗あらひ切きれぬは魂たまの垢あかなり」と示しめされてある、たとへ水みづが無なくとも、神様かみさまに一ひとつ御免ごめんを蒙かうむつて、身み魂たまの洗濯せんたくをして貰もらふ譯わけにはゆきますまいか。水みづは肉體にくたいの垢あかを洗あらひ落おとす丈だけのもの、鎮魂ちんこんは精神せいしんの垢あかを落おとすものですから、今日けふは肉體にくたいは已やむを得えずとして、靈丈みたまだけの洗濯せんたくをして貰もらひませうか……ナア與よ太彦たひこ、六公ろくこう」

與よ「それも一ひとつの眞理しんりだ……もしも勝彦かつひこの宣傳使せんでんし、あなたは古參者こさんしやだ、吾々われわれは新參者しんざんもの、どうぞ一ひとつ鎮魂ちんこんを願ねがつて下くださいな」

勝かつ「靈肉れいにく一致いつち、現幽げんいう一本いっほんだから、理屈りくつを云いへば、別べつに水行すゐぎやうをせなくつても、靈れいさへ洗あらへば良いいと云いふ様やうなものだが、矢張やつぱり汚きたな肉體にくたいには美うつくしい靈みたまの神かみが憑うつる事ことは、到底たうてい不ふ可か能のうだらう。コンナ所ところで漫然うつつかりと幽齋いうさいでもやらうものなら、ウラル教けうの守護しゆごを致いたして居をる惡神あくがみが、何時なんどき憑依ひよういするかも知しれたものでない。此頃このごろは靈界れいかいに於おいて、

往昔國治立の大神、その他の神々に對し、極力反抗を試み、遂には大神をして退
隱の已むなきに至らしめたと云ふ大逆無道の常世姫や木常姫、口子姫、八十枉彦
の邪靈連中が、少しでも名望のある肉體に憑依し、再び神界混亂の陰謀を企てて
居るのだから、愚圖々々して居ると、何時憑依されるか分つたものでない。宇宙
一切は大國治立尊の御支配だから、到る所として正しき神の神靈は、充滿し給ふ
とは云ふものの、また盤古系統、自在天系統の邪神も天地に充滿して居るから、
此方の靈をよほど清淨潔白にして掛らねば、神聖の神の降臨を受けるといふ事は、
到底不可能な原則だ。水が一滴もないのだから、肉體を清める譯にも行かない
から、また瀧壺の在る所か、清き流れの水に禊をするとかして、その上で幽齋の
修業にかかつたが宜しからう」
彌ア、融通の利かぬものだな、全智全能の根本の神様でも、ソナ窮屈な意見
を以て居られるのだらうか。善惡相混じ、美醜互に交はつて、天地一切の萬物は、
茲に初めて力を生じ、各自の活動を開始するのでは有りませぬか。世の中には絶
對の善もなければ、また絶對の惡もない。如何に水晶の身魂だと云つても、大半

腐敗せる臭氣に包まれた人間の體に宿らねばならぬのだから、何程表面を水位で洗つた所で、五臟六腑まで洗濯しきれぬものでない、物を深く考へれば、手も足も出せなくなつて了ふ。何事も神直日大直日に見直し聞直し詔直して、ここで一つ神聖なる幽齋の修業を、是非々々開始して下さい。ナンダカ神經が興奮して、神懸の修業がしたくつて、仕方がなくなつて來た」

勝「幽齋の修業は心身を清淨にする爲、第一の要件として、清潔なる衣服を纏ひ、身體を湯水に清めて掛らねばならぬのだが、さう言へば仕方がない、神様に御免を蒙つて幽齋の修業をさして頂く事にしやうかなア」

彌「イヤー有難いありがたい……ナア與太彦、六公、貴様は今迄まだ神懸の經驗がないのだから、この彌次彦サンの神懸を、能つく拜め、心を清め、肝を錬れ、……サア勝彦の宣傳使様、早く審神をして下さい。ナンダカ氣がイソイソとして堪まらなくなつて來ました、……ウンウンウンウン、ウーウー」

と忽ち惟神的に兩手は組まれ、身體忽ち前後左右に動揺し始めた。

與「ヨー彌次彦の奴、獨り芝居を始め出したナ、ナンダ、妙な恰好だな、目を塞

ぎよつて両手を組み、坐つたなりに飛上がり、宙にまいまいの藝當を始め出した。
大方松の大木から滑走しよつた時の亡霊が、まだ體のどつかに残留して居つたと
見える……オイ六公、面白いぢやないか、……コレコレ勝彦サン、今日はモウ口
上丈はやめて下さい、頼みますぜ」

勝「アハ、ハ、ハ、」

彌次彦は夢中になつて、汗をブルブル垂らし乍ら、蚋が空中に餅搗した様に、
地上一尺以上を離れ、五六尺の間を昇降運動を開始して居る。神懸に關しては素
人の與太彦、六公の二人は、口アングリとして大地に倒れた儘、
與、六「ア、ア、ア、ヤルヤル、妙だ妙だ、オイ彌次彦、貴様はそれ丈の隠し藝を
持つて居つたのか、重寶な奴だ、宙吊りの藝當は珍らしい。ワハ、ハ、ハ、モシモ
シ宣傳使さま、どうかして、御神力で彌次彦の體を、猿廻しの様に使つて見せ
て下さいな」

勝彦は両手を組み、天津祝詞を聲も緩やかに奏上し終り、一二三四五六七八九
十百千萬と、天の數歌を歌ひ終り、右の食指の指頭より五色の靈光を發射し、彌

次彦の身體に向つて、空中に圓を描いた。彌次彦の身體は勝彦の指の廻轉に伴れて、空中に圓を描き、指の向ふ方向に、彼が身體は回轉する。勝彦は、今度は思ひ切つて腕を延べ、中天に向つて「ブンマワシ」の如くに圓を描き、彌次彦の體は勝彦の指さす中空に向つて舞上り舞ひ下り、また舞ひ上り舞下り、空中遊行の大活劇を演ずる面白さ。

與「オイ六公、あれを見い、彌次彦の奴、漸々熱練しよつて、體が小さくなつて、見えぬやうな高い所まで、空中を滑走し、上つたり下りたり、上になつたり下になつたり、大變な大技能を發揮しよるぢやないか、……モシモシ宣傳使さま、あなたの方の指の動く通りに、彌次彦の奴、動きますなア。あれなら輕業師になつても大丈夫食へますナ」

勝「アハ、ハ、ハ、あれは靈線の力に操られて、體を自由に使はれて居るのだ。俺の指の通りになるであらうがな」

與「ハハア、さうすると彌次彦が偉いのぢやなくて、あなたの指が偉い神力を具備して居るのだなア……あなたはヤツパリ魔法使だ、恐ろしい油斷のならぬ宣傳

使ぢや、私丈はアンナ曲藝は、どうぞ遣らさぬ様に願ひますで、喃六公、アンナ事をやられたら、息も何も切れて了うワ」

六「ア、恐ろしい事だのう」

斯く云ふ中、彌次彦の身はスーと空気を分ける音と共に、三人の前に下つて來た。勝彦は又もや兩手を組んで、「許す」と一聲、彌次彦は常態に復し、目をギ口つかせ乍ら、

彌「ア、やつぱり二十三峠の頂上だつた、ヤア怖い夢を見たよ、天へ上がるかと思へば地へ下つて、地へ下つたと思へば又天へ引上げられる、目はまわる、何ともかとも知れぬほど苦しかった、ア、やつぱり夢だ夢だ」

與、六「エ、なアに、夢所か實地誠の正味正眞だ。現に俺達は今ここで貴様の大發明の輕業を、無料觀覽した所だ。貴様もよつぽど妙な病氣があると見える、親のある間に治療をして置かないと、親が無くなつたら、到底一生病だ。不治の難症と筍醫者に宣告されるが最後、芝を被つて來ない限り、逆も此世では駄目だぞ、……モシモシ勝彦さま、コラ一體何の業ですか」

勝「彌次彦には、惡逆無道の木常姫と云ふ奴が、タツタ今油斷を見すまして、くつつきよつたのだ。そこで私が鎮魂の力を以て木常姫の惡靈を縛つたのだ。惡靈は私の指の指揮に従つて、あの通り容器と一所に、宙を舞ひ狂うたのだよ、モウ今の所では、木常姫の邪靈も往生致して逃げよつたから、彌次彦も舊の通り、常態になつたのだ、ウツカリして居ると、貴様等も亦何時邪靈の一派に襲はれるか知れやしないぞ。夫れだから、至貴至重至嚴なる幽齋の修業は、肉體を淨めもせず、汗だらけの、垢の付いた衣服を纏ふて奉仕する事は出来ない」と、私が説諭したのだ。それにも拘はらず、私の言葉を無にして聞かないものだから、修業も始めない中から、邪靈に誑惑され、忽ち木常姫の容器となりよつたのだ、……オイ彌次彦、しつかりせない」と、又もや邪神が襲來するぞ」

彌「智覺精神を殆んど忘却して居ましたから、何が何だか私としては、明瞭を缺きますが、假令邪神にもせよ、宙を驅けるナンテ、偉い力のあるものですよ」

勝「馬鹿を言ふな、胴體なしの尻といふ事がある。惡魔と云ふ者は、大體が表面ばかりで、實地の身がないから、恰度、言へば風の様なものだ。その邪靈が人間

の肉體へ這入つたが最後、人間の體は風船玉が人間を宙にひつぱり上げる様な具合になつて、體が飛び上がるのだ。人間は大地を歩む者、鳥かなんその様に、宙を翔つ奴は、最早人間としての資格はゼロだ、貴様たちも中空が翔つて見たいのか」

與、六「へいへい邪神だらうが、何だらうが、人間として天空を翔ると云ふ様な事が出来るのなら、私は一寸一遍、ソナ目に會ふて見たいですな。世界の人間は驚いて……「ヤア與太彦、六公の奴、偉い神力を貰ひよつた、生神さまになりよつた」と云つて、尊敬して呉れるでせう。そうになると、「ヤア彼奴は三五教の信者だ、三五教は神力の強い神だ、俺も三五教に歸依する」と云ふて、世界中の人間が一遍に改心するのは請合です。神様も吾々にアンナ神力を與へて、世界の奴をアツと言はして下さつたら一遍にお道が開けて、世界の有象無象が改心するのだけれどなア」

勝「正法に不思議なし、奇蹟を以て人を導かむとする者は、いはゆる惡魔の好んで執る所の手段だ。吾々は神様の貴重な生宮だ、充分に自重して、肉の宮に重み

を付け、少々の風にまで飛あがり、宙をかける様な事になつては、最早天地經綸の司宰者たる資格はゼロになつたのだ。何處までも吾々はお土の上に足をピツタリと付け居るのが法則だ」

與「それでも、鷹彦の宣傳使は宙を翔つぢやありませんか」

勝「鷹彦は半鳥半人の境遇に居るエンゼルだ。彼は時あつて空中を飛行し、神業に参加すべき使命を持つて居るのだから、羽翼が與へられてあるのだよ。羽翼は空中を飛翔するための道具だ。羽もない人間が、今彌次彦の様な事を行つるのは變則だ、悪魔の翫弄物にせられて居るのだよ」

六「さうすると、悪魔の方がよつぽど偉い様ですな。誠の神様は土に親しみ、悪魔は天空を翔るとは、實に天地轉倒の世の中とは言ひ乍ら、コラ又あまり矛盾ぢやありませんか。假令邪神でも何でも構はぬ、一遍アンナ離れ業を演じて見たい

ワ

勝「コラコラ六公、言靈の幸はふ國だ、ソナ事を言ふと、貴様には、龍宮城から鬼城山に使ひした、一旦大神に叛いた口子姫の靈が、貴様の身邊を狙つて居る

が憑つて呉れぬワイ」

與「オイ彌次公、貴様ア、アンナ事所かい、殆ど日天様の所へ行きよつたかと思

ふほど高う、空中をクルクルと廻轉しよつて、まるで鳥位小さく見える所ま

で……貴様は現に大曲藝を演じよつたのだよ、それを貴様は記憶して居らぬか」

彌「ア、さうか、ナンダかソナ夢を見たやうな記憶が朧げに残つて居る様だ。

ヤアヤア六公の奴、追々と熟練しよつて、ハア上るワ上るワ……殆ど體が小さく

見える所まで上りよつたナ、……モシモシ勝彦さま、アラ一體全體どうなるので

すか」

勝「あまり慢心をする、體の重量がスツカリ無くなつて、邪神の容器となり、

風船玉のやうに吹き散らされるのだ、幸に今は無風だから好いが、一昨日の様な

風でも吹いた位なら、夫れこそ、どこへ散つて仕舞ふか分りやしないぞ。それだ

から俺が此處では幽齋の修業は行られぬと云ふのだ、……吁、困つた病人が二

人も出来よつた、愚圖々々して居ると、與太公、貴様にも傳染の兆候が見えて居

る、病菌の潜伏期だ。何とかして、免疫法を講じたいものだが、此附近には避病

院もなし、消毒薬も無し、困った事だワイ』

與『消毒薬とは何ですか』

勝『生粹の清浄なお水だ、お水で體を清めて、神様の靈光の火で、黴菌を焼き亡

ぼすのだ。吁、困った事だ、……オイ與太公、しつかりせぬか、貴様には八十枉

彦が附け狙ふて居るぞ、……何だ其態度は……またガタガタと震ひ出したぢやな

いか』

與『強度の歸神状態で、……イヤもう神人感合の妙境に達するの、餘り遠くは

ありますまい、……南無八十枉彦大明神、何卒々々この與太彦が肉體にどこどこ

までもお見捨てなく、神懸り下さいませ、惟神靈幸倍坐世』

勝『また傳染しよつた、病毒の傳播と云ふものは、實に迅速なものだ、ア、仕方

がない、此奴等は皆奇蹟を好んで神を認めやうとする偽信者だから、谷底へ落ち

て目を覚ますまで打遣つて置かうかなア。大火事の中へ、一本や二本のポンプを

向けた所で仕方がないワ。エ、ままよ、これ丈熱くなつて燃え來つた火柱の様な、

周章魂は、最早救ふの餘地はない、……吁、國治立の大神様、木花姫の神様、日

と矢聲を出し乍ら、勝彦が端坐せる頭上を、前後左右に飛びまわり出した。勝彦は全身の力と靈を籠めて、右の食指より靈光を、八十柱彦の憑れる與太彦の前額部目掛けて發射した。

ハ「ワツハ、、、オツホ、、、猪口才な腰拔審神者、吾々を審判するとは片腹痛い。サアこれよりは其方の素つ首を引き抜いてやらう、覺悟を致せ」と猿臂を延ばして掴みかかる。勝彦は「ウン」と一聲言靈の發射に、與太彦の身體は翻筋斗うつてクルクルと七八廻轉し乍ら、傍の木に茂みに轉げ込んだ。又もや彌次彦は容色變じ、目を怒らせ、齒をキリキリと轢る音、……暫くあつて大口を開き、

「コ、、、ツ、、、ネ、、、ヒ、、、ヒメ、コツコツコツ、ネ、、、ヒヒヒ、メメメ、コツコツ、コツネヒメのミコト、……其方は三五教の宣傳使と申し、變性男子埴安彦の神、變性女子埴安姫の神の神政を楯に取り、吾々の天下を騒がす腰拔野郎、この二十三峠は、吾々が屈強の關所だ。二十三坂、二十四坂の間は、ウラル彦の神に守護いたす、八岐の大蛇や、金狐、惡鬼の繩張地點、此處へ來た

は汝が運の盡き、これから其方の靈肉共に木葉微塵にうち亡ぼし呉れむ、力力覺悟をせよ」

と彌次彦の肉體は、拳骨を固めて、勝彦目がけて迫つて来る。勝彦は又もや「ウン」と一聲言靈の水火を發射した。彌次彦の肉體は二三間後に飛び下がり、大口を開けて、

「オホ、、、、、汝盲宣傳使の分際と致して、この木常姫を言向和さむとは片腹痛し、思ひ知れよ。汝が身魂の生命は、最早風前の燈火だ。この谷底に蹶り落し、絶命させてやらうか、ホ、ホウ、愉快千萬な事が出来たワイ。貴様を首途の血祭りに、祭りあげ、夫れよりは尚も進んでコーカス山を蹂躪し、ウラルの神に刃向ふ變性女子の身魂を片つ端から喰ひ殺し、平げ呉れむは瞬く間、オツホ、ホウ、嬉し嬉し喜ばし、大願成就の時節到來だ、……ヤアヤア部下の者共、一時も早く勝彦が身邊に群がり來つて、息の根を止めよ、ホーイ　ホーイ　ホーイ」

と云ふかと思れば、ゾツと身に沁む怪しの風、縦横無盡に吹き來り、四邊陰鬱の氣に閉され、數十萬の厭らしき泣き聲、笑ひ聲、叫び聲、得も言はれぬ慘澹たる

光景となつて来た。勝彦は最早これ迄と、一生懸命、兩眼を閉ぢ、天津祝詞を奏上し、天の數歌を歌ひ始めた。與太彦の身體は前後左右に脱兔の如く、駆け廻り始めた。續いて彌次彦の身體は四つ這となつて猛虎の荒れ狂ふが如く、口より猛火を吐きつつ、勝彦の居所を中心に猛り狂ひ飛廻る。六公は忽ち頭上の中空に跳上がり、勝彦が頭上を前後左右に駆けめぐり、何とも譬難き惡臭を放ち始めた。四邊は刻々に暗黒の度を増した。最早勝彦の身邊は烏羽玉の闇に包まれて了つた。八十柱彦、木常姫、口子姫の神の神力には恐れ入つたか、イヤ恐れ入らずに居られうまい、ワツハ、ハ、ハ、オツホ、ハ、ハ、ハ、ホツホ、ハ、ハ、ハ、

と暗がりより、怪體な聲切りに響き渡る。虎嘯くか、獅子吼ゆるか、龍吟ずるか、但しは暴風怒濤の聲か、響か、四邊暗澹、荒涼、魔神の諸聲は五月蠅の如く響き渡る。怪また怪に包まれたる勝彦は、一生懸命、瀧の如き汗を絞り乍ら、神言を生命の綱に、聲の續く限り奏上しかけた。この時闇を照して、中空より、馬に跨り下り来る四五の生神があつた。見る見る此場に現はれ、金幣を打振り打振り、前後左右に馬を躍らせ、駆け巡れば、流石の邪神も度を失ひ、先を争ふて二十四

坂の方面指して、ドツと許り動揺めき渡り、怪しき聲と共に煙の如く逃げ散つた。
與太彦、彌次彦、六公は忽ち元の覺醒状態に復歸した。

勝「ア、有難し有難し、惡魔の襲來を拂ひ清め給ひし、大神の御神徳有難く感謝
仕ります」

と大地に頭をすりつけて、嬉し涙に咽ぶ。彌次彦、與太彦、六公の三人も、同じ

く芝生に頭を着け、何となく驚異の念に驅られ、一生懸命に神言を奏上して居る。

四人の身體は虹の如き鮮麗なる靈衣に包まれた。芳香馥郁として四邊に薰り、嚙

喰たる音樂の響は、四人の身魂に沁み込むが如く聞ゆるのであつた。四人は漸く

首を擧げて眺むれば、こはそも如何に、日の出別の宣傳使は、鷹彦、岩彦、梅彦、

龜彦、駒彦、音彦と共に、馬上豊に此場に立つて居る。

勝「ヤア是れは是れは日の出別の神様、能くも御加勢下さいました。思はぬ不調

法を致しまして、重々の罪御宥下さいませ。此上は決して決して、斯かる不規

律なる幽齋の修業は斷じて行ひませぬ。何事も、我々が不覺無智の致す所、知ら

ず識らずに慢心仕り、お詫の申様も御座いませぬ」

日の出別の神は一言も發せず、首を二三回肯かせ乍ら、一行の宣傳使を引連れ、再び天馬空を驅つて、雲上高く姿を隠した。無數の光輝に冴えたる靈線は、虹の如く彗星の如く、一行の後に稍暫く姿を存しける。

峰の尾の上を吹き亘る春風の聲は、淑やかに聞えて來た。百鳥の春を唄ふ聲は長閑に四人が耳に音樂の如く聞え始めた。

彌^やモシ勝彦の宣傳使さま、大變な大騒動がおつぱじまつて、天の岩戸隠れの幕が下りましたな、あの時の私の苦しさと言つたら、澤山な靑面、赤面、黒面の兔や、虎や、狼、大蛇が一時に遣つて來て、足にかぶり付く、髪の毛を引つぱる、耳を引く、腕をひく、擲る、それはそれは随分苦しい目に逢はされました。イヤもう神懸は懲り懲りでした。咫尺暗澹として晝夜を辨ぜず、苦しいと云つても譬様のない、えぐい、痛い、辛い、臭いやもう慘々な【きつい】目に會ひました。

その時に…ア、宣傳使様がウンと一つ行つて下さると好いのだけけれど、あなたは靈眼が疎いと見えて、敵の居ない方ばかり、一生懸命に鎮魂をやるものだから、鼻糞で的貼つた程も效能は無く、聾ほど言靈の神力は利かず、イヤモウ迷惑千

萬ばんな事ことでしたよ」

勝かつ「ア、さうだつたか、そらさうだらう、何なに分ぶん曇くもり切きつた肉にく體たいで、俄には審かさ神に者はを強しひられて無む理りに行やつたものだから、審さ神に者はの肉にく體たいに神かみ様さまが完く全わんに宿やどつて下くださらぬものだから失し敗ばいをやつたのだ。然しかしチツトは鎮ちん魂こんも效かう能のうが現あらはれただらう」

彌や「千せん遍べんに一いち度ど位ぐひまぐれ當あたりに、私わたくしを責せめて居ゐる惡あく靈れいの方ほうに靈れい光くわうが發はつ射しゃしたのは確たしかです。イヤモウ脱だつ線せんだらけで、必ひつ要えうな所ところへはチツトも靈れいの光くわう線せんが發はつ射しゃせないものだから、惡あく魔まの奴やつ益ます々ます付つけ込こんで、武む者しや振ぶりつき、えらい苦くるみをしました。

ア「ア斯こうなると立りつ派ぱな大たい將しやうが欲ほしくなつて來きたワイ」

勝かつ「惟かむ神ながら靈たま幸ちは倍はへ坐ませ世せ」

與よ「私わたしもえらい目めに遭あはされた、人ひとの首くびを眞ま黒くろけの繩なはで、惡あく魔まの奴やつ、幾いく筋すぢともなく縛しばりよつて、古ふる池いけの水みづを兩りやう方ほうから、釣つる瓶べいの綱つなをつけて替か揚あげる様やうに、空くう中ちゆうを自じ由じゆ在ざいに振ふり廻まはしよつた時ときの苦くるさと言いつたら、何なん遍べん息いきが絶たえたと思おもつたか分わかりませぬ、ア、コンナ苦くるい責せめく會あふのなら、一いつ層そうの事こと、一ひと思おもひに殺ころして欲ほしいと思おもひましたよ。熱あついと思おもへば又また冷つめたい谷たに底そこへ體からだを吊つり下おろされ、今こん度は又また焦こげつく様やう

な熱い所へ吊り上げられ、夏と冬とが瞬間に交代をするのだから、體の健康は臺なしになるなり、手足は散り散りバラバラになつて了つた様な苦みを感じた。その時に審神者の勝彦サンは、どうして御座るか、ここらでこそ助けて呉れさうなものだと思つて、あなたの方を眺めて見れば、あなたの背後には、常世姫の惡靈が、貧乏團扇をふつて、惡靈の指揮命令をやつて居る、お前さまは、その常世姫の手の動く通りに、操り人形の様に活動し………否蠢動して居るものだから、却てそれが此方の助け所か、邪魔になつて、益々苦しさを加へ、イヤモウ言語に絶する煩悶苦惱、目の球が一丁ほど先へ飛出すやうな悲惨な目に遇はされました」

勝「それだから、コンナ所で幽齋の修業は廢せと言ふのに、貴様が勝手に惡魔の方へ行きよつたのだ。假令邪神でも、あの彌次彦の様に、空中滑走がしたいの曲藝が演じたいのと、熱望的氣焰を吐くものだから、魔神の奴得たり賢し、御註文通り何でも御用を承はります、私の好物、手具脛引いて待つて居ました、何のこれしきの藝當に手間もヘツチャクレも要るものか、遠慮會釋にや及ばぬ、惡神の容器には持つて來いして來いぢや、ヤットコドツコイして來いな、權兵衛も來れ、

勝「みなが寄つて、さう俺を包圍攻撃しても困るぢやないか。俺だつて誠心誠意、有らむ限りのベストを盡したのだ。これ以上吾々に望むのは、豫算超過と云ふものだ。國庫支辨の方法に差支へて了ふ。又復増税なんて、人の嫌がる事を言はねばならぬ。お前等はさう言つて、吾々當局の審神者を攻撃するが、當局者の身にもチツトはなりて見るが宜い。國家多事多難のこの際ぢや、金の要るのは底知れず、増税、徵募あらゆる手段を盡して膏血を絞り、有らむ限りの智慧味噌の臨時支出までして、ヤツトこの場を切抜けたのだ。さう八釜しく責め立ると、勝彦内閣も瓦解の已むを得ざる悲運に立到らねばならなくなる。さうなれば、貴様等も一蓮托生、連袂辭職と出かけねばなるまい。今度の責任を俺一人に負擔させやうと云ふのは、あまり蟲が好過ぎるワイ。共通的の責任を持つのが、いはゆる一蓮托主義だよ、アハ、ハ、ハ、」

彌「イヤ仰る通りだ、御尤もだ、モチだ。スツテの事で勝彦内閣も崩解するところだつた。併し乍ら、人間は老少不定、何時冥土の鬼に迎へられて、缺員が出来るか知れたものぢやない、その時には、彌次彦が後釜に坐つて、この彌次喜多内閣

でも組織し、お前サンの政綱を維持して行く、つまり連鎖内閣でも成立させて、居すわる積りだから、後に心を残さず、白紙の三角帽を頭に戴いて、未練残さず旅立なされ。何れ新顔の一人や二人は入れても構はぬ、居坐り内閣をやつて居る方が、黨勢維持上都合が好いから、アハ、ハ、ハ、ハ。併しコンナ所に長居は恐れだ、グズグズしとると、冥土から角の生えた鬼族院がやつて來られちや、一寸閉口だ。これや一つ、研究会でも開いて、熟議をこらすが道だけれど、餘り同じ處にくつついて居るのも氣が利かない。二十四番峠も踏破し、二十五番の峠の上で、善後策をゆつくり講究致しませうか、アハ、ハ、ハ、ハ。』

一同「ワハ、ハ、ハ、ハ。』

勝「まだ笑ふ所へは行かないぞ、何時瓦解の虞があるかも知れやしない。常世姫命が、遠く海の彼方に逃げ去つて、盛に空中無線電信で合圖をして居るから、一寸の隙も有つたものぢやない、氣を付けッ、進めッおいち二三四ッ』

と道なき路をアルコールに酔ふた猩々の如く、無闇矢鱈に二十五番峠の上まで、漸く辿り着いた。

勝「ア—ア、ヤレヤレ危ない事だつた、中空に高さ一本の丸木橋を渡つて来るやうな心持だつた」

彌「地獄の釜の一足飛といふ曲藝も、首尾能く成功致しました。皆様、お氣に入りましたら、一同揃ふて拍手喝采を希望いたします」

勝「ヤア賛成者は少いなア、……、ヤア一つも拍手する奴がない、全然反對だと見えるワイ」

與「それでも勝彦さま、あなたの身の内に簇生して居る寄生蟲は、ソツと拍手して居ましたよ。その聲が……ブン……と云つて、裏門から放出しました。イヤもう鼻持のならぬ臭い事だつた、ワハ、ハ、ハ」

この時忽然として、東北の天より黒雲起り、暴風忽ち吹き來つて、峠の上に立てる四人の體は中空に舞ひ上り、底ひも知れぬ谷間目がけて天上より、岩をぶつつけた如く、一瀉千里の勢を以て、青み立つたる淵に向つて、眞逆様にザンブと落込んだ。

その途端に夢は破られ附近を見れば瑞月が近隣の三四人の男、藪醫者を招いて

脈みやくを執とらせて居ゐる。

藪やぶ醫い者しやは、一寸首ちよつとくびを捻ひねつて、

「ア、此こ奴いつア、強きやう度どの催さい眠みん状じやう態たいに陥おちつて居をる、自し然ぜんに覺かく醒せい状じやう態たいになるまで、放ほう任にんして置おくより途みちはなからう………非ひ常じやうな麻ま痺ひだ、痙けい攣れんだ………」

と宣せん告こくを下くだし居ゐたりける。

(大正一一・三・二五 舊二・二七 松村眞澄録)

第一四章

一途川いちづがは〔五六四〕

小こ鹿しか峠たうげの四し十じふ八や坂さかをば、一いつ行かう四よ人にんはやつと打うち越こえ、見み渡わたす限かぎり茫ぼう々ぼうたる雜ざ草さう茂しげる廣ひろ野の原はら、足あしにまかせて進すすみ行ゆく。ピタリと行ゆき當あたつた、水すゐ勢せ轟わう々わうとして飛ひ沫まつを飛とばし、渦うずまき流ながるる谷たに川がはの傍かたに辿たどり着ついた。

彌や「ア、吾われ々われはやうやうにして、小こ鹿しか峠たうげの四し十じふ八や坂さかを越こえ、此こ處この廣ひろ野の原はらを一いつ行かう

四人連れ、てくついて来たが、此處にピタリと行詰まつた、偉い川が横はつて居るワイ。これからフサの都へ渡り、コーカス山に行く迄は、随分長い道程だが、それまでには澤山の難所が在るだらう。それにしても絡繹として續く日々の老若男女の參詣者は、一體何處を通つて行くのだらう。この頃街道は雑沓だと云ふ事だのに、吾々の通過する處は人の子一匹居らぬぢやないか。ナンデも之れは小峠の下り終ひから行手に踏み迷ひ、反對の方向に進んで来たのではあるまいかなア

與 何だか、ご氣分の冴えぬ天候と云ひ四邊の状況と云ひ、まるで幽界旅行の様だ。いつやら谷底に落ちて魂が宙に迷ひ、とうとう六道の辻まで行つて銅木像に逢つた時の様な按配式だぞ。どうやら此川も三途の川の兄弟分ぢやあるまいか、何だか變な風が吹いて来るぞ。ア、此奴は不思議だ、今の今まで泰然自若乙に構へこみて居た山嶽の奴、知らぬ間に何處かへ消えて仕舞ひよつた、まるで三途の川のやうな按配式だ、ナア彌次彦、貴様はどう思ふか

彌 吾々の言靈の御神力に恐縮しよつて、山の奴雲を霞と逃げ散りよつたなア。

随分三五教の吾々は豪勢なものだワイ

勝「オイ此處は冥土を流るる三途の川ぢやなからうかな。何だか娑婆の川に比べ
て調子が違ふやうだ」

彌「調子が違つたつて御心配なさいますな、この彌次サンはドンドンながらポン
ポンながら、カンカンながら、前後メめて貳回までも、幽界探險の實地經驗を持
つて居るお兄サン。最初與太公と遣つて來た時には、三途の川は實に綺麗な水だ
つた、それが第二回目に来た時には何とも知れぬ、臭氣紛々たる川風が鼻を突く
やう、小便大便黒血鼻啖の混合したやうな、汚くるしい物が流水代用の藝當を靜
かにやつて居た。その時三途の川の渡守兼脱衣婆奴が、世の中の奴が汚れた事を
しをるから、この清い川がコンナに汚くなつたと云ひよつた。どうせコンナ汚い
娑婆が、さう俄に清潔になるものぢやないから矢張冥土にある三途の川なら、依
然として汚濁の水が永久に満ち流れて居る筈だ。之はまた素敵滅法界な清流だ、
これを思へば三途の川とは、どうしても受取れないワ」

六「モシモシ皆サン、彼處の枝振の洒落た松の根許に小さい家が現はれて居るぢ

やありませぬか、あれやきつと三途の川の鬼婆の本宅かも知れませぬぜ」

彌「ナーニ、あれや瓦葺だ。婆の御館と云ふものは、それはそれは立派なものだ。

どうしても比較にはならない黄金藏の様だよ」

與「黄金藏つて何だい、この前に貴様と旅行した時には見すばらしい雪隠小屋の

様な庵じやなかつたかい」

彌「アハ、、、頭の悪い奴だナ、雪隠小屋の様だから、當世流に黄金藏と言靈

を詔り直したのだよ」

與「何を吐しよるのだ、然しどうも臭いぞ。一つドンナ奴が居るか訪ふて見やう

かい」

彌「マア待て一つ考へものだ。熟思黙考の餘地は十二分に存する」

與「ヤア構はぬ當つて碎けた。一つ善か悪か虚か實か爺か媪か、絶世の美人かお

かめか、檢非違使の別當與太衛門尉無手勝公が首實檢に及ぼうかい」

彌「アハ、、、又そろそろはつしやぎ出したなア、それほどはつしやぐと、日輪

様が御出ましになつたら、貴様の細腕が熏ぼつてしもうぞ」

與よ 何なにを言いふのだ、熏くすほつて來きたら、この川かはにザンブと浸つければ好よいのだ。採さい長ちやう補ほ短たん、
水すゐ缺けつ水すゐ補ほだ、ソそンナ事ことに心しん配ぱいするな。自じ由ゆう自じ在ざいの天てん地ちを跋ぱつ涉せふする、三あな五な教ひけうの宣せん傳でん、
使しの候こう補ほ者しやだ〆

と云いひながら小こ屋やの傍かたはらにツツと立たち寄より妙めうな腰こし付つきをして、兩りやう手てを蠅かま螂きりの樣やうに構かまへ
たたまま膝ひざをくの字じに曲まげ、尻しりを振ふりながら、一いっ軒けん屋やの無む雙さう窓まどを覗のぞき、

モウシモウシお媪ばあサン 一いち夜やの宿やどを願ねがひます

それはお易やすい事ことながら 此これなる部へ屋やを開あけまいぞ

それは誠まことに有ありがた難たう 今こよひ宵ひは此こ處こにゆつくりと

足あしを伸のばして寝ねるであらう お婆ばばは口くちを尖とがらして

これなる居ゐ間まを開あけまいぞ 言いひつつお婆ばばは谷たに川がはに

手て桶をけをさげて水みづ汲くみに 後あとに與よ太た彦ひこ只ただ一ひとり人り

今いまなるお婆ばばの云いふたには 此これなる部へ屋やを開あけなとは

てつきりおむすの添そへ伏ぶしか 何なには兔ともああれ開あけて見みよ

左手ゆんでに襖ふすまカラリ開あけ つらつら見みればこは如何いかに

あちらの隅すみには手てがある こちらの隅すみには足あしがある

今宵こよひこの家やにとまりなば 手足てあしも骨ほねもグダグダに

出刃でばで料理れうつて鹽しほつけて おほかたお婆ばばが喰くふである

これやたまらぬと泡あわを吹ふき 裏口うらぐち指さして尻しりからげ

スタコラヨイサノ、ドッコイシヨ ドッコイサノエツサツサノ、エンサノサ

エツササノエササ、エササノサツサイ

アハ、、、

彌や「コラこの大馬鹿おほばか、何を洒落しやれるのだ、此處ここはどうやら三途せうづの川かはだぞ。まごまご

して居ゐると本當ほんたうに三途せうづの川かはの鬼婆おにばばが、又また着物きものをすつくり取り上あげて、親讓おやゆづりの洋やう

服ふくまで渡わたせと吐ぬかしよるぞ、君子危くんしあやふきに近ちかづかずだ、早はやくこちらへ逃にげてこぬかい

與よ「エ、今回こんくわいも前回ぜんくわいもあつたものかい、カイツクカイのカイカイだ。オーイ

三途せうづの川かはの鬼婆おにばば、先達せんだつてき來た與太公よたこうが又また來たぞ。モウ何時なんどきぢやと思おもふて居ゐるのだ、

好い加減に起きぬかい

家の中より、中婆の聲として、

婆「誰れぢや誰れぢや、折角夜中の夢を見て居るのに、門口であた八釜しい吐す

奴は何奴ぢやい

與「誰でもないワイ、俺様ぢや」

婆「俺様と言つたつて名を言はな分るかい、貴様も智慧の足らぬ奴ぢやなア、目

に見えぬ肝腎なものを落として來よつたと見えるワイ

與「コラコラ三途の川の鬼婆奴、何を愚圖々々と言つて居るのだい。早く手水を

つかつて與太サンの一行に、澁茶でも汲まないかい

婆「八釜しい言ふな、病人があるのに病氣に障るワイ、【ゲン】の悪いことを言

ふて呉れな、冥土か何ぞの様に三途の川ぢやのと、此處は一途の川ぢやぞ

與「ヤア時節柄物價下落の影響を受けて、ドツと踏張りよつて二途を引き下げた

な、サ、投げ賣り投げ賣り、只より安い買ふたり買ふたり。このカリカリ糖は食

べれやおいしい、食や美味しい、ボロリボロリと齒脆うて齒につかぬ、濕る例しも

與「オイオイ彌次公、何を怕々して居るのだ、婆アサンが結構な茶をヨンデやら
うと云ふて居るぞ。早う来て一杯グツと頂戴せぬかい」

彌「モシ宣傳使様、どうしませうかな」

勝「兔も角這入つて見ませうか」

三人は與太彦の後に隨いて門口を跨げた。這入つて見れば外から見たよりは、
比較的廣き二間造りの座敷に、この家の主人と見え中年増の婆が横はつて居る。

その傍に少し若さうな一人の婆が、何かと病人の世話をして居る。

勝「ヤア見れば當家には御病人が、おありなさると見える。是れは是れは御取込

みの中に大勢のものが御邪魔を致しました」

婆「ハイハイ、ようマア立寄つて下さつた。此處は一途の川と云つて、お前サン

等の身魂の洗濯をする處だ。二人の婆が「かたみ」代りに、往來の人の身魂の皮

を脱がして洗濯をする處だ。サア此處へ來たが幸ひ、眞裸にして親讓りの皮を脱

がして上げやう。お前の顔は蕪の千枚漬ぢやないか、随分厚い皮だ。サア一枚々々

隙がいつても仕様がない、年寄に苦勞を掛けて困つた人だな、これもウラル彦の

神様の御命令ぢやから仕方がないワ。お前等は三五教の宣傳使や信者であらう、ア、三五教と云ふやつは、男子ぢやとか女子ぢやとか吐して、俺達の世の中を奪うとする奴ぢや。お前もその乾兒だからエーイ出刃でも持つて来て、その厚い皮を剥いて遣らうかい。男子の方はまだしもだが女子と云ふ奴は瑞の御魂で、カメリオンの様な代物だ。アンナ奴の立てた教に呆けて、まだそこら中に開きに往くとは不都合千萬、エーイ腰の痛い事だワイ』

と右手に出刃を持ち左手を握り、腰の邊を三つ四つポンポン打ちながら、婆『ア、エーイ、腰の痛いこつちや』

彌『オイ貴様はウラル教の悪神の乾兒だな。道理で星の紋の付いた布團を着たり、羽織まで星の紋を着けてるよるワイ、コラ婆アサン貴様こそ改心したらどうだい』

婆『エーイ八釜しいワイ、常世姫命様のお臺サンが病氣で寝て御座るのに、何をガアガアと騒ぐのだ。神妙にせぬと十萬億土と云ふ處へ、送り届けて萬劫末代この世へ上がれぬ様にして遣らうか』

與『何だ出刃を提げよつて、強壓的に矢張りウラル教はウラル式だ、奥州安達ヶ

原の鬼婆見た様な奴だなア。貴様はかうして此川邊に巢を構へよつて、三五教の宣傳使や信者の身魂を引抜く奴ぢやな。コレヤ、その手は喰はぬぞ、貴様の身魂を「こな」サンが引抜いてやらうか」

婆「何ほど八釜しく、【じたばた】しても恟とも動くものかい。俺は善の假面を被つてエルサレムの宮に、出入をして居つた常世姫命の一の家來の、木常姫の生れ替りだぞ、酢でも蒟蒻でも往く婆でないぞ」

彌「貴様は木常姫の生れ替りだな、木常姫と云ふ奴は仕方のない奴だ」

婆「仕方がなからう、小鹿峠の二十三峠の上で、この婆が貴様を苦しめた事を覚えて居るだらう、恐かつたか恐れ入つたか」

彌「エー何だか俺の背に蛇がとまつたかと思つたら、貴様だつたなア。何をへらず口叩きよるのだ、愚圖々々吐すと言靈の發射だぞ」

木「オホ、仰有るワイ仰有るワイ、あの時に日の出別と云ふ我樂多神が出て來よつて、いらぬチヨツカイを出しよるものだから、戦ひ利あらず、時非なりと

斷念して、茲に第二の作戦計畫を立て、手具脛引いて待つて居たのだ。モウ斯う

なつては此方のものだ、袋の鼠も同様、これや此出齒の言靈で靈なしにしてやらうか」

彌「アハ、、、、、、婆の癖に剛情な奴だなア。貴様のやうな奴は屹度死んだら、三途の川の脱衣婆の後任者となつて、終身官に任ぜられる代物だな」

婆「オホ、、、、、脱衣婆の役は俺の姉さまの役だよ、わしは其妹だ、酢でも蒟蒻でも梃でも棒でも、いつかないつかな悔ともせぬ、我が強い岩より堅いカンカンの鬼婆だ。如何に三五教の宣傳使でも此婆には敵ふまい。一遍に行かねば、二度でも三度でも、假令十年百年千年かかつても、貴様の身魂を抜き取らな置くもの

かい」

彌「何と執念深い婆ぢやないか、早く修羅の妄執を晴らしよらぬかい。天國に往くのが好いか、地獄に行くのが好いか、此處は一つ思案の仕處ぢやぞ」

婆「俺は天國は大嫌ひぢや。天國へ往かうとする奴を片つ端から、靈を抜いて地の底へ送るのが、俺の役だ。偽の變性男子だぞ。此處に寝て居る常世姫の懸る肉體は、偽の日の出神ぢや、龍宮の乙姫もタンマには憑つて來るぞ。三五教の奴は、

く分つて居るぞ」

婆「貴様達は三五の月の御教だと吐して居るが、その月は運の盡ぢや、片割月ぢや、ソノナ月が間に合ふか。

十五夜に片割月はなきものを

雲に隠れて此處に半分

と云ふ事を貴様は知つて居るか、本當の眞如の月は、此處に半分どころか、丸で隠れて居るのだ、切ればらばら扇の要だ。三五教は自在天と盤古大神の系統の神に、ばらばらに骨を抜かれよつたぢやないか、肝腎の要は此處に握つて居るのぢや。神の奥には奥があり、その又奥には奥がある、その又奥に奥がある、昔々去る昔、ま一つ昔の其昔、その又昔の大昔から、この世を自由に致さうと思つて、八頭八尾の大神様や、金毛九毛のお稻荷様、酒吞童子のお身魂様が、この一途の川の片傍に、仕組を致して居るのを知らぬか。好い加減に目を醒まして、魂をこ

ちらへ潔く渡して、生れ赤子になつて悪神の眷族にならぬかい」

彌「アハ、コラ二人の婆、何を劫託ほざきよるのだ。勿體なくも五六七大神

様が地の高天原に顯現なされた以上は、何程貴様等が火になり蛇になり猿になり

狼になり狸になり、或は大蛇、狐、鬼になつて、黄糞をこいて藻掻いたつて駄目

だぞ。一日も早く改心を致したがよからう」

婆「イヤイヤ、誰が何と言つても、假令百遍や二百遍、生命がなくなつても、誠

の道は嫌ひだ。誠の道と見せ掛けて悪を働くのが俺達の身魂の性來だ。金は何處

までも金ぢや、瓦は何處迄も瓦ぢや。俺達は善の假面を被つて、高い處へとまつ

て、熱さ寒さも知らず顔に、世界の奴を睨み下ろして居る鬼瓦ぢやぞ」

與「こりや鬼婆、イヤ鬼瓦、道理で冷酷な奴ぢやと思つて居つた」

婆「定つた事だ、俺達の眷屬や系統のものが世界の奴の靈をスツクリ引抜いて、

鬼瓦の靈と入替へをして置いたから、世の中の奴は皆冷酷無殘な動物靈になつて、

餓鬼修羅畜生の境遇になり、優勝劣敗、弱肉強食の體主靈從的非行を盛んに續け

て居るのだ。最早三千世界は九分九厘まで、俺の心の儘に曇つて來居つたが、困

ほしいほしいが重なつて、目にまで星が這入つたワイ。蛙の干乾の様な瘦た身體になつても、それでもまだ欲しいワイ。欲に呆けた爲に俺の着物も梅雨が来て、アチラコチラに星が入つて来た、早う土用が来てほしいワイ、土用干でもせな星がとれぬワイ」

彌「コラ婆アサン、その星を取つたが好いのか、とらぬが好いか、どつちやか返答が一寸きかしてほしいワイ」

婆「着物の星は取つてほしいが、俺のほしいは取つてはならぬワイ」

與「イヤア此婆、五右衛門風呂の蓋のやうな事を吐きよるな、入るときに要らぬ、入らぬときに要る風呂の蓋だ。オイ風呂蓋婆、梅干婆、貴様も棺桶に片足突込んで居つて、好い加減に我を折つたらどうだい。ほしい、おいしい、可愛い、憎い、

欲に高慢、恨めしい、苦しい八つの埃と吐かす十九世紀の轉理數のやうな奴だな」

婆「エーエー言はして置けば止め度なく、痢病患者のやうにビリビリとよう垂れる奴ぢや。くだらぬ理屈を管々しく垂れ流してエ、汚苦しいワイ。何も彼も綺麗

さつぱり御塵拂ひをして、この婆に根こそげ奉納しやらぬかい。愚圖々々して居

ると、俺の方から行動を開始するぞ。コレコレ常世姫の神、もう起きてもよからう、サア早く起きて下さい、二人寄つて此奴等四人を眞裸にして、ソツと猫糞をキメやうかいな」

伏婆むくむくと起き上り、

「ヤア最前から病人と詐はり、様子を考へて居れば、ようマア理屈を垂れる娑婆亡者、此處は三五教の女子の系統の魂がほしさに、寝ても起きても一途の川の脱衣婆アサンぢや、車の兩輪、飯食ふ箸、人間の二本のコンパス、兩方から【ばば】と【ばば】が狭み打ちをしてやる、サアどうぞぢや」

四人一度に身構へをなし、

「ヤア何と吐いた、サア來い勝負」

と手に唾し、グツと睨み付けた。婆は手に手に出刃をひらめかし、突いて掛るを四人は汗みどろになつて、前後左右に身を躲し、奮戦格闘すること殆ど半時ばかり、勝彦は常世姫の出刃に、腰骨をグサリと突かれた途端に目を覺ませば、豈圖らむや一行四人は二十五峠の麓の谷底に風に吹かれて落ちこみ居たりける。

第一五章 丸木橋〔五六五〕

二十五番峠の頂上より強烈なる烈風に吹き拂はれ、谷間に陥りし勝公一行は、息吹き返し起き上り、互に顔を見合せて、

勝「ヤア、此處はコシカ峠の谷底だ。一途の川とやら云ふ竝木の松の茂つた一家に於て、常世姫や木常姫の悪靈と格闘をやつて居た積りだに、これは矢張り夢だつたかいなア」

彌「ア、宣傳使様、貴方もソナ夢を見たのですか、私も見ましたよ、エグイ顔をした婆アだつたねー。目の周圍から鼻の邊りと云ふものは紫色に腫上つて、随分見つともよくない常世姫の寢姿、一目見るよりゾツとした。それに又、星の紋のついた水色の羽織を着た中婆の嫌らしい顔つたら、今思つても身軀中がゾクゾ

クするやうですワ。それに與太公の奴、一つ家の窓を覗いて、芝居がかりに手踊をやるをかしさ、可笑しいやら、恐ろしいやら、気分が悪いやら、腹が立つやら、疝が立つやら、イヤもう三五教の精神も何處かへ行つて仕舞うて、見直し聞き直し、宣り直しと云ふ餘裕がなかつた。オイ與太公、六公、貴様は如何だつた。夢の中の一人だつたぞ」

與「俺もチヨボチヨボだ、一途の川だとか、欲しい一圖だとか、婆が吐いて居たよ。餘程よい血迷ひ婆アだワイ」

六「鬼婆が出刃をもつて、突つかかつて來よつた時にや、この方は無手だ、先方は獲物を持つて居るのだから一寸ハラハラした途端、目が醒めたのだ。ア、嫌らしい夢を見たものだ。夢の浮世と云ふからには、何處にかう云ふ事實があるかも知れないよ」

彌「夢と云ふものは神聖なものだ。吾々が社會的の總ての羈絆を脱して、他愛もなく本守護神の發動に一任した時だから、夢の中の事實はきつと過去か、現在か、未來のうちには實現するものだよ」

六「さうだらうかなア、過去の事だらうか、未来の事だらうかな」

勝「それは、この夢の實現は數十萬年未來の事だ。二十世紀と云ふ惡魔橫行の時

代が來た時、八尾八頭や金毛九尾の惡靈が再び發動しよつて、常世姫や木常姫の

靈魂の憑り易い肉體を使つて、行りよる事だよ。天眼通力によつて調べて見ると、

何でもこれから良の方に當つて、神さまの公園地に、夢の中の男子とか女子とか

が現はれて、ミロクの世の活動を開始されるのを、何でも變性男子の系統の肉體

に懸り、善の假面を被つて教への子を食ひ殺し、玉取りをやる事の知らせであら

う。ア、二十世紀と云ふ世の中の間人は實に可憐さうだ。それにつけても、嚴靈、

瑞靈や金勝要の神、木花姫の吞劍斷腸の御苦しみが思ひやられる哩。嗚呼惟神靈

幸倍坐世惟神靈幸倍坐世」

與「吾々は過去現在未來の衆生濟度のため、この清らかな川邊に落ち込んだのを

幸ひに、御禊を修し、神言を奏上してミロク神政の建設の太柱、男子女子をはじ

め、金勝要の神、木花姫の靈の鎮まりたまふ肉の宮の爲に、祈りませうか。この

世の中が萬劫末代維持していけるやうに、善ばかりの花の咲くやうに」

勝「大賛成です、皆サン與太彦サンの提案に従つて即時決行致しませう」

彌、六「吾々も賛成です」

と云ひ乍ら、着衣を川邊に脱ぎ捨て、谷川にザンブとばかり飛込んだ。四人は一

度に水に浸り身體を清めて居る際、ブルブルブルと音を立てて、六公は水底に姿

を隠して仕舞つた。勝公を初め三人は一生懸命に兩手を合せ川上に向つて天津祝

詞を奏上し終つてフト傍を見れば六公の姿が見えぬ。

勝「ヤア六サンは何處へ行つた。オーイ六サン何處だ」

と呼べど叫べど何の應へもなく、激潭飛沫の音轟々と聞ゆるのみ。彌次彦は、

「ヤア大變だ、六公が何處かへ沈没しよつたな、これや斯うしては居られぬ哩、

何とかして搜索をせなくてはならぬ、愚圖々々して居ると澤山の水を呑んで緋れ

ては取返しがつかぬ。オイ與太公どうせうかなア」

與「どうせうたつて仕方がないサ、大方六公の奴、潜水艇氣取りで何處かの水底

に暫時伏艇して居るのだらう。彼奴は水練に妙を得た奴だから、決して溺れるや

うな氣遣ひはないよ。貴様が松の枝に引つ懸つて居た時も、あの着物のまま谷川

を泳ぎ渡つて平氣で居る奴だから大丈夫だ。吾々を一寸驚かしてやらうと思つて洒落て居るのだよ」

彌「なにほど水泳の達人だと云つても油斷は出来ない、さう樂觀する譯にもいかない、諺にも、好く泳ぐものは好く溺る、と云ふ事がある。此奴はどうしても俺の考へでは名替をしよつたに相違ない」

與「名替つて何だい、流れの間違ひだらう」

彌「馬鹿云ふな、川底土左衛門と改名したらうと云ふのだ」

與「土左衛門とは怪しからぬ、眞に大變だ。それだから道中に四人連はいかないと云ふのだ。オイ六公、生きて居るのか死んで居るか、ハツキリ返事をせぬかい」

彌「死んで居るものが返事をするかい、氣を落着けないか」

與「一息を争ふ水の中だ、愚圖々々して居る間に息が切れたらどうするのだ。コナ時に落着き拂つて居る奴は非人道的の骨頂だ。これがどうして周章狼狼せず
に居られうかい。オーイ、オーイ、六公、六道の辻を通るのは未だ早いぞ、コー
カス参りの途中ぢやないか、早く浮かばぬか浮かばぬか、何處に踏み迷ふとるの

だ。オーイ オーイ

勝「エ、仕方がない、滅多にこの激流を潜つて上る筈もなし、大方渦に巻込まれ

て流れたのかも知れませぬよ、谷川傳ひに此處を下つて探して見ませうか」

彌「探さうと云つたつて、アレあの通り碧潭激流、何うする事も出来ぬぢやあり

ませぬか。コンナ時に鷹彦サンが居て呉れば搜索隊になつて貰ふのに大變都合が

好いけれどなア、追々日も暮れて来る、困つた事だ。愚圖々々して居ると吾々迄

がドンナ災難に遇ふかも知れぬ、マア六公は六公で仕方がないとして、吾々三人

は神様の大事なお使ひ道具だ。あまり足許の暗くならない間に頂上まで、駆けつ

けませう」

と先に立つて谷邊を駆け登る。二人も後に従ひ辛うじて黄昏頃、二十五番峠の頂

上の山道に辿り着いた。

彌「サア宣傳使様、漸く吾々三人は無事に元の地點に凱旋しましたが、六公の奴

困つたものですなア。小山村のお婆アサンが聞いたなら、嘸歎く事でせう、老爺サ

ンも中風なり、あれ程喜んで居たものを、ア、世の中と云ふものは残酷なものだ。

本當に煩悶苦惱の娑婆世界だ。何とかして萬有一切どこ迄も不老不死で悪魔の襲
來や不時の過ちの無い完全なる世界を作りたいたいものですかア

與「ア、人間を老少不定とはよく云つたものだ。無常迅速の感益々深しだワイ」

勝「泣いても悔んでもモウ仕方がない、暮れる時が来れば日は暮れる、人間も死

ぬ時節が来たら死なねばならない、櫻の花は永久に梢に止まらず、頭の髪は何時

迄も黒い艶を保つ事が出来ないのは世の中の習はせだ。アアもう過ぎ越し苦勞

はサラリと谷川へ流して刹那心を樂しまうかい」

與「實に切ない刹那心だナア。過越し苦勞をせまいと思つても、今の今迄ピンピ

ンと噪いで居つた六公の事がどうして忘れる事が出来やうぞ。一昨日も六公と、

お前サン等二人の行方を捜した時には六公の美しい心が現はれて居た。見かけに

よらぬ親切な男だつた。それはそれは宣傳使様、貴方達のお姿が見えなかつた時

には、あの男はどれだけ心配をしようつたか知れませぬぜ。二人の友達がもし國替

をして居るのなら、私も一緒に川へ身を投げてお伴をしたいと迄云つた位だ。ア、

可憐さうな事をした。僅一日道連になつても十年の知己のやうに親切を盡す六公

心の麗しさ、これを思へば吾々も六公の道連になつてやりたいやうだ。ア、もう此世では彼奴の顔を見る事が出来ぬのか、情ない可憐さうだ

と涙含み、身の置處なきさまに大地に身を投げた。

彌「コラコラ與太公、しつかりせぬか、失望落膽するのは貴様ばかりぢやない、俺だつて同じ事だよ」

と、又もや涙をハラハラと滲し顔に袖をあて、道の上へべたりと倒れ、身を揺つて遂には兩人聲をあげて泣き叫ぶ。勝公も涙の目を瞬たたきながら、

勝「コレコレ彌次彦サン、與太彦サン、さう氣投げをするものぢやない、チト確りせぬか。男と云ふものは假りにも涙を滲すものぢやない、あまり女々しいぢや

ないか

と自分も亦落つる涙を袖にて拭ふ。

愁歎の幕は漸く神直日大直日に見直し聞き直し幽かに巻上げられた。短き夜は既に明け離れ足許は仄と明かなくなつて來た。一同は六公の身の上が矢張り氣に懸ると見え東天に向つて合掌し、天津祝詞を奏上し、次で六公の無事生存せむ事を

祈り、終つて又もや急坂を西北さして下り行く。

足竝早き下り坂にもいつしか暇を告げて、又もや茫茫たる原野を走り行くこと

數百丁、丸木橋のかけられた邊に辿りついた。

彌 宣傳使様。大分足も草臥れました。此處に腰をおろして一休み致しませうか

勝 才、この川だつた、六公はこの水上で見失ひ、残念な事をしたが、今頃はど

うなつて居るだらう

與 太彦は忽ちウンウンと唸り出し、兩手を組んで身體を動揺し始めた。

彌 ヤア又しても神憑りになりよつた。モウ惡魔の襲來は懲り懲りだ。オイ與太

公の體に憑依つて居る惡靈共、速に退散致さぬか

與 口、く、く、く、く、く、く、六ぢや六ぢや

彌 工、碌でもない六の奴、貴様土左衛門になりよつて幽世の人間となりながら

未だ娑婆が戀しうて迷うて來たか。好い加減に執着心を去つて、一時も早く靈神

になれ。貴様はお竹を残して死んだのだから残り惜からう。残念なのは尤もだが、

モウ斯うなつては仕方がない、早く神界へ【とつと】と往つてお竹の場所を拵へ

彌「ヤアそれや本當か、本當なら俺も嬉しい哩。これこれ宣傳使さま、餘り甘い話だが、此奴は邪神が誑かして居るのではあるまいか、貴方一つ審神をして見て下さいな」

勝「神に間違ひはありませんまい、臆て六サンの肉體に遇はれませう。暫く此處に坐つて神言を奏上し、神様にお禮を申しませう。もしもし、六サンとやら、モウ判りました、お引き取りを願ひます。一二三四五六七八九十百千萬、惟神靈幸倍坐世、惟神靈幸倍坐世」

六公の生靈は忽ち肉體を離れた。與太彦は元の如くケロリとしながら、與「ア、矢張り六公は生て居ますなア、とうとう憑依つて來よつて、アンナ事を云ひよつた。餘り六公々々と思ひ詰めて居たものだから、此方の一心が届いて六の生靈に感應したと見える、私の口を借つて云つた事が本當なら嬉しいがなア」三人が橋の袂に端坐して稍沈黙に耽る折しも一人の男を背負うて川から上り、ノソリノソリと上つて來る大男がある。後よりガヤガヤと囁きながら十數人の荒くれ男がついて來る。三人は怪訝な顔をして此男を凝視て居る。

男をとこ「ヤア貴方あなたは三五教あななひけうの宣傳使様せんでんしさま」

三人さんにん「ヤアお前まへは鳥勘三郎からすかんざぶらうだないか」

彌や「ハイ左様さやうで御座ございます、六サンろくを連れて参まゐりました」

彌や「夫それは夫それは有難ありがたい、御苦勞ごくらうだつた。六サンろくは物言ものいひますかな、イヤ未まだ生いきて居を

りますか」

鳥からす「物ものも言いはず動うごきもしませぬが、身からだ體だの一部いちぶに温味ぬくみがありますので、火ひでも焚た

いてあたらしたら、此方こつちのものにならうも知しれぬと考かんがへて、ブカブカと流ながれて來く

るのを吾々われわれ一同いちどうが命いのちを的まとに川かはへ飛とび込こみ拾ひろつて來きました」

勝かつ「それは有難ありがたい、唯今ただいまの先さき、六公ろくこうが此處ここにやつて來きてタツタ今いま、お目めに懸かると

云いつて居ゐました」

鳥からす「妙めうですなア、先程さきほど此處ここへ來きたと合點がてんが往ゆかぬ。さうすると此奴こいつは六サンろくだ

やないのかなア、大方おほかた化物ばけものだらう。エ、偉えらい苦勞くらうをさせよつて、叟どたぬき狸め奴めが、打うち

つけて蹂躪ふみにじつてやらうか」

彌や「マアマア待まつた待まつた、ソナ手荒てあらい事ことをしてどうなるものか、夫それこそ本當ほんたう

に死んで仕舞はア。そつと其邊におろして呉れ、これから靈よびの神業だ」

鳥「ア、何だかテント、譯が分らぬやうになつて來たワイ。マア仕方がない、下

さうかい」

と芝生の上にとつと下した。

彌「オ、六公、貴様は仕合せものだ、待て待て今に魂返しをやつてやらう。サア

宣傳使様、天の數歌を始めませうか」

勝彦は無言つて、首肯しながら拍手を打ち聲も細く靜に落着き拂つて、一二三

四五六七八九十百千萬と二回繰かへした。六公の體はムクムクと動き出し、直に

起上り三人の顔をキヨロキヨロと眺め、

六「ア、お前は彌次公、與太公か、ヤア宣傳使様妙な處で遇ひました。三途の川

を渡り損ねてスツテの事で二度目の國替をするところだつたが、烏勘三郎と云ふ

男、十數人の弟子と共に身を躍らして川に飛び込み私を救ひ上げ、背に負ふて何

處ともなしにトントン走り出したと思つたら丸木橋の袂、お前サンはやはり幽界

の旅をして居なさるのか、今度は自分一人だと思つて居たのに何處までも交際の

よい御親切なお方だ。持つべきものは朋友なりけりだ。ア、唯神靈幸倍坐世、

惟神靈幸倍坐世

彌次彦は六公の背を平手で三つ四つ、力を籠めて擲りつけた。

六「アイタ、貴様は何をするのだい。驚いたな、娑婆に居る時から亂暴な奴

だと思つて居たが、貴様未だ冥途に來ても改心出來ぬか」

彌「此處は冥途ぢやないぞ、二十五番峠を下つて數百丁來たところだ。お前は谷

川に溺れて一旦縋れて居つたのだ。それを神様のお引き合せて勘三郎サンの親内

の者に助けられ、此處に來たのだ。確りして呉れ」

六公は目を擦りながら今更のやうな顔をして四邊を念入りに見廻し、

「ヤア、矢張どうやら娑婆らしい、ヤ、皆サン、偉い御心配をかけました、有難

う。これはこれは烏勘三郎サン、その他親内の御一同、よう助けて下さいました。

命の親だと思ふてこの御恩は生涯忘れませぬ」

烏「ヤア氣がついて何より結構でした。神様にお禮を申しませう」

茲に一同は神言を奏上し、宣傳歌を歌ひ、又もや四人の一行は勘三郎その他に

厚く禮を述べ、丸木橋を渡つて二十六番峠を指して進み行く。

（大正一一・三・二五 舊二・二七 加藤明子録）

（昭和一〇・三・一六 於嘉義市嘉義ホテル 王仁校正）

第一六章 返り咲〔五六六〕

三五教の宣傳使 凡ての枉に勝彦は

三枚羽織に身をかため 異様の姿トボトボと

十八坂を乗り越えて 十九や二十の山坂を

氣も若々と登り行く 彌次彦、與太彦兩人は

掴まへ所の無い様な 屁理屈放りつつ瘦馬の

足もワナワナ ブウブウブウ 屁放り腰の怪しくも

口くちに法螺吹ほらふき尻しりからは
太ふとき喇叭らつぱの吹ふきつづけ

雷かみなりサンも驚おどろいて
跣はだし足あしで逃にげる二十山はたちやま

峠たつげに登のぼつて一ひと休息やすみ
又またも、のり出だす膝栗毛ひざくりげ

聲こゑも鳥からすの勘三郎かんざぶろう
數多あまたの手下てした引き連つれて

三五教あななひけうの勝公かつこうが
四よつたりづ人連れの行ゆく先さきに

怪あやしき姿すがたの大聲おほこゑに
ドツコイやらじと手てを擴ひろげ

得物えものを執とつて立たち對むかふ
こちらは蛙かはづの向むかふ見みず

瑞みづの御靈みたまの幸さちはひに
稜威いづの言靈ことたまさやさやと

天地てんちに向むかつて詔のりつれば
流石さすがに猛たけき荒すさび男をも

膽きもを潰つぶして降參かうさんし
これや堪たまらぬと大道だいだうに

犬いぬつく這ばひの可を笑かしさよ
負まけても名なだけは勝彦かつひこの

負まけて堪たまるか勝かちつづけ
一いちどう同續つづけと先さきに立たち

峠たつげの數かずも五いつつ越こえ
しこけき小こ家やに立たち寄よつて

盲目めくらの婆ばアサンに邂逅めぐりあひ
椽のきに腰こしかけ一ひと休息やすみ

爺^ぢサン婆^ばサンの悲^ひ劇^{げき}の幕^{まく}を 聞^きいて悟^{さと}りし六^{ろく}公^{こう}の
 昔^{むかし}に負^おふた古^{ふる}傷^{きず}を 曝^{さら}け出^だされて六^{ろく}サンは
 碌^{ろく}々^く答^{こた}辭^ひも泣^なく涙^{なみだ} 焼^やけ木^ぼ杭^{くわ}に又^{また}しても
 火^ひが付^つく様^{やう}な縁^{えん}談^{だん}に 爺^{ぢい}サン婆^ばサンは扨^{さて}措^をいて
 六^{ろく}公^{こう}サン^の喜^{よろこ}びは 天^{あま}の岩^{いは}戸^との開^{ひら}けたる
 思^{おも}ひに一^{いち}同^{どう}勇^{いさ}み立^たち コーカス山^{ざん}の參^{さん}拜^{ぱい}を
 終^{をは}つて再^{ふた}び元^{もと}の鞞^{さや} をさまる縁^{えにし}の目^め出^で度^たやと
 ここに暇^{いとま}を告^つげ乍^{なが}ら 登^{のぼ}つて來^きたのが名^なにし負^おふ
 眺^{てう}望^{ぼう}絶^{ぜつ}佳^かの二^に十^{じふ}三^{さん}番^{ばん}峠^{たうげ}の上^{うへ} 吹^ふき來^くる風^{かぜ}に煽^{あふ}られて
 息^{いき}もせきせき進^{すす}みゆく 二^に五^ご番^{ばん}峠^{たうげ}の頂^{いただき}に
 佇^{たたず}む折^{をり}しも忽^{たちま}ちに へボ鎮^{ちん}魂^{こん}の神^{かむ}憑^がり
 亂^{らん}癡^ち氣^き騷^{さわ}ぎの幕^{まく}を開^あけ 谷^{たに}間^まに陥^{おち}り四^{よつ}人^{たり}は
 暫^{しば}時^し氣^き絶^{ぜつ}し幽^{かく}界^{りよ}の 一^{いち}途^づの川^{かは}の渡^{わた}まで
 急^{いそ}いで來^きて見^みれやこは如^い何^かに 松^{まつ}の竝^{なみ}樹^きの蒼^{あを}々^{あを}と

茂る根下の軒家の

怪しき窓を覗き込み

生れついたる與太助の

與太公と婆の押問答

ブリんと押して中に入り

すつたモンダの諍に

大口あけて出刃（出齒）

を見せ三五教の身魂をば

抜いてやらうと力み立つ

可笑しい面の二人婆

三途川原の鬼婆の

俺は妹の木常姫

サア來い勝負と常世姫

此奴も出刃を振り上げて

四人に對つて切りかかる

茲に四人の宣傳使

飛鳥の如く翔け廻り

丁々發止、丁發止

蝶の春野に狂ふ如

汗を流して戰へば

流石の婆も立ち遅れ

アフンとしたと思ひきや

夢か、現か、幻か

サツと聞ゆる水音に

眼を覺せば川の底

底の分らぬ此不思議

泳ぎ自慢の六公が

如何はしけむブルブルと

おぼ 溺れて 忽ち 土左衛門
あと 後に 残つた 三人は

と 兔やせむ斯くや線香の
けむり 煙手 向ける 術もなく

よる 夜の帳は 下ろされて
あやめ 黑白も 分かぬ 眞の闇

ぜひ 是非なく 此處に 夜を明かし
なみだ 涙を 押へシホシホと

おほの がはら 大野ヶ原を 打渡り
みなおと 水音 高き 川の 邊に

たど 辿り着くなり 與太彦が
はな いき 鼻息 荒く 身慄ひし

く、く、く、く、と 口をきり
ろく 六の 生靈が 出て 來たと

ほざ 吐いて 一同の 膽をとり
ねごと 寢言を 吐く 折柄に

あら 現はれ 出でたる 大男
よ 能く 能く 見れば こそは 如何に

こゑ からす 聲も 烏の 勘三郎
ろく 六の 死骸を 背に 負うて

おく 送つて 來たのは 不思議なる
えにし 縁の 絲の 次々に

き 切れぬ 證か 言靈の
ちから 力に 忽ち 息を 吹き

あたり 四邊 キヨロキヨロ 見渡して
かつひこ 勝彦 サンか 與太 サンか

まへ お前は 彌次彦 屁放き 蟲
ここ 此處は 冥土か 現界か

合點が往かぬと思案顔 初めて氣がつきまだ俺は

生きて居たかと勇み立ち 勝彦サンに従うて

茲に四人は急坂を 辿り辿りてフサの國

都を無事に打ち過ぎて 名さへ目出度きコーカスの

神のお宮に参拜し 喜び勇み小山村

お竹の家に引き返し 勝彦サンの媒酌で

比翼連理の蒸し返し 老爺も婆も六サンも

兄の松公夫婦の者も お竹と共に勇み立ち

ここに愈合衾の 式を行ふ物語

聞くも目出度き次第なり。

小山村のお竹の生家は春の屋と謂ふ。爺サンの名は鶴助、婆サンはお龜、息子の名は松公、女房はお梅と謂ふ。鶴龜松竹梅の一家族に婿を加へて六人暮し、名も六サンの婿入り祝ひ、媒酌の役は勝彦の宣傳使。彌次彦、與太彦二人は六サン

の友人としてこの目出度き結婚の席に加はつた。三五教の誠一つの教を加へて此處に十曜の珍の身魂、目出度き酒宴一度に開く白梅の、薰り床しきお竹の姿、常磐の松の何處やらに、氣品も高き松サン夫婦、鶴の千歳の末永く、龜の齡の萬代も、五六七の世までも變らじと、結びの神の御前に、天津祝詞の太祝詞、言擧げ終つて酒杯の、數も芽出度き三々九度、此處に九人は勇み立ち、千代を壽ぐ酒宴の、眞最中に勝彦は、千代を祝する結婚の、歌を涼しく歌ひける。

世は久方の末長く

常磐の松の千代八千代

治まる御代を鶴の首

まつの神代の廻り來て

名さへ目出度きお龜サン

九十九の坂を幾度も

上りつ下りつ安々と

今より越えむ老の坂

春の野の如若やいで

二組揃ふた若夫婦

常磐の松の色深く

いつも變らぬ松サンや

花咲き匂ふお梅サン

園のなよ竹末長く

睦みて暮せ六の名の ついた男の六サンを

【一】、【二】、【三】、【四】の【五】迄も 【六】び親しみ【七】草の

千代に【八】千代に【九】重の 御空の色に擬ふ如

清く涼しく青々と 【十】つぎの道を何時迄も

【百】歳、【千】歳、【萬】歳 幾【億】萬年の末までも

互に變るな變らじと 親しみ暮せ神の道

直く正しくふみしめて 天津御空の星の如

濱の眞砂の數の如 御子を生め生め【餅】を搗け

子【餅】をタント搗き竝べ 夫婦仲良く世帯【もち】

清きその名も大名【持】 疝癢【持】は止めにして

婿【持】嫁【持】金を【持】 寶を【持】て【望】の夜の

月の鏡の照ら照らと 輝き渡れ若夫婦

千年萬年暮れるとも 今の姿で若々と

神の恵を味へよ 恵の露に潤へよ

ア、惟神々々
ア、惟神々々

みたまさちはへま
みたまさちはへま
靈幸倍坐しませよ
靈幸倍坐しませよ

と歌つて酒杯を六公にさした。六公は恭しく押し頂いてお竹に渡した。茲に親子夫婦の杯は無事に済みける。彌「ヤアお目出度いお目出度い、サア之から六サンの番だ、一つ歌つて下さい」

六公「思ひ廻せば三年の昔 戀に焦れたお竹サン

天と地とのその中に コンナ綺麗な娘子は

又とあるまいあるまいと 慕うて通ふ坂道の

数重なりて漸うに ヤツと願を掛巻くも

畏き神の引合せ 比翼連理の樂みを

寝物語に喜びし 日數もあらしの風強く

心の駒の狂ひ出し 魂は荒びてウラル彦

神かみの教をしへの道みちに入り 飲のめよ騒さわげよ一寸いっすん先さきは
 闇やみの世界せかいぢやくヨクヨするな 太ふとう短みじかう暮くらしてやると
 悪わる胴どう据すゑて夜書よるひるの 區くべつ別べつも知しらず深酒ふかざけに
 醉ようて可か愛あい女房にようぼうを 打うつやら蹴けるやら殴なぐるやら
 夜書よるひる喧譁けんくわの絶たえ間まなく お竹たけの顔かほは生疵まなきずの
 絶たえた間まもなき憐あはれさを 屁へとも思おもはず暮くらして來きたが
 お竹たけは怒おこつて知しらぬ間まに 吾家わがやを出いでて親里おやざとに
 逃にげて歸かへつて知しらぬ顔かほ ここに私わたしも目めが醒さめて
 ま一度いちどお竹たけに添そひ度たいと 心焦こころあせれど手ても口くちも
 かかる由よしなく冷ひややかな 肱鐵砲ひぢでつぱうの續つづけ打うち
 男をとこと生うまれた六公ろくこうも 女房にようぼうの方ほうから見み捨すてられ
 何なんの顔かんばんあら男をとこ 仕樣事しやうごとなさにウラル教けう
 捕手とりての群むれに加くははつて 三五教あななひけうの宣傳使せんでんし
 信者しんじやと見みれば容赦ようじやなく 片かたつ端はしから引捉ひつとらへ

ウラルの神の立て籠る
ウラルの山へ連れ行きて

褒美の金に腸も
腐る許りに酒を飲み

調子にのつて此處彼處
尋ねて廻る目付役

小鹿峠に来て見れば
三五教の宣傳使

夢に牡丹餅食た様に
心の裡に雀躍し

當つて見ればこは如何に
神徳強き三五の

神の司の言靈に
ガラリと心を立直し

前非を悔いて神の道
教司に伴はれ

此處に誠の教を知り
二十峠を乗り越えて

山田の村の松の屋に
牡丹餅食はうと立寄れば

思ひ掛けなきお竹奴に
パツと出會はす顔と顔

お前はお竹と一言葉
聞くより早く驚いて

お竹は忽ち雲霞
裏口さして逃げて行く

ア、残念や残念や
又もお竹に嫌はれて

如何して男の顔が立つ

勝彦サンや彌次與太の

二人の手前も恥しく

一目散にトントンと

峠を指して立ち向ひ

林の中に身を潜め

息をこらして待つ程に

放つ屁問答の臭い仲

また三人に廻り會ひ

鎮魂歸神の神術に

魂の洗濯サラサラと

地獄の川まで進み出で

九死一生の目に會うて

人の情に助けられ

フサの都を乗り越えて

コーカス山の參詣で

両手を合せて神前に

額き祝詞の奏上し

何卒お竹と末永う

親子夫婦は睦じう

暮させ給へと願をかけ

目出度此處に立歸り

千代の契を結び昆布

苦勞するめや酒杯の

數を重ねて勇み立ち

尉と姥との契をば

結ぶ今宵ぞ樂しけれ

ア、惟神々々

靈幸倍ましませよ

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

親子夫婦のこの契

千代も八千代も變らざれ

この世を救ふ三五の

神の教を畏みて

家門長久子孫の繁榮

魂の生命の末永く

鶴と龜との勇ましく

松、竹、梅の何處迄も

榮えに榮えよ神の國

千秋萬歳萬々歳

千秋萬歳萬々歳

と歌ひ終つて酒杯をとり勝彦に恭しく獻した。お竹は起つて歌ひ始めた。

三五教の宣傳使

醜の魔神を言向けて

誠の道も勝彦の

神の恵も三つ栗の

仲とり役に救はれて

今日は芽出度き望月の

虧けては盈つる吾思ひ
思ひきつたる夫婦仲

枯木に花の咲き出でて
又もや交す夢枕

夢ではないか現では
あるまいかなと思ふ程

喜び胸に迫り来て
常世の闇も晴れ渡り

天の岩戸の忽ちに
開けし如き今日の首尾

ア、嬉しやな嬉しやな
世は垂乳根の父母の

名さへ目出度き鶴と龜
松と梅との兄夫婦

千代の睦びの六サント
心の丈けを語りつつ

強き悪魔に勝彦の
神の恵に助けられ

會うて嬉しき相生の
松の木蔭の尉と姥

幾久しくも末長く
愛しき妻よ夫よと

勇む心の玉椿
八千代の春に會ふ心地

花と匂へよ永久に
色は褪せざれ何時迄も

心の色も紅の
露の唇、月の眉

花咲き匂ふ花の山はなさきにおほはなやま 月日に擬ふ二つの目つきひにまがふたつのめ
 手足もまめに健かにてあし 日々ひびの生業なりはひいそ勵しみて
 家富み榮え三五いへとさかあななひの神かみの教をしへを四方よもの國くに
 海の内外うちとに輝かがやかし 天あまの岩戸いはとの神業しんげふに
 仕へまつらむ夫婦ふうふづ連れ 神かみが表おもてに現あれまして
 善ぜんと惡あくとを立別たてわける この世よを造つくりし神直日かむなほひ
 心こころも廣ひろき大直日おほなほひ 只何事ただなにごとも今迄いままでの
 惡戯事いたづらごとは宣のり直なほし 善よきに見直みなほし聞直ききなほし
 神かみの教をしへに服従まつろひて 幾千代いくちよまでも眞心まごころを
 神かみの御前みまへに捧ささぐべし 朝日あさひは照てるとも曇くもるとも
 月は盈みつとも虧かくるとも 假令たとへ大地だいちは沈しづむとも
 千代ちよに動うごかぬ夫婦ふうふなか仲 何時いつも變かはらぬ常磐木ときはぎの
 松まつの操みさをの青々あをあをと 五み六ろ七くの御代みよの來きたる迄まで
 父ちちと母ははとの御生命おんいのち 男子をのこ女子をみなの睦むつみ合あひ

守らせ給へ三五の 教を立つる大御神

百千萬の神々の 御前に頸根突抜きて

拜み仕へ奉る ア、惟神々々

靈幸倍坐しませよ ア、惟神々々

靈幸倍坐しませよ

と歌ひ終つた。ここに鶴龜の兩親を始め、松、梅の兄弟夫婦および彌次彦、與太彦の祝の歌節面白く歌ひ終つて目出度く合衾の式も相濟み、千代も八千代も變らじと神の御前にことほぎまつりぬ。

(大正一一・三・二五 舊二・二七 北村隆光録)

(昭和一〇・三・一七 於嘉義ホテル 王仁校正)

第四篇 五六七號

第一七章 一寸一服〔五六七〕

神かみが表おもてに現あらはれて

善ぜんと惡あくとを立たて別わける

奇くしき神代かみよの物語ものがたり

去さりぬる辛酉かのとりの年とし

聖きよき教をしへを菊月きくづきの

神かみの惠めぐみは世よの人ひとを

救たすけ給たまひて二九にくからぬ

十八日じふはちにちの眞晝まひる頃ごろ

松まつの神代かみよに因ちなみたる

〔松雲閣しようつんかく〕の離はなれの間ま

流ながれも清きよき小雲川こくもがは

緑みどり滴したたる竝木なみきの松まつを

吹ふく凧こがらしに送おくられて

轟とどろき渡わたる言靈ことたまの

功いさをも廣ひろく大橋おほはしや

綾あやの都みやこも大神おほかみの

深き恵みにヨルダンの川の流れの其の如く

清く響きし物語 善と悪との神界の

身魂の素性を説き明し 前人未聞の三界の

経緯を探る道の奥 青垣山を繞らせる

高天原や龍宮の館に仕ふる教へ子の

【外山豊二】、【櫻井重雄】 出口の入口【谷】の【口】

名も【清治】の三人の男 朝日の【加】げのい【藤】長き

筆の【すさび】の【新】しく 五百と六十七節の

五六七の神に因みたる この物語詳細に

説き明さむと村肝の心に【加藤】誓ひたる

【明】き教の大本を 述べ傳へむと久方の

空に輝く【瑞月】が 経と緯との神の教

千代に八千代に樹てむとて 褥の上に横たはり

轉ばし初めし口車 通ふ大道も恙なく

歩みつめたる今日の宵

二十五六七日に恙なく

【松雲閣】の奥の間に

筆執る人は【外山】氏

深山の奥の【谷村】氏

語り了せて【北村】氏

扉を開く【王仁】の口

治まる御代の御恵みを

ここに芽出度く靈界の

四の大巻【作】り了へぬ

五六七神政萬々歳。

梅咲き匂ふ如月の

五六七の巻の物語

明りの下に説き明す

五六七の御代を【松村】や

經綸もここに恙なく

【加藤】結びし神界の

世人の爲に【明】らけく

千代に八千代に言【祝】ぎて

夢物語拾餘り

五六七神政萬々歳

(附言) 本巻は大正十一年舊如月二十【五】日、二十【六】日、二十【七】日の三日間にて完成したり。

跋文 ばつぶん

神かみの御諭みことを蒙かうむりて

述のべ始めはじめたる靈界れいかいの

奇くしき神代かみよの物語ものがたり

神代かみよ許ばかりか幽界いうかいも

また現界げんかいも押竝おしなべて

神かみの隨まに隨まに口車くちぐるま

現幽神げんいうしんの三界さんかいの

峠たうげに立たちて三みツ瀬川せがは

三みツ尾峠をたうげや四よツ尾をの

峰みねの麓ふもとにそそり立たつ

黄金閣わうごんかくの蔭清かげきよき

教主けつしゆ館やかたに横臥わうくわして

三途せうづの流滔ながれたう々と

瑞みづの御魂みたまの走はしり書がき

十四じふしの卷まきのいや終はてに

その眞相しんさうを示しめすべし

三途の河は神界と

現界又は幽界へ

諸人等の靈魂の

行衛の定まる裁斷所

八洲の河原とヨルダンの

河とも唱ふ神聖場

惡の靈魂が行く時は

その川守は鬼婆と

忽ち變じ着衣剥ぎ

裸體となりて根の國や

底つ幽世へ落とし捨て

善の御魂の來る時は

川守忽ち美女となり

優しき言葉を使ひつつ

舊き衣服を脱却し

錦の衣服と着替へさせ

高天原の樂園へ

行くべき印綬を渡す也

善惡未定の靈魂が

來たれば川守また婆と

忽ち變り竹箒

振り上げ娑婆へ追返し

朝と夕の區別なく

川の流れの變る如

千變萬化の活動を

いや永遠に開き行く

善惡正邪を立別ける

是ぞ靈魂の分水河

千代ちよに流ながれて果はてもなし

抑そもそもこれの川かは水みづは

清きよく流ながるることもあり

濁にごり汚けがるることもあり

清せい濁たく不ふ定ていの有あり様さまは

集あつまり來きたる人ひと々びとの

靈みたま魂たま々々に映うつり行ゆく

奇くしき尊たふとき珍めづらしき

宇うち宙ちゆう唯いっの流ながれなり

激はげしき上うはつ瀨せ渉わたるのは

現げん實じつ界かいへ生うまれ行ゆく

靈みたま魂たまや蘇そ生せいする人ひと許ばかり

弱よわき下しも津つ瀨せ渉わたり行ゆく

靈みたま魂たまは根ねの國くに底そこの國くに

暗あん黒こく無む明みやうの世せ界かいへと

落おち行ゆく悲かなしき魂たまのみぞ

緩ゆるけく強つよく清きよらけく

且かつ温あたかく美うるはしき

中なか津つ瀨せ渉わたり行ゆくもの

至し喜きと至し樂らくの花はな開ひらく

天てん國こく淨じやう土とに登のぼる魂たま

それぞれ靈みたま魂たまの因いん縁ねんの

網つなに曳ひかれて進すすみ行ゆく

神かみの律みのり法りぞ尊たふとけれ

三せう途づの川かはの物もの語がたり

外ほかに一いち途づの川かはもあり

抑そもそも一いち途づの因いん縁ねんは

現げん世せに一いち旦たん生うまれ來きて

至善至眞の神佛の

教を守り道を行き

神の御子たる天職を

盡し了はせし神魂

大聖美人の天国へ

進みて登る八洲の川

清めし御魂も今一度

浄めて進み涉り行く

善一途の生命川

渡る人こそ稀らしき

一旦現世へ生れ来て

體主靈從の惡業を

山と積みたる邪靈の

裁斷も受けず一筋に

涉りて根底の暗界へ

墮ち行く亡者の濁水に

溺れ苦しみ渡り行く

善と惡との一途川

實にも忌々しき流れ也

ア、惟神々々

御靈幸へましまして

三途の川や一途川

滑稽交りに述べ立てし

この物語意を留めて

讀み行く人の靈魂に

反省改悟の信念を

發させ給ひて人生の

行路を清く樂もしく

歩あゆませ玉たまへと天地あめつちの神かみの御前みまへに澄すみ渡わたる

大空おほぞら輝かがやく瑞月ずゐげつが天照あまてらし坐ます大神おほかみの

遍あまねく照てらす光明くわうみやうに照てらされ乍ながら人々ひとびとの

身魂みたまの行衛ゆくゑを明あきりかに説とき示しめし行ゆく嬉うれしさよ

朝日あさひは照てるとも曇くもる共とも月つきは盈みつとも虧かくるとも

たとへ大地だいちは沈しづむ共とも誠まことの神かみの御諭みさとしは

萬劫まんごまつだい末代までいつ迄までも天地てんちの續つづくその限かぎり

變かはりて朽くちて亡ほろび行ゆくためしは永とほ遠はにあらざらめ

ア、惟かむながらかむながら神々々かむながらかむながら御魂みたま幸さちはへましませよ。

神諭しんゆに『松まつの代よ彌勒みろくの代よ神世かみよに致いたすぞよ云々うんぬん』とあり、彌勒みろくは至仁しじん至愛しあいの意いに

して、宇宙うちう萬有ばんいう一切いっさいの親也おやなり師也しなり主也しゆなりと説ときたまへり。讀者どくしやの中なかには、佛教ぶつけうの教典けうてんに

に由よりて釋迦しやかの説せつと引ひき合あはせ、ミロクは七佛しちぶつ出生説しゆしやうせつの中なかにある一佛いちぶつにして、大本おほもと

の神諭しんゆにある如ごとき尊たふとき位置ゐちにある佛ぶつ又は神かみにあらざると云いふ人ひとあり。佛書ぶつしよのみを讀よみたる人ひとの意見いけんとしては、最もつとも至極しごくなる見解けんかいと謂いふべしである。王仁おには、序ついでを以もつて本卷ほんくわんの末尾まつびに於おいて佛典ぶつてんに現あらはれたる彌勒みろくの位置ゐちを茲ここに掲載けいさいして、讀者どくしやの参考さんかうに供きようして見みようと思おもふ。

法華經ほけきやうの序品じよほん第一だいいちに

前略ぜんりやく

菩薩摩訶薩ぼさつまかさつ八萬人はちまんにんあり。皆みな阿耨多羅三藐三菩提あのおくだらさんみやくさんぼだいに於おいて退轉たいてんせず、皆陀羅尼みなだらにを得え、樂說辨才げうせつべんさいあつて不退轉ふたいてんの法輪ほふりんを轉てんじ、無量百千むりやうひやくせんの諸佛しよぶつを供養くやうし、諸佛しよぶつの所ところに於おいて衆もろもろの徳本とくほんを植うゑ、常つねに諸佛しよぶつに稱嘆しやうたんせらるることを爲え、慈じを以もつて身みを修をさめ、善よく佛ぶつ慧えに入り、大智だいちに通達つうたつし、彼岸ひがんに到いたり名稱みやうしよ普あまねく無量むりやうの世界せかいに聞きこえて、能よく無む數すう百ひやく千せんの衆生しゆじやうを度どす。その名なを、

一 文珠師利菩薩もんじゆしりぼさつ

二 觀世音菩薩くわんぜおんぼさつ

三 得大勢菩薩とくだいせいぼさつ

十七 十六 十五 十四 十三 十二 十一 十 九 八 七 六 五 四

常精進菩薩 じやうしやうしんじんぼさつ

不休息菩薩 ふぐそくぼさつ

寶掌菩薩 ほうしやうぼさつ

藥王菩薩 やくわうぼさつ

勇施菩薩 ゆうせぼさつ

寶月菩薩 ほうげつぼさつ

月光菩薩 げつくわうぼさつ

滿月菩薩 まんげつぼさつ

大力菩薩 たいりきぼさつ

無量力菩薩 むりやうりきぼさつ

越三界菩薩 おつさんかいぼさつ

跋陀婆羅菩薩 ぼつただばらぼさつ

彌勒菩薩 みろくぼさつ

寶積菩薩 ほうしやくぼさつ

十八 導師菩薩

右の如き菩薩摩訶薩八萬人と俱也

と記してある。この菩薩も靈界物語を全部通讀されなば、何菩薩は何神何命に當たるやといふことは自ら判明することと思ひます。

釋提桓因その眷屬二萬の天子と與に俱なり。復

一 名月天子

二 普香天子

三 寶光天子

四 自在天子

五 大自在天子

その眷屬三萬の天子と與に俱なり。

娑婆世界の主

六 梵天王

七 尸棄大梵

八 光明大梵くわうみやうだいほん

等とうその眷屬けんぞく萬二千まんにせんの天子てんしと與ともに俱ともなり。

八やつの龍王りゅうわうあり、

一 難陀龍王なんだりゅうわう

二 跋難陀龍王ばつなんだりゅうわう

三 娑伽羅龍王しやがらりゅうわう

四 和修吉龍王わしゅうきつりゅうわう

五 德叉迦龍王とくしやかりゅうわう

六 阿那婆達多龍王あなばだつたりゅうわう

七 摩那斯龍王まなしりゅうわう

八 優鉢羅龍王うぱつらりゅうわうなり。

各かく若じやく千せん百ひやく千せんの眷屬けんぞくと與ともに俱ともなり。

四よつの緊那羅王きんならわうあり

一 法緊那羅王はふきんならわう

二 妙法緊那羅王

三 大法緊那羅王

四 持法緊那羅王 なり。

各若千百千の眷屬と與に俱なり。

四の乾闥婆王あり。

一 樂乾闥婆王

二 樂音乾闥婆王

三 美乾闥婆王

四 美音乾闥婆王 なり。

各若千百千の眷屬と與に俱なり。

四の阿修羅王あり

一 婆稚阿修羅王

二 佉羅騫駄阿修羅王

三 毘摩質多羅阿修羅王

四 羅睺阿修羅王なり。

各若干百千の眷屬と與に俱なり。

四の迦樓羅王あり、

一 大威徳迦樓羅王

二 大身迦樓羅王

三 大満迦樓羅王

四 如意迦樓羅王 なり。

各若干百千の眷屬と與に俱なり。

韋提希の子阿闍世王若干百千の眷屬と與に俱なり云々。

と、示されてある。之を以て之を見る時は、大本教祖の筆先なるものは神の道と

は云ひながら、最初より佛神一體の神理により、現代人の耳に入り易きやうに佛

教の用語をも用ゐられてあることを覺り得らるのである。明治二十五年正月元

日に初めて良の金神様が出口教祖に神懸された時の大獅子吼は、

三千世界一度に開く梅の花良の金神の世になりたぞよ。須彌仙山に腰を懸け良

の金神世界を守るぞよ云々。

三千世界も佛教中の用語であり、良の金神も神道の語ではない。須彌仙山は佛教家の最も大切に於て居る靈山である。またミロク菩薩とか龍宮とか龍神とか、天子とか、王とか現はれて居るのは、悉く佛教の語を籍りて説かれたものであります。故に筆先にある王とは、八大龍王及諸佛王の略稱であり、天子と云へば明月天子、普香天子、寶光天子、四大天王その他諸天子、諸天王の略稱であることは勿論であります。自在天子、大自在天子、梵天王、その他王の名の付いた佛は澤山にあり、佛も神も同一體、元は一株と説いてある。また大自在天子のその眷屬三萬の天子と與に俱なりとあるを見れば天子とは即ち神道にて云ふ神子又は神使であります。要するに、神の道、佛の道に優れたる信者の意味になるのであります。天子は、また天使エンゼルとキリスト教では謂つて居ます。大本の筆先は教祖入道の最初より佛教の用語で現はせられたのであるから凡て佛教の縁に由つて説明せなくては、大變な間違ひの起るものであります。王仁は彌勒菩薩に因める五百六十七節を口述し了るに際し、佛教に現はれたるミロク菩薩の位置を示す

と同時に筆先は一切佛の用語が主となりて現はれて居ることを茲に説明しておきました。

ア、惟神靈幸倍ませ。

大正十一年十一月四日

(昭和一〇・三・一七 於嘉義公會堂 王仁校正)

~~~~~

靈界物語 第一四卷 如意寶珠 丑の巻

終り